独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
第６冊

旧練兵場遺跡Ⅵ

第一分冊

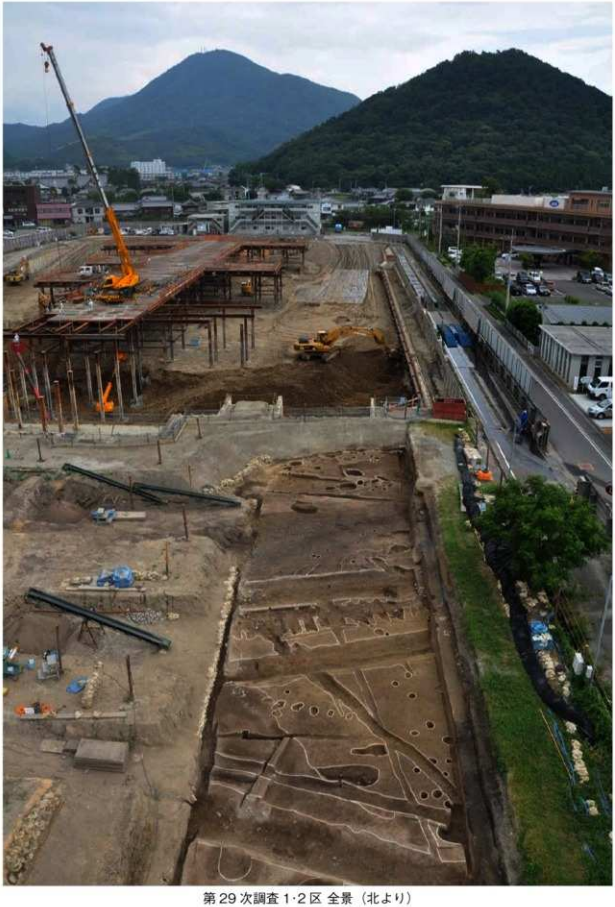
２０１６．３

香　川　県　教　育　委　員　会
独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター

第 28 次調査 7-10 ～ 14 区 全景（北西より）

上：第 28 次調査 7-10･11 区 全景（北西より）

下：第 28 次調査 7-10 ～ 14 区 全景（南より）

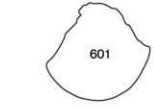


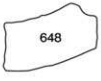
第 29 次調査 1･2 区 全景（北より）

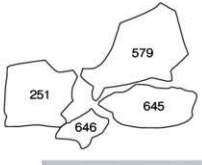
第 30 次調査 1E 区 完掘状況（北より）

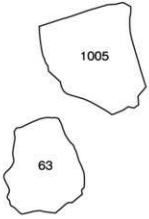
上・下：第 28 次調査 7-11 区 SK01 遺物出土状況（西より）

第 28 次調査 7-11 区 SK01 出土土器


601


648


579
251
645
646


1005
63

1539

90

序　文

本書は独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴い平成22年度から平成24年度に実施した旧練兵場遺跡第28・29・30・36次調査の報告です。旧練兵場遺跡はすでに刊行されている5冊の報告書によって、弥生時代から中世にいたる集落遺跡で、特に弥生時代の集落跡としては西日本でも有数の規模を誇ることが明らかにされています。

今回報告するのは善通寺病院統合事業に伴う調査の中でも西側に当たる調査区、及び南側・東側の小調査区で、他の調査区同様、弥生時代から中世にわたる数多くの遺構・遺物が発掘されました。特に西側に当たる調査区では弥生時代の遺構・遺物だけではなく、古代の土器を焼成した窯跡や掘立柱建物跡などがみつかり、古代においても集落が営まれたことがわかりました。これらの成果はこの付近の歴史を復元するうえで重要な資料となるものです。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました独立行政法人国立病院機構善通寺病院（現四国こどもとおとなの医療センター）をはじめ関係機関並びに地元関係各位に、厚くお礼申しあげますとともに、埋蔵文化財の保護について今後ともいっそうのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年3月
香川県埋蔵文化財センター
所長　真鍋　昌宏

例　言

1．本書は、香川県善通寺市仙遊町に所在する旧練兵場遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書に収録した調査は、独立行政法人国立病院機構善通寺病院（現、四国こどもとおとなの医療センター）から香川県教育委員会に委託され、香川県教育委員会を調査主体とし、香川県埋蔵文化財センターを調査担当として実施した。調査・報告書作成に伴う費用は、全て独立行政法人国立病院機構善通寺病院が負担した。

3．現地での第28次調査は平成22年4月1日から平成23年3月31日、第29次調査は平成23年4月1日から8月31日、第30次調査は平成23年11月1日から平成24年2月28日、第36次調査は平成24年9月1日から9月30日まで実施した。整理作業は香川県埋蔵文化財センターにて平成25年4月1日から平成27年3月31日まで実施した。

4．現地での発掘調査の担当は以下のとおりである。

第28次調査

主任文化財専門員	森　格也
主任文化財専門員	木下晴一
文化財専門員	森下友子
文化財専門員	蔵本晋司
文化財専門員	佐藤竜馬
文化財専門員	松本和彦
調査技術員	木全加珠美
調査技術員	白木　亨
調査技術員	東渕　愛

第29次調査

主任文化財専門員	西村尋文
文化財専門員	山元素子
文化財専門員	蔵本晋司
文化財専門員	小野秀幸
調査技術員	塩治千佳子
調査技術員	白木　亨

第30次調査

文化財専門員	信里芳紀

第36次調査

主任文化財専門員	木下晴一

5．現地調査及び報告書作成に当たって、下記の関係機関や多くの方々の協力や教示を賜った。記して謝意を表したい（敬称略）。

石丸恵利子（広島大学総合博物館）、平尾政幸（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所）、畑中英二（滋賀県教育委員会）、善通寺市教育委員会

6．本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。本報告書の整理作業は、第28次調査・第30次調査・第36次調査を森下友子、第29次調査を西村尋文・蔵本晋司・森下が担当した。執筆は第28次調査・第30次調査・第36次調査を森下、第29次調査を蔵本・森下が行い、蔵本の執筆部

分のみ記名した。編集は森下が担当した。

7．本書で用いる遺構名は、基本的には現地調査で使用したものを踏襲するが、複数の調査区にまたがる溝や河川は、現地調査の遺構名とは異なる遺構名で報告するものもある。

8．本報告書の測地系は、既往の調査区との整合を図るため旧来の日本測地系を使用し、平面直角座標は第Ⅳ系を使用した。標高は全て T.P.（東京湾平均海面）により表示した。

9．収録した写真や図面、自然科学的分析については、下記のように委託した。
航空写真（株式会社　四航コンサルタント）、土器実測（株式会社イビソク）、遺物写真（岡村印刷工業株式会社）、赤色顔料分析（株式会社パレオ・ラボ）、玉類材質分析（株式会社パレオ・ラボ）、花粉分析（川崎地質株式会社）、植物珪酸体分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）、植物珪酸体分析・樹種同定（株式会社古環境研究所）、花粉・珪藻分析（文化財調査コンサルタント株式会社）、樹種鑑定（パリノ・サーヴェイ株式会社）

10. 本報告書における弥生時代から古墳時代初頭の土器の年代観については、信里芳紀「弥生中期後半から古墳時代初頭の土器編年」（香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊　旧練兵場遺跡Ⅱ（第 19 次調査）』2011 年）による。

11. 発掘・整理業務で作成した実測図・写真などの記録は全て香川県埋蔵文化財センターで保管しているので、活用されたい。

※ 地図は国土地理院地形図を使用しました。

本文目次

第一分冊

第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　発掘調査の経過 …… 1
　第２節　整理作業の経過 …… 3
第２章　遺跡の立地と既往調査の概要 …… 6
第３章　第 28 次調査 …… 15
　第１節　層序 …… 15
　第２節　遺構・遺物 …… 27
第４章　第 29 次調査 …… 125
　第１節　層序 …… 125
　第２節　遺構・遺物 …… 125
第５章　第 30 次調査 …… 219
第６章　第 36 次調査 …… 312
　第１節　層序 …… 312
　第２節　遺構・遺物 …… 312

第二分冊

第７章　自然科学的分析 …… 1
　第１節 河川 SR01 内堆積物の植物珪酸体分析 …… 1
　第２節 河川 SR01 内堆積物の花粉分析 …… 6
　第３節 河川 SR01 内堆積物の花粉、珪藻分析 …… 13
　第４節 旧練兵場遺跡における自然科学分析報告 …… 21
　第５節 旧練兵場遺跡出土土器付着赤色顔料の蛍光 X 線分析 …… 29
　第６節 旧練兵場遺跡出土玉類の蛍光X線分析 …… 36
　第７節 第 30 次調査 3A 区掘立柱建物 SB3001 出土柱材の樹種同定 …… 46
第８章　総括 …… 48
　第１節 遺構の変遷 …… 48
　第２節 弥生時代の人形土製品 …… 71
　第３節 旧練兵場遺跡の古代 …… 72

挿図目次

図 1　調査区割図 …… 5
図 2　旧練兵場遺跡の位置（1/25,000）…… 6
図 3　多度津町・善通寺市付近航空写真
（1948 年 米軍撮影）…… 7
図 4　旧練兵場遺跡付近航空写真（1948 年 米軍撮影）‥ 8
図 5　善通寺病院統合事業に伴う調査区付近航空写真
（1948 年 米軍撮影）…… 9
図 6　既往の調査区 …… 10
図 7　既往の調査区（善通寺病院付近）…… 11
図 8　土層堆積図（A）…… 17・18
図 9　土層堆積図（B）…… 19・20
図 10　土層堆積図（C）…… 21・22
図 11　土層堆積図（D・E）…… 23・24
図 12　第 28 次調査 7-10 ～ 12 区平面図 …… 25・26
図 13　SD0719・SD0720・SD0804・SD1121・SD1243‥ 28
図 14　SD0719・SD1008・SD1019・SD1020・
SD1021・SD1022・SD1121 …… 29
図 15　SD1008・SD1019・SD1020・SD1021・SD0719‥ 30
図 16　SD1024 …… 31
図 17　SD1435 …… 32
図 18　SR01（1）…… 33
図 19　SR01（2）…… 34
図 20　SR01（3）…… 35・36
図 21　SR01（4）…… 37・38
図 22　SR01（5）…… 39
図 23　SR01（6）…… 40
図 24　SR01（7）…… 41
図 25　7-12 区 SH02 …… 43
図 26　7-10 区 SX04 …… 44
図 27　7-11 区 SK06 …… 44
図 28　7-11 区 SX02（1）…… 45
図 29　7-11 区 SX02（2）…… 46
図 30　7-11 区 SX02（3）…… 47
図 31　SD1010・SD1107・SD1109・SD1014 …… 48
図 32　SD1113・SD1114・SD1115・SD1117・SD1118‥ 50
図 33　7-10 区 SH01 …… 51
図 34　7-11 区 SX03 …… 52
図 35　7-12 区 SH01 …… 53
図 36　SB03 …… 55
図 37　SB04（1）…… 56
図 38　SB04（2）…… 57
図 39　SB06 …… 58
図 40　SB07（1）…… 59
図 41　SB07（2）…… 60
図 42　SB08（1）…… 61
図 43　SB08（2）　…… 62
図 44　SB15 …… 63
図 45　SB19 …… 64
図 46　SB21（1）…… 65
図 47　SB21（2）…… 66
図 48　SB22（1）…… 67
図 49　SB22（2）…… 68
図 50　SB23 …… 69
図 51　SB24 …… 70
図 52　SB25 …… 71
図 53　SB44 …… 72
図 54　7-10 区 SK02 …… 73
図 55　7-10 区 SP127 …… 73
図 56　7-10 区 SK03 …… 74
図 57　7-10 区 SX01 …… 74
図 58　7-11 区 SK01（1）…… 75
図 59　7-11 区 SK01（2）…… 76
図 60　7-11 区 SK01（3）…… 77
図 61　7-11 区 SK01（4）…… 78
図 62　7-11 区 SK03・7-11 区 SK04 …… 79
図 63　7-11 区 SK05 …… 80
図 64　7-12 区 SK02 …… 80
図 65　7-12 区 SX08・SX1101 …… 81
図 66　7-12 区 SX11・SD101 …… 81
図 67　SD0709 …… 83
図 68　SD0817（1）…… 84
図 69　SD0817（2）…… 85
図 70　SD1003 …… 86
図 71　SD1005 …… 86
図 72　SD1006・SD1011（1）…… 88
図 73　SD1006・SD1011（2）…… 89
図 74　SD1012（1）…… 90
図 75　SD1012（2）…… 91
図 76　SD1015 …… 92
図 77　SD1016 …… 93
図 78　SD1112 …… 94
図 79　SD1211 …… 95
図 80　SD1217・SD1220 …… 96
図 81　SD1410（1）…… 98
図 82　SD1410（2）…… 99
図 83　SD1438 …… 100
図 84　SB01 …… 102
図 85　SB01・SB09 …… 103
図 86　SB10 …… 105
図 87　SB11 …… 106
図 88　SB12 …… 107
図 89　SB17 …… 108
図 90　SB20 …… 109
図 91　7-10 区 SK01 …… 111
図 92　7-12 区 SK07・7-12 区 SK08 …… 111
図 93　7-12 区 SX01 …… 112
図 94　7-12 区 SX02 …… 112
図 95　SD0702・SD1103 …… 114
図 96　SD1001・SD1002 …… 115
図 97　7-12 区 SK04・7-12 区 SK06・SD1205 …… 116
図 98　柱穴・小穴出土遺物（3）…… 118
図 99　柱穴・小穴出土遺物（2）…… 119
図 100　柱穴・小穴出土遺物（3）…… 120
図 101　遺構に伴わない遺物（1）…… 121
図 102　遺構に伴わない遺物（2）…… 122
図 103　遺構に伴わない遺物（3）…… 123
図 104　7-8 区 SE01 …… 124
図 105　第 29 次調査 1・2 区平面図 …… 126
図 106　第 29 次調査南部平面図 …… 127・128
図 107　西壁土層断面図 -1 …… 129
図 108　西壁土層断面図 -2 …… 130
図 109　SB06 …… 131
図 110　SB07 …… 132
図 111　SB08 …… 133

図 112　SB10 …… 134
図 113　SP353・SP354 …… 134
図 114　SP355・SP356 …… 135
図 115　SP365 …… 136
図 116　SP426 …… 136
図 117　SP427 …… 137
図 118　SP483 …… 137
図 119　SP484・SP489 …… 138
図 120　SP506 …… 138
図 121　SP514 …… 138
図 122　SP543 …… 139
図 123　SK20 …… 139
図 124　SX19 …… 139
図 125　SX25 …… 140
図 126　SX40 …… 141
図 127　SD70 …… 143
図 128　SR01(1) …… 144
図 129　1 区 SR01(2) …… 145
図 130　1 区 SR01(3) …… 146
図 131　1 区 SR01(4) …… 147
図 132　1 区 SR01(5) …… 148
図 133　1 区 SR01(6) …… 149
図 134　1 区 SR01(7) …… 150
図 135　1 区 SR01(8) …… 151
図 136　1 区 SR01(9) …… 152
図 137　1 区 SR01(10) …… 153
図 138　2 区 SR01(1) …… 154
図 139　2 区 SR01(2) …… 155
図 140　2 区 SR01(3) …… 156
図 141　SH03（1） …… 158
図 142　SH03（2） …… 159
図 143　SP317 …… 160
図 144　SP500 …… 160
図 145　SP510 …… 160
図 146　SP570 …… 161
図 147　SK02 …… 161
図 148　SK03 …… 162
図 149　SK04 …… 162
図 150　SK05 …… 163
図 151　SK10 …… 163
図 152　SK13 …… 164
図 153　SK14 …… 164
図 154　SK15 …… 164
図 155　SK17 …… 165
図 156　SK19A・SK19B …… 165
図 157　SX44 …… 166
図 158　SD41 …… 166
図 159　SD50 …… 167
図 160　SB09 …… 168
図 161　SB14（1） …… 170
図 162　SB14（2） …… 171
図 163　SB15 …… 172
図 164　SP161・SP252 …… 173
図 165　SK01 …… 174
図 166　SP466 等 …… 174
図 167　SD51 …… 175
図 168　SD42 …… 175
図 169　SD55 …… 176
図 170　SD59 …… 177
図 171　SD07・SD08・SD21・SD34・SD64（1） …… 179
図 172　SD07・SD08・SD21・SD34・SD64（2） …… 180
図 173　SD09・SD10・SD11・SD12・SD13B・SD19 ・182
図 174　SD09 …… 184
図 175　SD09・SD19・SD1433・SD1440 …… 185
図 176　SD09・SD11・SD19 …… 186
図 177　SD09・SD11・SD12・SD13B・SD19（2） …… 187
図 178　SD09・SD11・SD12・SD13B・SD19（3） …… 188
図 179　SD09・SD11・SD12・SD13B・SD19（4） …… 189
図 180　SD09・SD11・SD12・SD13B・SD19（5） …… 190
図 181　SD09・SD11・SD12・SD13B・SD19（6） …… 191
図 182　SD10・SD36 …… 192
図 183　SD26・SD13B …… 193
図 184　SD19A・19B …… 194
図 185　SD13A・SD14・SD15・SD16・SD17・SD18・
SD20・SD22・SD23（1） …… 195
図 186　SD13A・SD14・SD15・SD16・SD17・SD18・
SD20・SD22・SD23（2） …… 196
図 187　SD25 …… 198
図 188　SD35 …… 198
図 189　SD66 …… 199
図 190　SB05 …… 200
図 191　SK07 …… 201
図 192　SK08 …… 201
図 193　SX47 …… 202
図 194　SD01 …… 202
図 195　SD05 …… 203
図 196　SD03・SD27・SD28・SD29・SD30・SX04 ‥ 204
図 197　SD43 …… 205
図 198　SD46・SD53 …… 205
図 199　SD46・SD53　遺物（石） …… 206
図 200　SD57 …… 207
図 201　SD58 …… 207
図 202　SD60 …… 209
図 203　SD60　遺物（中層） …… 210
図 204　SD60　遺物（下層） …… 211
図 205　SK18 …… 212
図 206　SD65 …… 213
図 207　SD61 …… 213
図 208　柱穴・小穴出土遺物 …… 214
図 209　遺構に伴わない遺物（1） …… 215
図 210　遺構に伴わない遺物（2） …… 216
図 211　遺構に伴わない遺物（3） …… 217
図 212　遺構に伴わない遺物（4） …… 218
図 213　SH1001 …… 219
図 214　第 30 次調査・第 29 次調査 1・2 区平面図 ‥ 220
図 215　第 30 次調査平面図 …… 221・222
図 216　第 30 次調査・第 29 次調査南部平面図 ‥ 223・224
図 217　SP1002 …… 225
図 218　SH1002・SH1003 …… 226
図 219　SH1005・SH1006 …… 227
図 220　SH1007 …… 228
図 221　SH1008・SH1009 …… 229
図 222　SH1010・SH1012・SH1013 …… 230
図 223　SH1014 …… 231
図 224　SH1015 …… 231
図 225　SB1002 …… 232
図 226　SB1003 …… 233
図 227　1B 区柱穴・小穴出土遺物及び遺構に伴わない
遺物 …… 234
図 228　SH1017 …… 234

図 229　SB1004 …… 235
図 230　SB1005 …… 236
図 231　SB1006 …… 237
図 232　SH1019・SH1020 …… 238
図 233　1D 区柱穴・小穴出土遺物 …… 238
図 234　1E 区西壁土層堆積図 …… 239・240
図 235　SB1007 …… 241
図 236　SB1008 …… 242
図 237　SB1009 …… 243
図 238　SK1003 …… 244
図 239　SD1003 …… 244
図 240　SD1005 …… 245
図 241　SD1006・SD1007 …… 246
図 242　SD1008・SD1009 …… 247
図 243　SD1433・SD08 …… 248
図 244　1E 区柱穴・小穴出土遺物及び遺構に伴わない遺物 …… 249
図 245　SR01 1E 区南部 …… 249
図 246　SR01 1E 区北部 …… 250
図 247　SR01（1） …… 251
図 248　SR01（2） …… 252
図 249　SR03 …… 253
図 250　1G 区土層堆積図・SH1026・SH1028・SH1029 …… 255
図 251　1H 区土層堆積図 …… 256
図 252　7-9 区 SH12 …… 257
図 253　SH0122・SH1023 …… 259
図 254　SH1025・SH1030・SH1031 …… 260
図 255　SH1032・SH1033 …… 261
図 256　SH1034・SH1035（1） …… 262
図 257　SH1034・SH1035（2） …… 263
図 258　SH1036 …… 264
図 259　SH1037・SH1038 …… 265
図 260　SB1011 …… 266
図 261　7-2 区 SB08（1） …… 267
図 262　7-2 区 SB08（2） …… 268
図 263　7-2 区 SB08（3） …… 269
図 264　7-2 区 SB12（1） …… 270
図 265　7-2 区 SB12（2） …… 271
図 266　1H 区柱穴・小穴出土遺物 …… 271
図 267　2A 区・2B 区・2C 区平面図 …… 272
図 268　2D 区・2E 区・2F 区・3A 区平面図 …… 273・274
図 269　2A 区土層堆積図 …… 275
図 270　2B 区・2F 区土層堆積図 …… 276
図 271　2D 区・2E 区土層堆積図 …… 277
図 272　SH2001 …… 278
図 273　SH2002 …… 279
図 274　SH2003 …… 280
図 275　SH2004・SH2005 …… 281
図 276　SH2006 …… 282
図 277　SH2007 …… 283
図 278　SH2008 …… 284
図 279　6-3 区 SH01 …… 285
図 280　SP2001・SP2003・SP2024・SP2028・SP2029・SP2034 …… 286
図 281　SP2010・SP2012・SP2016・SP2021・SP2032 …… 287
図 282　SK2004 …… 288
図 283　ST2001・ST2002・ST2003 …… 289
図 284　ST2001 …… 290
図 285　ST2002 …… 291
図 286　ST2003 …… 292
図 287　SD2001 …… 293
図 288　SD2002・SD2003・SD2004（1） …… 294
図 289　SD2002・SD2003・SD2004（2） …… 295
図 290　SD2005 …… 296
図 291　SD2005・SD2006・SD2008・SD2009・SD2010・SD3001・SD3002・SD3003・SD3004・SD3005（1） …… 297
図 292　SD2005・SD2006・SD2008・SD2009・SD2010・SD3001・SD3002・SD3003・SD3004・SD3005（2） …… 298
図 293　SD2005・SD2006・SD2008・SD2009・SD2010・SD3001・SD3002・SD3003・SD3004・SD3005（3） …… 299
図 294　2A 区柱穴・小穴出土遺物及び遺構に伴わない遺物 …… 300
図 295　SH3001 …… 301
図 296　SH3002・SH3003 …… 302
図 297　SH3004 …… 303
図 298　SH3005 …… 304
図 299　SH3006・SH3007 …… 306
図 300　SB3001（1） …… 307
図 301　SB3001（2） …… 308
図 302　SB3002 …… 309
図 303　SP3004 …… 309
図 304　SP3042・SP3057 …… 310
図 305　3A 区柱穴・小穴出土遺物及び遺構に伴わない遺物 …… 311
図 306　第 36 次調査平面図 …… 313
図 307　土層堆積図 …… 314
図 308　SK01 …… 315
図 309　SK02 …… 315
図 310　SP01・SP02・SP03・SP04 …… 315
図 311　SP06・SP07・08 …… 316
図 312　SP09・SP10 …… 316
図 313　SP11・SP12・SP13 …… 317
図 314　SD02 …… 317
図 315　SD01・SD03 …… 318
図 316　SD01 出土遺物・遺構に伴わない遺物 …… 319

第二分冊

図 320　SR01 埋土の模式断面図および試料採取層準 …… 1
図 321　試料採取地点位置図 …… 2
図 322　試料採取地点断面図 …… 2
図 323　7-10 区 SR01 埋土での植物珪酸体含量の層位的変化 …… 3
図 324　植物珪酸体 …… 5
図 325　花粉分析フローチャート …… 7
図 326　7-6 区花粉ダイアグラム …… 7
図 327　7-12 区花粉ダイアグラム …… 8
図 328　試料採取地点平・断面図 …… 10
図 329　花粉化石 …… 12
図 330　調査区平面図（試料採取地点） …… 13
図 331　試料採取地点断面図 …… 13
図 332　花粉分析フローチャート …… 14
図 333　花粉ダイアグラム（百分率） …… 14
図 334　花粉ダイアグラム（含有量） …… 15
図 335　珪藻分析フローチャート …… 15

図 336　珪藻ダイアグラム …… 16
図 337　珪藻総合ダイアグラム …… 16
図 338　花粉化石 …… 19
図 339　珪藻化石 …… 20
図 340　炭化材出土状況 …… 21
図 341　旧練兵場遺跡のプラント・オパール分析結果 …… 23
図 342　旧練兵場遺跡のプラント・オパール …… 25
図 343　旧練兵場遺跡の炭化材 …… 28
図 344　赤色顔料の蛍光 X 線分析結果（1）…… 31
図 345　赤色顔料の蛍光 X 線分析結果（2）…… 32
図 346　赤色顔料の蛍光 X 線分析結果（3）…… 33
図 347　赤色顔料の生物顕微鏡写真（1）
（ｽｹｰﾙ：10μm）…… 34
図 348　赤色顔料の生物顕微鏡写真（2）
（ｽｹｰﾙ：10μm）…… 35
図 349　四国地方の中央構造線（日本の地質「四国地方」
編集委員会編 (1991) より引用）…… 38
図 350　分析を行った玉類 …… 40
図 351　蛍光 X 線分析スペクトル図 …… 41
図 352　蛍光 X 線分析スペクトル図 …… 42
図 353　管玉の透過 X 線像（各直交方向）…… 43
図 354　不均質石材の元素マッピング図 …… 44
図 355　不均質石材の元素マッピング図 …… 45
図 356　旧練兵場遺跡 3-A 区 SP3015 柱痕　柱材
（管理番号 KZR9-B0063）の木材組織写真 …… 47
図 357　善通寺病院付近等高線図
「旧練兵場遺跡Ⅳ」掲載図に一部加筆 …… 52
図 358　縄文時代 …… 53・54
図 359　弥生時代中期後半から後期初頭 …… 55・56
図 360　弥生時代後期前半から終末期 …… 57・58
図 361　古墳時代前期 …… 59・60
図 362　古墳時代後期 …… 61・62
図 363　古代 1/7 世紀から 8 世紀後半）…… 63・64
図 364　古代 1/7 世紀から 8 世紀後半）…… 65・66
図 365　古代 2/8 世紀末から 10 世紀）…… 67・68
図 366　中世 …… 69・70

表目次

表 1　発掘調査体制一覧表 …… 2
表 2　整理調査体制一覧表 …… 4
表 3　既往の調査一覧 …… 12

第二分冊

表 4　分析試料一覧 …… 1
表 5　7-10 区 SR01 充填堆積物の植物珪酸体含量 …… 3
表 6　微化石概査結果 …… 6
表 7　旧練兵場遺跡花粉組成表 …… 11
表 8　微化石概査結果（残存状況）…… 13
表 9　花粉組成表 …… 18
表 10　珪藻組成表 …… 19
表 11　旧練兵場遺跡のプラント・オパール分析結果 …… 24
表 12　旧練兵場遺跡における樹種同定結果 …… 26
表 13　分析結果一覧 …… 30
表 14　分析対象一覧 …… 36
表 15　玉類の半定量分析結果（重量%）…… 37
表 16　ガラス製小玉の半定量分析結果（重量%）…… 37
表 17　土器観察表 …… 71
表 18　瓦観察表 …… 109
表 19　石器観察表 …… 109
表 20　金属器観察表 …… 111
表 21　玉類観察表 …… 112
表 22　木器観察表 …… 112
表 23　動物遺存体一覧 …… 113

付図

付図 1　旧練兵場遺跡Ⅵ　遺構平面図（S=1/200）
付図 2　旧練兵場遺跡Ⅵ　遺構平面図（S=1/100）

第１章　調査の経過

第１節　発掘調査の経過

本書では『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　旧練兵場遺跡Ⅳ』（香川県教育委員会ほか　2014.3）・『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　旧練兵場遺跡Ⅴ』（香川県教育委員会ほか　2015.2）で一部を報告した第 28 次調査のうち 10・11・12 区（本書では『旧練兵場遺跡Ⅳ』・『旧練兵場遺跡Ⅴ』と同様 7-10 区、7-11 区と表記する）、第 29 次調査、第 30 次調査、第 36 次調査を報告する。

第 28 次調査は新病院本体部分の調査で、平成 22 年４月１日から平成 23 年３月 31 日まで実施した。発掘調査は４月１日から 10 月 31 日までは２班体制、11 月からは１班が合流し、３班体制で実施した。調査面積は 3,480㎡で、１～ 14 区の 14 調査区に分けて調査を行った。平成 22 年４月からは１区・２区、７月からは４区・８区、10 月からは６区、11 月からは５区・12 区・13 区、12 月からは９区・10 区・11 区、平成 23 年１月からは７区・14 区の調査を実施した。

第 29 次調査も新病院本体部分の調査で、平成 23 年４月１日から平成 23 年８月 31 日まで実施した。発掘調査は４月１日から５月 31 日までは２班体制、６月１日からは１班体制で実施した。調査面積は 907㎡で、１～５区の５調査区に分けて調査を行った。平成 23 年４月からは３～５区、５月からは１区、７月からは２区の調査を行った。

第 30 次調査は新病院の電気・ガス等の配管敷設や防火水槽設置に伴う附帯施設工事に伴う調査で、平成 23 年 11 月１日から平成 24 年２月 28 日まで実施した。調査面積は 413㎡である。平成 13 年度から平成 23 年度上半期に実施した新病院本体部分の外側に当たる部分を調査した。いずれも細長い調査区で、大部分の調査区は幅２～３m以下である。

第 36 次調査は新病院の南東側の配管工事に伴う調査で、平成 24 年９月１日から９月 30 日まで実施した。調査面積は 40㎡である。

以上のように本書に掲載する調査は平成 22 年度から平成 24 年度に実施したものである。いずれの調査も現地での平面測量は測量業者に打設を委託した基準杭をもとにトータルステーションを使用し、『遺構くん Cubic』（株式会社ＣＵＢＩＣ）による図化を行った。なお、第 28 次・第 29 次調査は日本測地系、第 30 次・第 36 次調査は世界測地系を使用し、平面測量を行ったが、本書作成時に日本測地系に変換した。また、いずれの調査も断面図と一部の遺構の平面図は手描きした。遺構の写真撮影はデジタルカメラ、６×７ｃｍ判フィルムカメラ、４×5in 判フィルムカメラを使用し、第 28 次調査ではクレーンを使用した航空写真の撮影を行った。

旧練兵場遺跡第 28 次調査は善通寺病院統合事業に伴う香川県埋蔵文化財センターが実施した７回目の発掘調査であることから NZR7 という略号を使用した。また、第 29 次調査は NZR8、第 30 次調査は NZR9、第 36 次調査は 10 回目の発掘調査であることから NZR10 という略号を使用した (1)。

いずれの調査も遺構名は調査区・遺構の種類ごとに１から順に番号を付け、出土遺物は遺構・層位・出土年月日ごとに袋または整理用コンテナに収納し、遺物登録番号を付け、台帳を作成した。

註１　旧練兵場遺跡第 31 次から第 35 次調査は善通寺市教育委員会による調査である。

平成22年度(第28次調査)

香川県教育委員会生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括		総括	
課長	石垣　憲一	所長	大山　真充
主幹	藤好　史郎	次長	深谷　　右
総務・生涯学習推進グループ		総務課	
課長補佐	亀山　隆	課長	深谷　　右（兼務）
副主幹	香西としみ	副主幹	林　　文夫
主任主事	西本　優子	主任	福井　良子
文化財グループ		主任	古市　和子
課長補佐	藤好　史郎（兼務）	調査課	
主任文化財専門員	森下　英治	課長	西岡　達哉
文化財専門員	小野　秀幸	主任文化財専門員	森　　格也
		主任文化財専門員	木下　晴一
		文化財専門員	森下　友子
		文化財専門員	蔵本　晋司
		文化財専門員	佐藤　竜馬
		文化財専門員	松本　和彦
		調査技術員	木全加珠美
		調査技術員	白木　亨
		調査技術員	東淵　愛

平成23年度（第29次・第30次調査）

香川県教育委員会生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括		総括	
課長	炭井　宏秋	所長	藤好　史郎
総務・生涯学習推進グループ		次長	真鍋　正彦
課長補佐	亀山　隆	総務課	
副主幹	香西としみ	課長	真鍋　正彦（兼務）
主任主事	丸山　千晶	副主幹	林　　文夫
文化財グループ		主任	古市　和子
課長補佐	西岡　達哉	主任	中川　美江
主任文化財専門員	森下　英治	主任	広瀬　健一
文化財専門員	松本　和彦	調査課	
		課長	森　　格也
		第29次調査	
		主任文化財専門員	西村　尋文
		文化財専門員	山元　素子
		文化財専門員	蔵本　晋司
		文化財専門員	小野　秀幸
		調査技術員	塩治　千佳子
		調査技術員	白木　亨
		第30次調査	
		文化財専門員	信里　芳紀

平成24年度（第36次調査）

香川県教育委員会生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括		総括	
課長	炭井　宏秋	所長	藤好　史郎
副課長	木虎　淳	次長	真鍋　正彦
総務・生涯学習推進グループ		総務課	
副主幹	松下　由美子	課長	真鍋　正彦（兼務）
主任主事	丸山　千晶	副主幹	林　　文夫
文化財グループ		主任	宮武　ふみ代
課長補佐	西岡　達哉	主任	中川　美江
主任文化財専門員	森下　英治	調査課	
文化財専門員	松本　和彦	課長	森　　格也
		主任文化財専門員	木下　晴一

表1　発掘調査体制一覧表

第２節　整理作業の経過

整理作業は平成 25 年４月１日から平成 27 年３月 31 日まで実施した。第 28 次調査で出土した遺物は 28 リットル入り整理用コンテナ 1134 箱であるが、本報告書で報告した調査区の遺物はこのうち 300 箱程度である。第 29 次調査で出土した遺物は整理用コンテナ 165 箱、第 30 次調査の遺物は 48 箱、第 36 次調査の遺物は３箱である。平成 25 年度は第 28 次調査・第 29 次調査・第 30 次調査の遺物接合と実測対象遺物の抽出を行い、一部の遺物を直営で実測し、第 30 次調査の土器実測を業者に委託した。平成 26 年度は第 29 次調査の土器実測を業者に委託し、石器・金属器などの実測、第 36 次調査の土器実測、遺構図面の整理、報告書編集作業を行い、遺物・図面を収納した。また、一部の金属器の保存処理、赤色顔料の分析・玉類の材質分析・土壌分析・木製品の樹種鑑定を委託した。

発掘調査時に付けた遺構名は基本的にはそのまま報告書に掲載したが、溝や河川については他調査区で検出された遺構との関連や連続などを考慮して名称を付け替えた。溝や河川は複数の調査区にまたがって検出されたものが多く、同一遺構に複数の遺構名が付いている場合もあった。これらの遺構は複数のうちの１遺構名を採用し、報告遺構名とした。このように本書で報告するにあたり、遺構名を付け替えた遺構に関してはその旨を本文中に明記した。

また、『旧練兵場遺跡Ⅳ』（平成 26 年３月刊行）では第 28 次調査（NZR7）の調査区の一部と第 27 次調査（NZR6）とを掲載したため、第 27 次調査（NZR6）では調査区の前に６、第 28 次調査（NZR7）では調査区の前に７を付け、６－１区、７－１区のように表記した。『旧練兵場遺跡Ⅴ』（平成 27 年２月刊行）でも同様に表記した。本報告書でも『旧練兵場遺跡Ⅳ』にならい、第 28 次調査は調査区の前に７を付け、７－８区というように調査区を表記する。

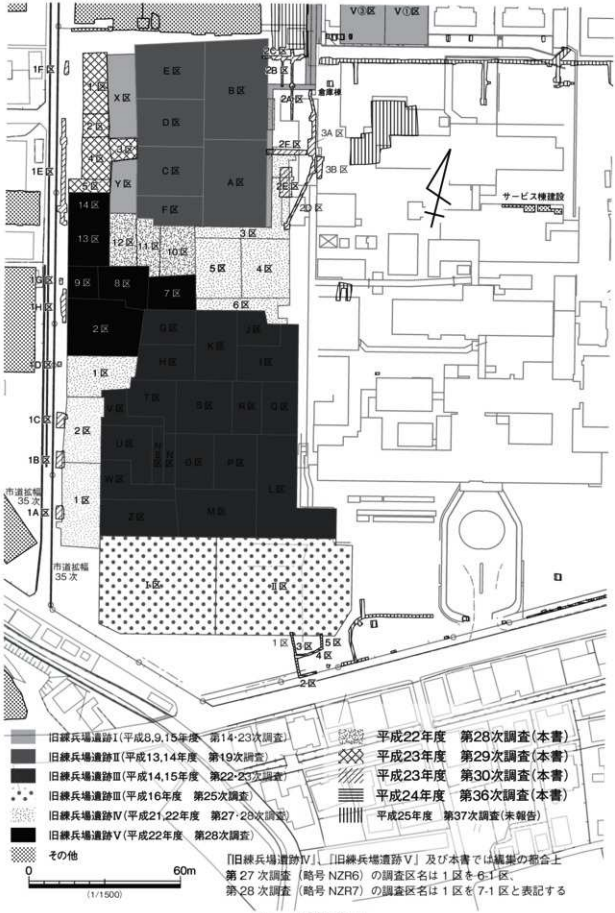
平成 25 年度

香川県教育委員会生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括		総括	
課長	増田　宏	所長	真鍋　昌宏
副課長	木虎　浮	次長	前田　和也
総務・生涯学習推進グループ		総務課	
副主幹	松下由美子	課長	前田　和也（兼務）
主任主事	丸山　千晶	主任	宮武　ふみ代
文化財グループ		主任	俵野　美二
課長補佐	片桐　孝浩	主任	中川　美江
主任文化財専門員	山下　平重	資料普及課	
文化財専門員	松本　和彦	課長	森　格也
		主任文化財専門員	木下　晴一
		文化財専門員	森下　友子
		嘱託	市川　孝子　加藤　恵子
			川井　佐織　香西　栄理
			高橋　千恵　徳永　貴美
			森　后代　森園　愛子

平成 26 年度

香川県教育委員会生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括		総括	
課長	増田　宏	所長	真鍋　昌宏
副課長	川上　泰	次長	前田　和也
総務・生涯学習推進グループ		総務課	
副主幹	松下由美子	課長	前田　和也（兼務）
主任主事	和木　麻佳	主任	佐野　英二
文化財グループ		主任	寺岡　仁美
課長補佐	片桐　孝浩	主任	中川　美江
主任文化財専門員	山下　平重	資料普及課	
文化財専門員	松本　和彦	課長	森　格也
		主任文化財専門員	西村　尋文
		主任文化財専門員	蔵本　晋司
		文化財専門員	森下　友子
		嘱託	猪木原美恵子　高橋　千恵
			香西　栄理　川井　佐織
			森　后代　岡崎江伊子
			山地眞理子　加藤　恵子
			合田　和子　竹村　恵子
			田中沙千子　正本　由希子
			岡本　光代　市川　孝子
			中野　優美　牧野　香織
			原　節子　青原　真理

表２　整理体制一覧表



「旧練兵場遺跡Ⅳ」、「旧練兵場遺跡Ⅴ」及び本書では編集の都合上
第 27 次調査（略号 NZR6）の調査区名は 1 区を 6-1 区、
第 28 次調査（略号 NZR7）の調査区名は 1 区を 7-1 区と表記する

図 1　調査区割図

第２章　遺跡の立地と既往調査の概要

遺跡周辺の地理的環境、歴史的環境については、既刊の『旧練兵場遺跡Ⅱ』、『旧練兵場遺跡Ⅲ』を参照されたい。なお、図３～５は1948年に米軍が撮影した航空写真で、図５は航空写真に善通寺病院統合事業に伴う発掘の調査区を重ね合わせたものである。調査区と重複する部分には東西に細長い建物がみられるが、この建物は昭和20年まで善通寺陸軍病院、その後国立善通寺病院となった旧病院の建物である。

これまでに調査が行われた地点、概要、文献一覧を図６・７、表３に示す。

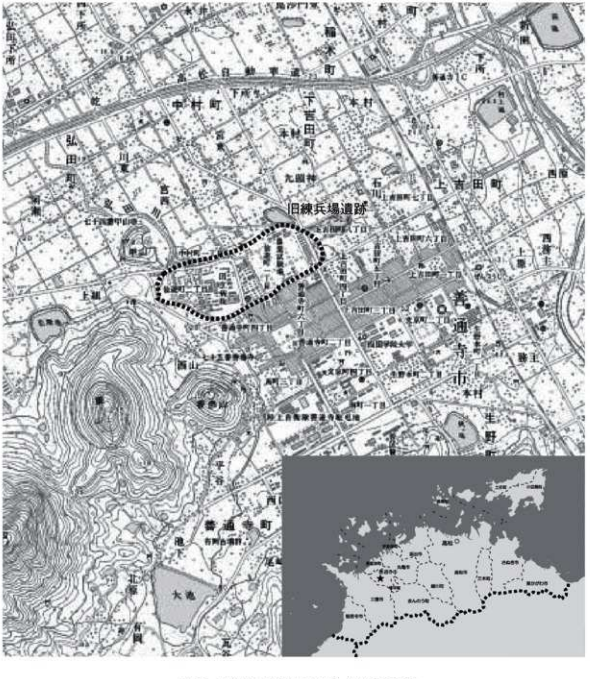


図２　旧練兵場遺跡の位置（1/25,000）

図３　多度津町・善通寺市付近航空写真（1948 年 米軍撮影）

図４　旧練兵場遺跡付近航空写真（1948 年 米軍撮影）

図５　善通寺病院統合事業に伴う調査区付近航空写真（1948 年 米軍撮影）

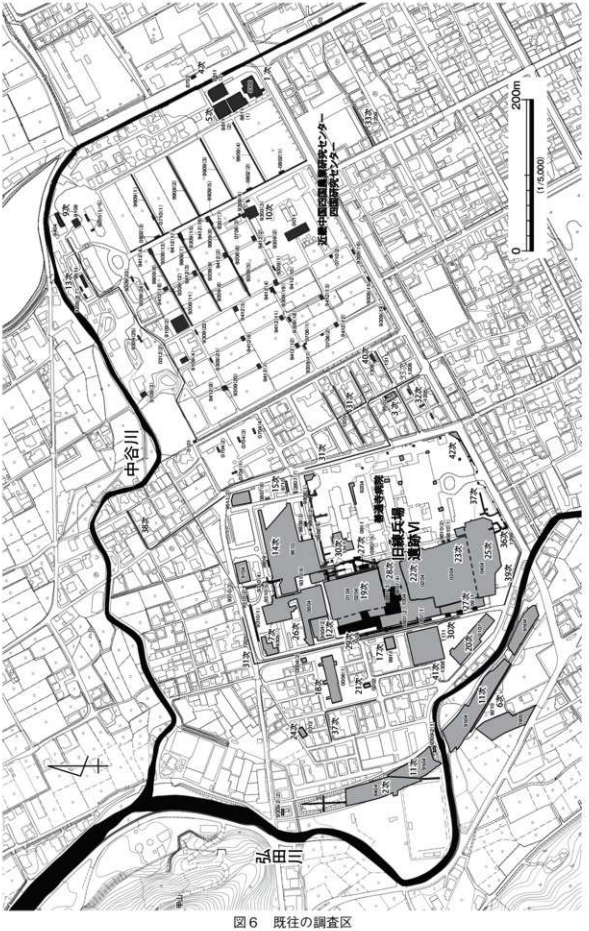


図6　既往の調査区

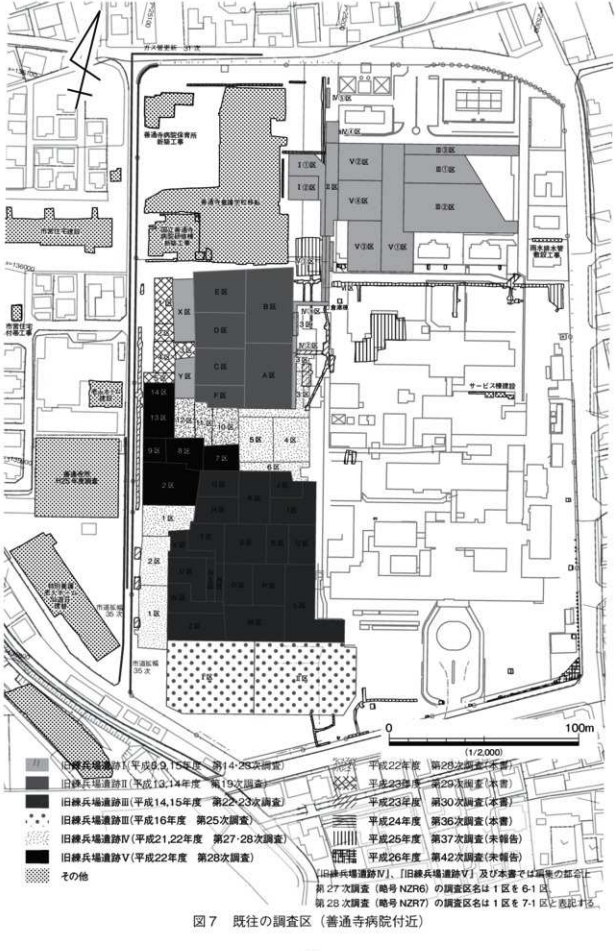


図7　既往の調査区（善通寺病院付近）

表３　既往の調査一覧

調査番号	年度	調査次数	調査種別	調査要因	調査主体	調査面積	調査概要	文献	備考
8308	s58	1	確認調査	範囲確認調査	善通寺市教委	1200	弥生終末期の竪穴住居１棟、古代末～中世の溝を検出	1,10	仲村廃寺
8404	s59	2	本発掘調査	弘田川河川改修	善通寺市教委	3635	弥生中期～終末期の竪穴住居38棟、銅片・銅鏃・ガラス玉出土	2,11	彼ノ宗
8507	s60	3	本発掘調査	個人住宅建設	善通寺市教委	135	弥生後期後半の箱式石棺・土器棺墓を確認	3,11	仙遊
8703	s62	4	本発掘調査	下水道建設	県教委	22	弥生中期末の竪穴住居１棟・掘立柱建物１棟を確認	11	旧練兵場
8811	s63	5	確認調査	範囲確認調査	善通寺市教委	1137	弥生中期～終末期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居を確認	4,12	仲村廃寺
9109	h3		確認調査	四国農業試験場施設整備	県教委	146	弥生時代後期の竪穴住居、弥生中期の掘立柱建物を検出	13	
9205	h4		確認調査	四国農業試験場施設整備	県教委	66	弥生後期～古墳時代竪穴住居４棟、土坑、柱穴を確認	14	
9204	h4		工事立会	善通寺病院サービス棟建設	県教委	41	古墳時代後期の竪穴住居、平安時代の溝、弥生～古墳時代の土器だまりを検出	14	
9210	h4	6	本発掘調査	弘田川河川改修	県教委	460	弥生後期～古墳時代竪穴住居多数、包含層中から小銅鏃片が出土。	14	弘田川西岸
9305	h5	7	本発掘調査	善通寺病院保育所建設	県教委	305	弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居14棟を検出	15,28	
9309	h5		工事立会	四国農業試験場施設整備	県教委	70	全域で弥生～古代の遺構を確認	15	
9309-2	h5		確認調査	弘田川河川改修	県教委		弘田川の堆積層を確認	28	
9310	h5		工事立会	善通寺病院水道管埋設工事	県教委	100	弥生前期末の貯蔵穴２基、弥生後期の竪穴住居４棟検出	28	
9310-2	h5		工事立会	善通寺病院下水道管埋設工事	県教委	120	弥生時代後期の竪穴住居５棟、中世の溝等を確認	28	
9310-3	h5	8	本発掘調査	善通寺病院看護学校増築	県教委	150	弥生中期～終末期の竪穴住居９棟、古墳時代の掘立柱建物を確認	15,28	
9404	h6	9	本発掘調査	四国農業試験場品質管理施設建設	県教委	120	弥生中期の掘立柱建物１棟、弥生後期の竪穴住居２棟、古墳時代後期の竪穴住居１棟確認	16,29	
9412	h6	10	本発掘調査	四国農業試験場パイプライン設置工事	県教委	100	全域で弥生～中世の遺構を確認	16,29	
9504	h7	11	本発掘調査	弘田川河川改修	県教委	6390	弥生～古墳時代の竪穴住居62棟、弥生中期の独立棟持柱建物を確認	33	弘田川西岸
9504-2	h7	12	本発掘調査	善通寺病院研修棟建設	県教委	690	弥生中期～終末期の竪穴住居群、弥生後期初頭の掘立柱建物群を確認	17,31	
9511	h7	13	本発掘調査	四国農業試験場タンパク機能解析実験棟建設	県教委	300	弥生後期の竪穴住居２棟、弥生中期の掘立柱建物１棟、古墳時代後期の溝１条確認。	17,31	
9511-2	h7		工事立会	善通寺病院備蓄倉庫建設	県教委	780	弥生後期から終末期の竪穴住居等を確認	32	
9610	h8	14	本発掘調査	善通寺病院看護学校新築	県教委	6000	弥生後期の竪穴住居・溝跡、条里型地割坪界溝を検出	34	
9710	h9	15	本発掘調査	善通寺病院雨水管敷設工事	県教委	30	弥生～古代の旧河道を検出	32	
9704	h9		工事立会	善通寺病院水源地建設	県教委	300		32	
9809	h10	16	本発掘調査	善通寺病院看護学校付帯工事	県教委	30	弥生～古代の旧河道を検出	30	
9808	h10		確認調査	確認調査	善通寺市教委	30	弥生中期～後期の柱穴群を確認	5	彼ノ宗
9909	h11		工事立会	四国農業試験場排水設備工事	県教委	800	弥生中期後半～後期の竪穴住居を検出	21,42	
9911	h11	17	工事立会	老人ホーム建設	善通寺市教委	201	旧河道から弥生中期が一括出土	21,42	
0006	h12	18	本発掘調査	市営住宅建設	善通寺市教委	1068	弥生後期竪穴住居、旧河道を検出	6	
0101	h12		工事立会	四国農業試験場西門・水路改修	県教委	122592		22	
0104	h13	19	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	3250	弥生中期～後期の竪穴住居・掘立柱建物多数、旧河道検出	35,39	
0107	h13	20	本発掘調査	特別養護老人ホーム仙遊荘建修	善通寺市教委	1430		7,23	
0202	h13	21	本発掘調査	市営住宅付帯工事	善通寺市教委	46	弥生後期の竪穴住居３棟確認	8	
0206	h14		工事立会	善通寺病院電柱設置工事	県教委	10		24	
0204	h14	22	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	4854	弥生中期～後期の竪穴住居・掘立柱建物、古墳時代後期の竪穴住居群検出。鏡片出土	24,44	
0504	h15	23	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	3616	弥生中期～終末期の竪穴住居72棟をはじめ、掘立柱建物等を多数確認。縞平縁式銅鐸片、舶載内行花文鏡片出土。	25,44	

調査番号	年度	調査次数	調査種別	調査要因	調査主体	調査面積	調査概要	文献	備考
0312	h15	24	確認調査	公民館建設	善通寺市教委	70	弥生後期の竪穴住居、古墳時代の包含層を検出	9	
0312-2	h15		工事立会	近畿中国四国農業研究センター下水道建設	県教委	200	弥生後期の竪穴住居、旧河道を検出	25	
0404	h16	25	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	3547	弥生後期～終末期の竪穴住居、弥生中期の掘立柱建物群を検出。隠平樋式銅鐸片、船載内行花文鏡片が出土	26.41.44	
0406	h16		工事立会	近畿中国四国農業研究センター電気設備埋設	県教委	6	弥生後期竪穴住居１棟検出	26	
0804	h20	26	本発掘調査	善通寺養護学校移転整備事業	県教委	3200	弥生中期～終末期の竪穴住居多数、条里型地割に合致する大溝を検出。鏡片が出土。	42.51.52	
0905	h21		確認調査	個人住宅建設	市教委	107.5	弥生後期・古墳後期の包含層検出	43	弘田川西岸
0911	h21	27	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	840	弥生中期～終末期、古墳後期の竪穴住居、掘立柱建物を検出	47	
1004	h22	28	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	3480	弥生中期～終末期、古墳後期、古代の竪穴住居、掘立柱建物、溝を検出	47	一部本書
1104	h23	29	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	907	弥生中期～古墳前期の旧河道、古代道路状遺構を検出	46	本書
1111	h23	30	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	413	飛鳥時代の大型総柱建物を検出	46	本書
1205	h24	31	本発掘調査	ガス管更新	善通寺市教委		弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1205	h24	32	本発掘調査	病院駐車場設置	善通寺市教委		弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1206	h24	33	本発掘調査	ガス管新設	善通寺市教委		弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑		
1209	h24	34	本発掘調査	ガス管更新	善通寺市教委		弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1207	h24	35	本発掘調査	市道拡幅	善通寺市教委				
1209	h24	36	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	40	中世の溝を検出	48	本書
1304	h25	37	本発掘調査	善通寺病院統合事業事業	県教委	1009	弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑	50	
1304	h25	38	工事立会	ガス管更新	善通寺市教委				
1307	h25	39	本発掘調査	市道拡幅	善通寺市教委				
1308	h25	40	確認調査	集会場建設	善通寺市教委				
1308	h25	41	本発掘調査	老人ホーム建設	善通寺市教委				
1311	h25		工事立会	下水道建設	善通寺市教委				
1410	h26	42	本発掘調査	県道善通寺詫間線（善通寺工区道路改修事業）	県教委	112	古墳時代の竪穴住居、古墳時代～中世の溝		

参考文献

尽誠学園史学会 1959「国立病院前庭遺跡発掘調査概報」『西讃史談』1

六車恵一 1956「讃岐弥生式土器集成図録」「文化財協会報」特別号 1 香川県文化財保護協会

矢原高幸 1973『善通寺市の古代文化』善通寺市

1. 善通寺市教育委員会『仲村廃寺発掘調査報告（旧練兵場遺跡内）』1984.3
2. 善通寺市教育委員会『彼ノ宗遺跡～弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～』1985.3
3. 善通寺市教育委員会『仙遊遺跡発掘調査報告書 - 旧練兵場遺跡仙遊 I 地区 -』1986.3
4. 善通寺市教育委員会『仲村廃寺～旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告書～』1989.3
5. 善通寺市教育委員会『山南遺跡・彼ノ宗遺跡発掘調査報告書～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5 ～』1999.3
6. 善通寺市教育委員会『旧練兵場遺跡　市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2001.1
7. 善通寺市教育委員会『旧練兵場遺跡　特別養護老人ホーム仙遊荘建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2002.3
8. 善通寺市教育委員会『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7 旧練兵場遺跡』2002.3
9. 善通寺市教育委員会『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9 旧練兵場遺跡』2004.3
10. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和 58 年度』1984.12
11. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和 59 年度～昭和 62 年度』1988.3
12. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和 63 年度』1989.3
13. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 3 年度』1992.3
14. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 4 年度』1993.3
15. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 5 年度』1994.3
16. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 6 年度』1995.3
17. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 7 年度』1996.3
18. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 8 年度』1997.3
19. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 9 年度』1999.2
20. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 10 年度』2000.3
21. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 11 年度』2001.3
22. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 12 年度』2002.3
23. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 13 年度』2003.3
24. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 14 年度』2003.11
25. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 15 年度』2005.3
26. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 16 年度』2006.1
27. 香川県教育委員会『香川県文化財年報　平成 19 年度』2009.2
28. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡 - 平成 5 年度国立善通寺病院内発掘調査報告 -』1994.3
29. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅱ - 平成 6 年度四国農業試験場内発掘調査報告 -』1995.3
30. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅲ - 平成 7 年度国立善通寺病院内発掘調査報告 -』1996.3
31. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅳ - 平成 7 年度四国農業試験場内発掘調査報告 -』1996.3
32. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅴ - 平成 9 年度国立善通寺病院内発掘調査報告 -』1998.3
33. 香川県教育委員会『広域基幹河川弘田川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　弘田川西岸遺跡』2008.1
34. 香川県教育委員会ほか『善通寺病院看護学校建設及び統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　旧練兵場遺跡Ⅰ』2009.2
35. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『国立善通寺病院改修事業に伴う旧練兵場遺跡発掘調査概報 1- 平成 13 年度 - 平成 14 年度上半期の発掘成果概要報告 -』2003.6
36. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成 8 年度』1997.5
37. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成 9 年度』1998.6
38. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成 13 年度』2002.6
39. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成 14 年度』2003.6
40. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成 15 年度』2005.3
41. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 16 年度』2006.10
42. 笹川龍一ほか『平成 11 年度旧練兵場遺跡の調査概要について－善通寺市ふれあいサロン五岳建設工事に伴う発掘調査－『善通寺市文化財保護協会報第 29 号』善通寺市文化財保護協会　2010.3
43. 香川県教育委員会『香川県文化財年報　平成 21 年度』2011.2
44. 香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 2 冊　旧練兵場遺跡Ⅱ』2011.2
45. 香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 3 冊　旧練兵場遺跡Ⅲ』2013.2
46. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 23 年度』2012.9
47. 香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 4 冊　旧練兵場遺跡Ⅳ』2014.3
48. 善通寺市教育委員会『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 14』2014.3
49. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 24 年度』2013.9
50. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 25 年度』2014.10
51. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 20 年度』2009.8
52. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 21 年度』2010.9

第３章　第 28 次調査

第１節　層序

旧練兵場遺跡の基本層序については、既刊の報告書に詳述されており、本書で報告する調査区の層序も基本的に同じである。『旧練兵場遺跡Ⅲ』は本書に報告する調査区の南東部に隣接する調査区の報告書であるが、ここに掲載された基本層序は、以下のとおりである。

Ⅰ層　現代の盛土及び攪乱土

Ⅱ層　灰色シルト（中世から近世の耕作土・遺構埋没土）

Ⅲ層　黒褐色粘土シルト～粘土（弥生時代中期から古代の堆積土・遺構埋没土）

Ⅳ - １層　黄灰色細粒砂～シルト

Ⅳ - ２層　黄褐色粗砂～シルト

Ⅴ層　砂礫

土層堆積図Ａ（図８）は善通寺病院統合事業の発掘調査区西端の西壁の土層図である。南部は『旧練兵場遺跡Ⅳ』で報告した第 27 次調査の 6-1 区・6-2 区、中部は『旧練兵場遺跡Ⅴ』で報告した第 28 次調査の 7-2 区・7-9 区・7-13 区・7-14 区、北部は本書で遺構・遺物を報告する第 29 次調査の１・２・４・５区の西壁で、その長さは 200 ｍである。南端の 6-1 区では地表面の標高は 24.3 ｍである。北に向かうに従い低くなり、北端の第 29 次調査１区の北端では 23.3 ｍで、南端よりも１ｍ低い。図８で示すように、いずれの調査区でも現地表面の下は盛土・攪乱土（Ⅰ層）が分厚く堆積する。大部分の調査区では盛土・攪乱土（Ⅰ層）は 0.5 ～ 1.0 ｍであるが、病院の建物基礎の掘削による攪乱土の堆積が現地表下２ｍ近くまで及ぶ箇所もあった。盛土・攪乱土の下には中世から近世の耕作土である灰色シルト層（Ⅱ層）が堆積するが、上部の攪乱が深く及ぶ調査区もあり、7-13 区では灰色シルト層（Ⅱ層）はみられなかった。また、第 29 次調査２区では灰色シルト層（Ⅱ層）は急激に 0.3 ｍほど下がっており、２区以北では中近世の田畑が一段下がっていたことがわかる。灰色シルト（Ⅱ層）の下には黒褐色粘土シルト～粘土（Ⅲ層）が堆積する。本来はかなり分厚く堆積していたと思われるが、上部は後世の耕作により削平されたと考えられる。

土層堆積図Ｂ～Ｅ（図８～ 11）は第 28 次調査 7-10 区・7-11 区・7-12 区の土層堆積図である。土層堆積図Ｂは 7-7 区と 7-10 区・7-11 区の境界である 7-10 区・7-11 区側の南壁の土層堆積を示す図である。7-10 区･7-11 区には弥生時代中期に大部分が埋没する河川 SR01 がある。SR01 は灰オリーブ色シルト（12 層）が堆積し、その上部には黒褐色粘質土が 0.3 ｍ程度堆積する。この黒褐色粘質土を９・10・11 層の３層に分層し、９層を SR01 埋土最上層、10・11 層を上層として調査を進めた。遺構の検出は９層上面（第１面）、11 層上面（第２面）、12 層上面（第３面）、SR01 の埋没土下の黄色粘質土（Ⅳ - １層）上面（第４面）で遺構の検出を行った。なお、SR01 の東岸に当たる 7-10 区では第１面・第４面の２面の遺構面を調査した。南西部に位置する 7-8 区では 12 層上面（第３面）で弥生時代中期後半の土坑が検出されていることから、12 層の堆積は弥生時代中期後半には終わったことがうかがわれる。また、7-11 区では 11 層上面（第２面）で８世紀から９世紀の土師器焼成土坑、９層上面（第１面）では中世の遺構が検出された。

土層堆積図Ｃは 7-10 区～ 7-13 区の土層堆積図である。東部の 7-10・7-11 区では SR01、西部の 7-13

区部分でも 7-10 区・7-11 区から南方の 7-7 区・7-8 区に向かい蛇行して北西に向かう SR01 がみられる。7-12 区・7-13 区でも 7-10 区・7-11 区と同様の堆積であるが、7-12 区・7-13 区では SR01 埋土上層を２層に分層できず、7-10 区・7-11 区の第１・３・４面に相当する遺構面の調査を行った。

土層堆積図Ｄは 7-10 区の東端の西壁である。北部には SR01 がみられる。土層堆積図Ｅは 7-12 区東端の西壁で、SR01 が蛇行するＵ字の内部にあたる。黒褐色粘質土の堆積は厚さ 0.1 mほどで、SR01 の凹みはみられなかった。土層堆積図Ｅは 7-11 区と 7-12 区の間の畔の東壁である。

なお、第７章第１節に詳述しているが、SR01 の埋没土を採取して土中の植物珪酸体分析した結果、SR01 の下層と上層にはイネ属の珪酸体が含まれていた。また、SR01 下層・中層・上層のいずれの土層からもメダケ属・ススキ属・イチゴツナギ亜科など比較的乾いた場所に生育するイネ科植物がみられ、ヨシ属などの湿地植物が全くみられなかったことから、SR01 の凹地は高燥な場所であったと推定されている。また、花粉分析の結果でも SR01 下層ではイネ属の花粉が検出された。

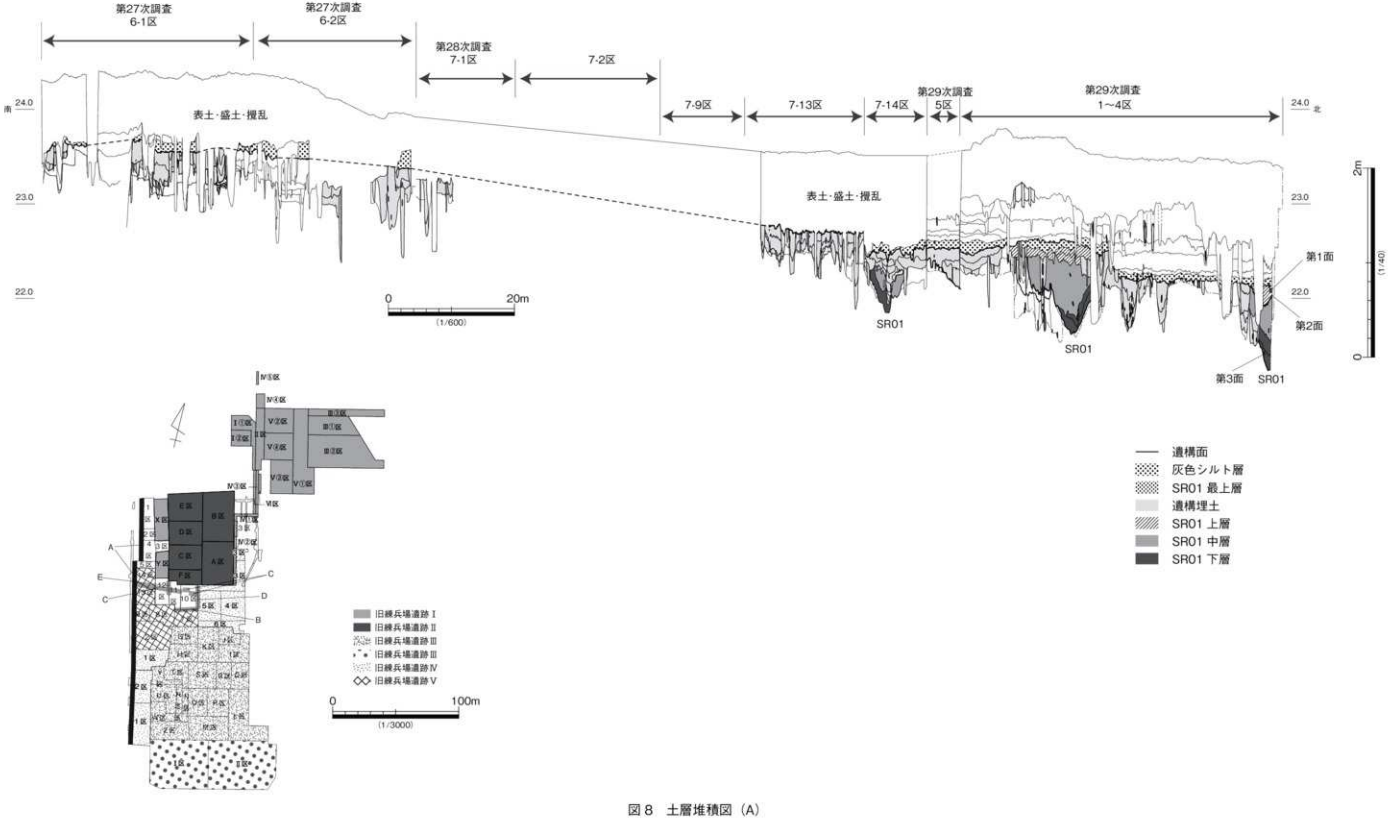
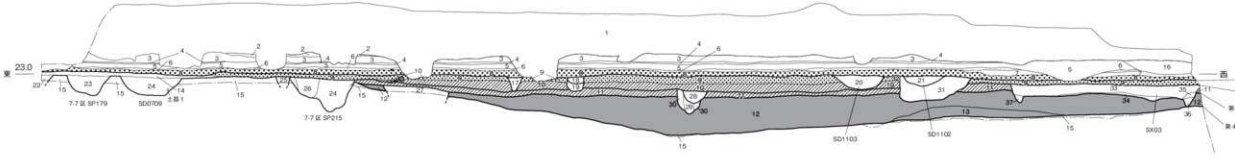

第27次調査
6-1区
第27次調査
6-2区
第28次調査
7-1区
7-2区
7-9区
7-13区
7-14区
第29次調査
5区
第29次調査
1～4区
南
北
24.0
23.0
22.0
表土・盛土・攪乱
表土・盛土・攪乱
SR01
SR01
SR01
第1面
第2面
第3面
0
20m
(1/600)
2m
(1/40)
遺構面
灰色シルト層
SR01 最上層
遺構埋土
SR01 上層
SR01 中層
SR01 下層
旧練兵場遺跡 I
旧練兵場遺跡 II
旧練兵場遺跡 III
旧練兵場遺跡 III
旧練兵場遺跡 IV
旧練兵場遺跡 V
0
100m
(1/3000)

図８　土層堆積図（A）



0 2m
(1/60)

1 造成土 盛土
2 10YR7/1 灰白色粘土シルト（全体に鉄分の流動による変色を認める）
3 5Y5/1 灰色粘土シルト（わずかに炭化物を含む）
4 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト（鉄分により変色）
5 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト（鉄分により変色）
6 10YR6/2 灰黄褐色粘質シル（鉄分により変色）
7 5Y7/2 灰白色粘質シルト（鉄分により変色）
8 5Y5/1 灰白色粘質シルト、中世包含層
9 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（土器を含む、上位は変色あり）古代包含層か、SR01 最上層
10 10YR3/1 黒褐色粘質土（土器の細片を多く含む）SR01 上層
11 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（上面に沿ってこぶし大以下の礫や土器が多く堆積する、抜土痕（5mm程）もごく少量含む）SR01 上層
12 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土（2.5Y4/1 黄灰色粘質シルトや2.5Y5/2 灰黄色粘質土ブロックを多く含む）SR01 中層
13 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む）SR01 中層
14 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（沼層の影響で上位に変色、径 1cm 以下の地山ブロックを少量含む）
15 地山 2.5Y7/3 浅黄色粘質土
16 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト
17 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト
18 2.5Y4/1 黄灰色粘質土（沼層の影響で上位は変色）
19 10YR3/1 黒褐色粘質土
20 10YR5/1 褐灰色粘質シルト（全体に鉄分マンガンが流動）
21 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト（全体に鉄分マンガン沈着）
22 2.5Y4/1 黄灰色粘質土（径 1cm 以下の地山ブロックを少量含む）
23 2.5Y3/2 黒褐色粘質土（径 3cm 以下の地山ブロックを多く含む）
24 10YR3/1 黒褐色粘質土（径 1cm 以下の地山ブロックを少量含む）
25 10YR3/1 黒褐色粘質土（径 1cm 以下の地山ブロックを少量含む）
26 10YR3/1 黒褐色粘質土（径 3cm 以下の地山ブロックを少量含む）
27 10YR5/2 灰黄褐色粘質土（地山ブロックと 10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックを多く含む）
28 2.5Y3/2 黒色粘質土（土器を多く包含、鉄分取り巻き）
29 10YR3/1 黒褐色粘質土（2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む）柱痕
30 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む）埋め土
31 5Y2/1 黒色粘質土（全体に土器を包含）
32 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（2.5Y6/1 黄灰色粘質シルトブロックを多く含む）
33 2.5Y3/1 黒色粘質土（検証 12 層ブロックを少量含む、土器細片を多く含む）
34 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
35 5Y4/1 灰色粘質シルト
36 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（径 1cm 以下の地山ないし南壁 12 層ブロックをまばらに多く含む）
37 5Y2/1 黒色粘質土

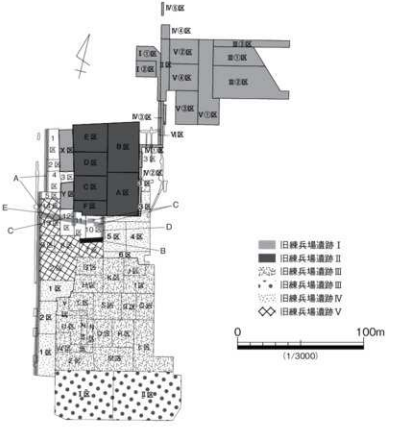
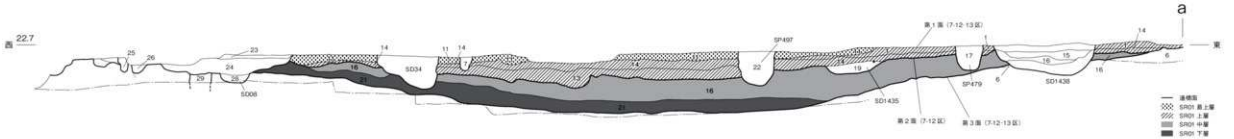
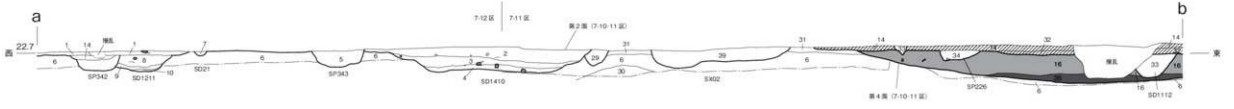
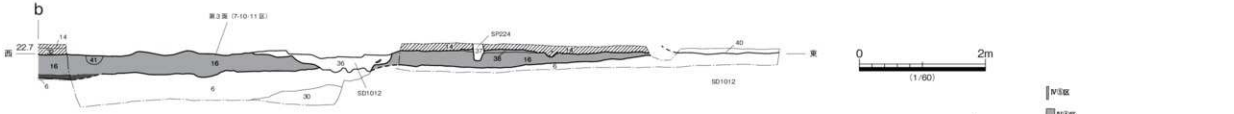
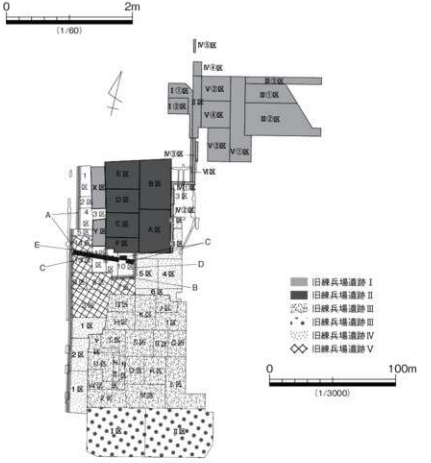


図９ 土層堆積図（B）









12・13 区東西区
1　10YR2/2 黒褐色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径 1 ～ 2cm のブロック土を少量含む）SR01 上層
2　10YR2/2 ～ 3/2 黒褐色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。SD1410 上層
3　10YR2/1 黒色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径 1 ～ 2cm のブロック土を少量含む）SD1410 中層
4　2.5Y3/1 黒褐色シルト（Mn・炭化物を少量含む。粒径 1 ～ 5cm のブロック土をやや多量に含む）SD1410 下層
5　2.5Y5/4 にぶい黄色粘質土、地山
6　10YR7/6 明黄褐色シルト（Fe・Mn）ベース層
7　10YR3/1 黒褐色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径 1 ～ 2cm のブロック土を若干量含む）
8　10YR2/2 ～ 3/2 黒褐色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む）
9　10YR2/1 黒色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径 1 ～ 2cm のブロック土を少量含む）
10 2.5Y3/1 黒褐色シルト（Mn・粒径 1 ～ 3cm のブロック土をやや多量含む）
11 10YR4/1 褐灰色シルト（Fe・Mn・炭化物・焼土粒を少量含む）SR01 最上層
12 10YR3/1 黒褐色粘質土　SR01 上層
13 10YR3/1 ～ 4/1 黒褐色シルト（Mn・Fe・炭化物を少量含む）SR01 上層
15 10YR4/1 ～ 5/1 褐灰色シルト（Mn・Fe・炭化物・焼土細粒を若干量含む。粒径 1 ～ 3cm ブロック土を少量含む）
16 2.5Y5/4 黄褐色シルト（Fe・Mn。下面付近に粒径 5 ～ 6cm のブロック土を少量含む）SR01 中層
17 2.5Y4/2 ～ 4/1 暗灰黄色シルト（Fe・Mn・炭化物粒を少量含む。粒径 1cm 程度のブロック土を底面付近に少量含む）SP479
18 10YR4/1 褐灰色シルト（Fe・Mn・炭化物・焼土粒を少量含む）SR01 最上層
19 2.5Y4/1 ～ 4/2 暗灰黄色シルト（Fe・Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径 1cm 程度のブロック土を少量含む）SD
20 2.5Y3/1 黒色粘土（Fe。粒径 1 ～ 2cm 程度のブロック土を少量含む）SR01 下層
21 2.5Y3/1 黒色粘土（Fe。粒径 1 ～ 2cm 程度のブロック土を少量含む）SR01 下層
22 10YR5/1 褐灰色シルト（径 2 ～ 3cm 大のベースブロック・Mn 粒を多く含む）
23 10YR5/1 褐灰色シルト　SD08
24 10YR4/1 褐灰色シルト（径 5cm 大のベースブロックを少量含む）SD08
25 10YR4/2 灰黄褐色シルト
26 10YR4/2 灰黄褐色シルト
27 10YR5/2 灰黄褐色シルト
28 10YR3/3 暗褐色シルト　SD08
29 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土（2.5Y3/1 黒褐色粘質土ブロックを多く含む）遺構埋土
30 5Y5/2 灰オリーブ色粘質砂（径 1cm 以下の礫・砂質）
31 2.5Y6/2 灰黄色粘質土（2.5Y3/1 黒褐色粘質土ブロックを少量含む）
32 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（上面に焼ってこぶし大以下のレキや土器が多く推積する。焼土塊（5mm 程）をごく少量含む）SR01 上層
33 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土
34 5Y2/2 オリーブ色粘質土、地山（ブロックを少量含む）
35 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（地山土ブロックを少量含む）SR01 下層
36 2.5Y3/1 黒褐色シルト質土（粒径～ 1cm以下の礫を含む。Fe を含む。径0.5cm前後の地山ブロックわずかに含む）
37 2.5Y6/2 灰黄色細砂質土（小礫を含む。Fe を含む）SP224
38 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質土
39 2.5Y3/1 黒褐色粘質土、地山（6層ブロックを多く含む）
40 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土（小礫を含む。Fe・Mn を含む）
41 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土（小礫～砂粒を含む。Fe を含む）

図 10　土層堆積図（C）

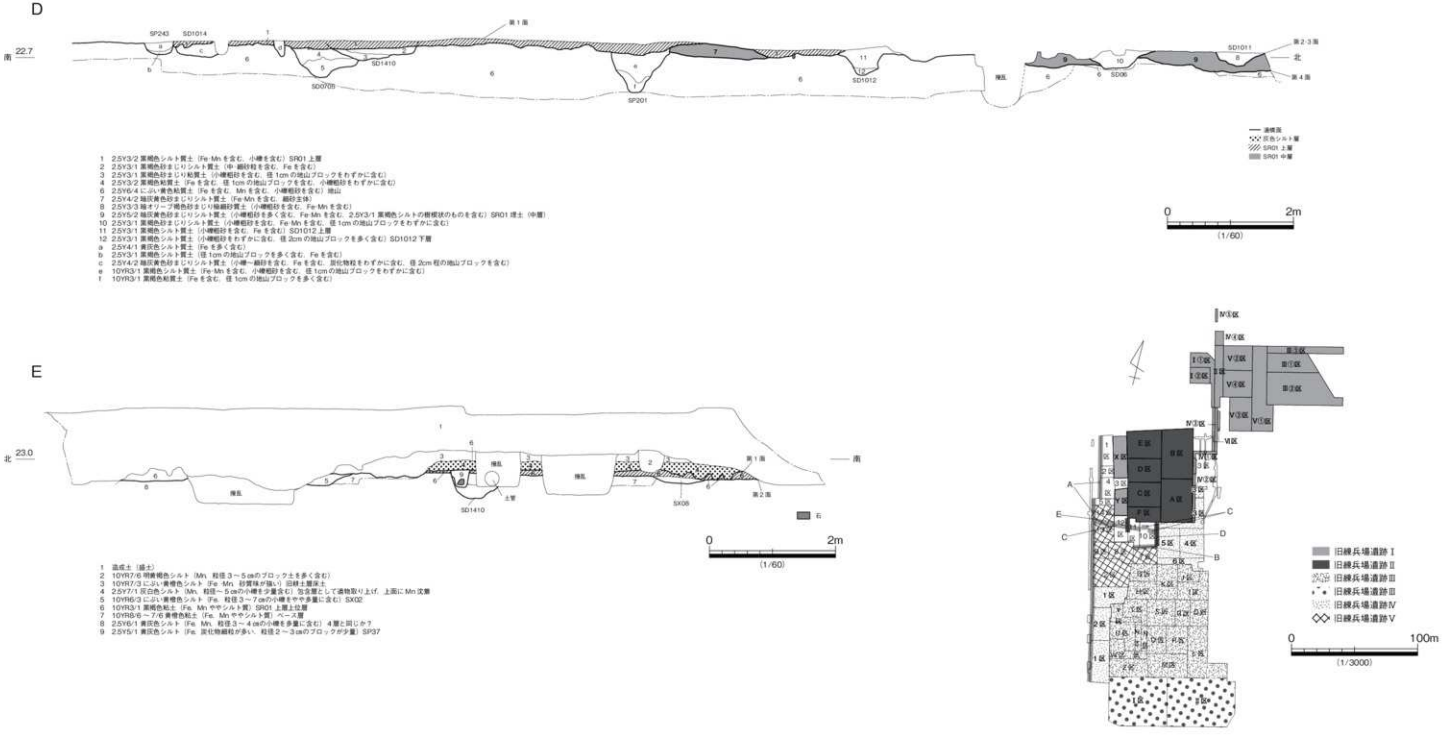

D
南
22.7
SP243
SD1014
第1面
SD1410
SD070
SP201
SD1012
撹乱
SD06
SD1011
第2・3面
第4面
北
0
2m
(1/60)
E
北
23.0
撹乱
SD1410
土管
SX08
第1面
第2面
南
石
0
2m
(1/60)
旧練兵場遺跡Ⅰ
旧練兵場遺跡Ⅱ
旧練兵場遺跡Ⅲ
旧練兵場遺跡Ⅳ
旧練兵場遺跡Ⅴ
0
100m
(1/3000)

図11　土層堆積図（D・E）

図 12　第 28 次調査 7-10 ～ 12 区平面図

第２節　遺構・遺物

１．弥生時代中期から弥生時代後期初頭

溝

SD1008（図 14・15）

7-10 区東部第３面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は上部を SD08、下部を SD23 として調査したが、整理時の検討で、同一溝と判断した。北東から南西（N25° E）に向かう。溝の北部は古代･中世の柱穴 SP58 と重複し、削平される。溝の南部は古代の溝 SD1410 と重複し、削平され、一部途切れるが､SD1410 の南側の溝 SD0719 と連続する可能性が高い。SD1008 の検出長は 3.2 m､溝幅 0.3 ～ 0.5 m である。断面形はややいびつな三角形で､最深部の深さは 0.2 m である。埋土は黒褐色シルトで、弥生土器などが整理箱１箱程度出土した。１～ 11 は SD1008 から出土した土器である。３は弥生土器甕の口縁部片で、焼成破裂痕がある。いずれも弥生時代中期後半に属することから、SD1008 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SD1019（図 14・15）

7-10・7-11 区南部第４面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は SD19 である。SD1019 は東側の溝 SD0719 とほぼ平行して北東から南西に向かう。北端は古代の溝 SD1410 と重複し、削平される。南部はいったん途切れて、南東から北西に向かって蛇行する。検出長 5.7 m、幅 0.3 m、断面形は皿状で、深さ 0.15 m である。遺物は弥生土器片などが少量出土した。12 は SD1019 から出土した土器である。いずれも弥生時代中期後半に属することから、SD1019 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SD1020（図 14・15）

7-10 区東部第４面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は SD20 である。東側の溝 SD1008 とほぼ平行して北東から南西に向かう。検出長 2.2 m、幅 0.5 m、断面形は皿状で、深さ 0.15 m である。遺物は弥生土器片などが少量出土した。13・14 は SD1020 から出土した土器である。いずれも弥生時代中期後半に属することから、SD1020 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SD1021（図 14・15）

7-10 区東部第４面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は SD21 である。西側の溝 SD0719 とほぼ平行して北東から南西に向かう。検出長 6.0 m、幅 0.2 ～ 0.7 m、断面形は皿状で、深さ 0.15 m である。遺物は弥生土器片などが少量出土した。15 ～ 17 は SD1021 から出土した土器である。いずれも弥生時代中期後半に属することから、SD1020 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SD0719（図 13・14・15）

7-10 区第４面（Ⅳ層上面）、7-7 区・7-8 区の第３面（Ⅳ層上面）、7-12 区の第２面（Ⅳ層上面）で検出した溝である。発掘調査時の遺構名は 7-10 区では SD18、7-12 区では SD41 であるが、『旧練兵場遺跡Ⅴ』（平成 27 年２月刊行）で報告した 7-7 区で検出された溝 SD0719 と連続するため、同名を使用する。SD0719 は SD0720 とほぼ平行して北東から南西に向かい、北西方向に円弧を描く。検出長 33 m、幅 0.3 ～ 1.2 m である。断面形は浅い皿状で、深さ 0.1 ～ 0.2 m である。遺物は弥生土器などが少量出土した。18 ～ 23 は SD0719 から出土した土器である。いずれも弥生時代中期後半に属することから、SD0719 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

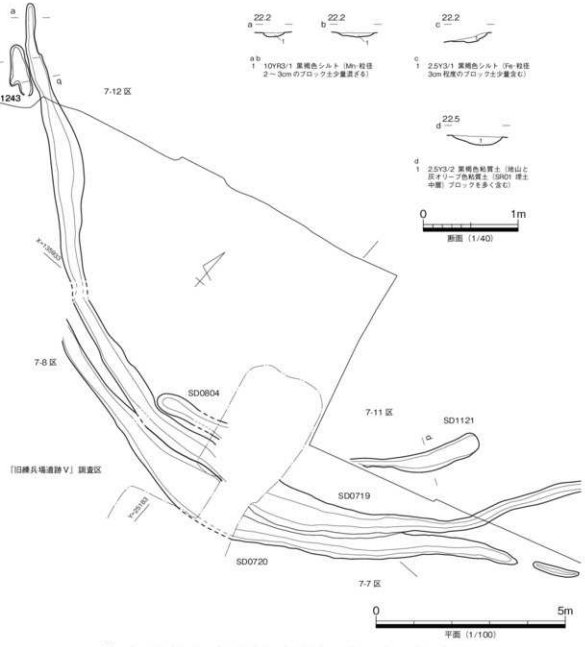


図 13　SD0719・SD0720・SD0804・SD1121・SD1243

SD1022（図 14）

7-10 区西部第 4 面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は SD22 である。北から南に向かう。検出長 1.3 m、幅 0.3 m、断面形は皿状で、深さ 0.15 mである。遺物は出土しなかったが、埋土の色調・土質から SD1022 は弥生時代中期のものと考えられる。

SD1121（図 13・14）

7-11 区南部第 4 面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は SD21 である。北東から南西に向かう。幅 0.2 ～ 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mである。検出長は 3.5 m と短く、7-11 区と 7-7 区の境界付近で終息するが、攪乱坑の西側の溝 SD0804 に連続する可能性が高い。遺物は土器細片が数点出土しただけで、詳細な時期は不明であるが、埋土の色調・土質から SD1121 は弥生時代中期のものと考えられる。

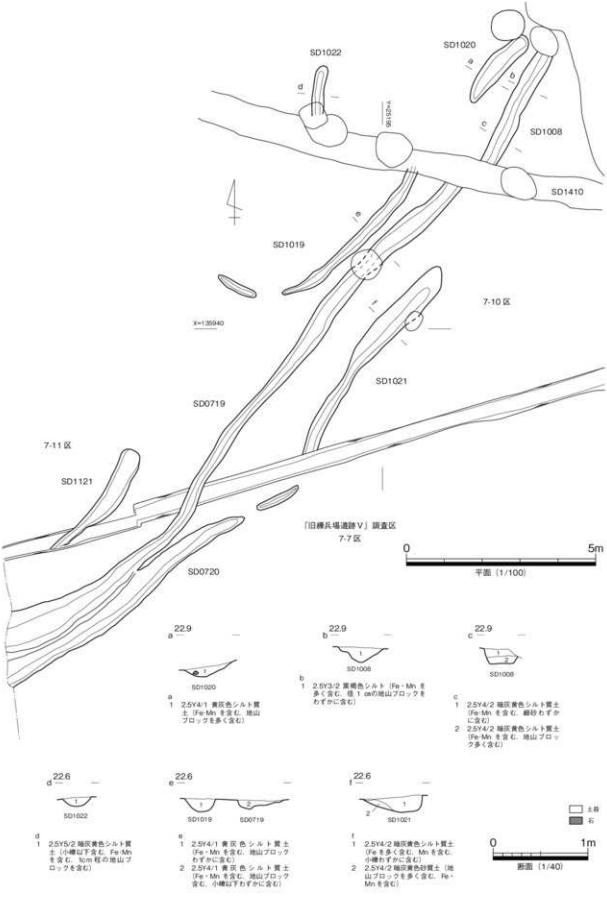


図 14　SD0719・SD1008・SD1019・SD1020・SD1021・SD1022・SD1121

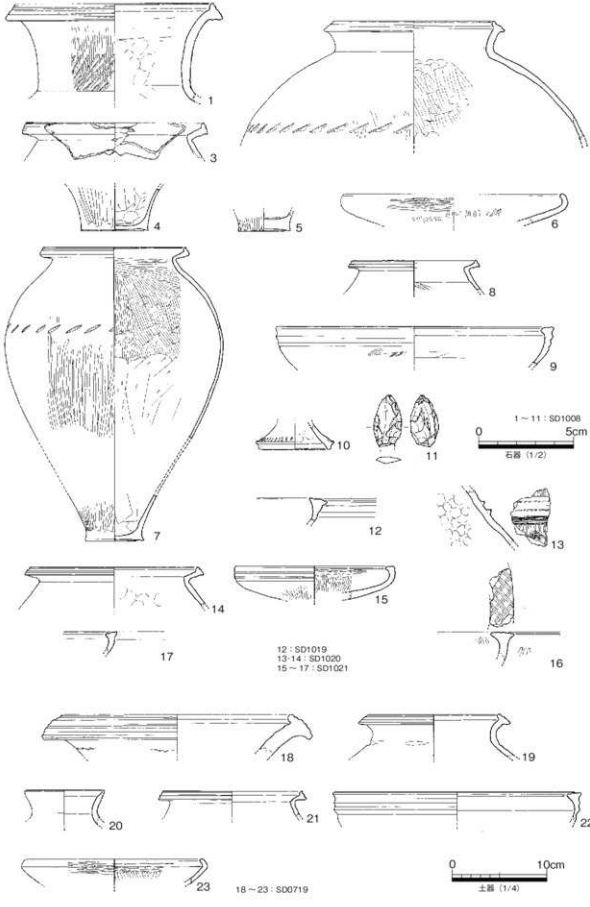


図15　SD1008・SD1019・SD1020・SD1021・SD0719

SD1243（図 13）

7-12 区南西部第 2 面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は SD43 である。7-11 区から 7-7 区、7-8 区にかけて円弧状を描く溝 SD0719 と平行して走る。SD1242 は検出長 1.4 m、幅 0.5 m、深さ 0.1 m である。SD0719 と平行する溝 SD0720 に続く可能性が高い。遺物は出土しなかったが、埋土の色調・土質や SD0719 と平行することから弥生時代中期のものと考えられる。

SD1024（図 16）

7-10 区西部第 4 面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は SD24 である。北東から南西に向かう。北東端は攪乱によって削平される。検出長 0.5 m、幅 0.2 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.05 m である。遺物は出土しなかったが、埋土の色調・土質から SD1024 は弥生時代中期のものと考えられる。

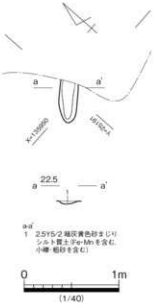


図 16 SD1024

SD1435（図 17）

7-12 区の第 3 面 7-13 区・7-14 区の第 2 面（いずれもⅣ層上面）で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は SD35 であるが、『旧練兵場遺跡Ⅴ』では SD1435 の遺構名で報告したので、ここでも同名を使用する。SD1435 は 7-12 区の南西部からやや蛇行しながら北西に向かい、北西端は古墳時代後期の溝 SD1433 と重複し、削平される。検出長 18.0 m、幅 0.4 ～ 0.6 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.3 m である。出土遺物は弥生土器、サヌカイト片が少量出土した。本書で図化した土器はいずれも弥生時代中期後半のものであるが、『旧練兵場遺跡Ⅴ』で報告した調査区から出土した遺物に弥生時代中期後半から弥生時代後期初頭のものが含まれることから、SD1435 は弥生時代後期初頭のものと考えられる。

河川

SR01（図 18 ～ 24）

SR01 は第 28 次調査では、7-10 区・7-11 区・7-12 区で検出された河川である。SR01 は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で SR02・SR01、『旧練兵場遺跡Ⅲ』で J 区 SR4002・J 区 SR4001、『旧練兵場遺跡Ⅳ』でも SR01 と報告された河川であるが、第 28 次調査によってこれらの河川が連続することがわかった。

SR01 は『旧練兵場遺跡Ⅲ』に掲載された調査区の北端では幅 5.0 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.3 m である。この河川は『旧練兵場遺跡Ⅳ』でも SR01 と報告されているが、同書で報告された 7-3 ～ 6 区では南から北西に向かう。この付近では幅 5 ～ 9 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.5 ～ 0.7 m、底面の標高は 22.3 ～ 22.6 m である。北西に向かった SR01 は北接する第 19 次調査区の南部（『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告）に入る。第 19 次調査区では南向きに蛇行して、第 28 次調査 7-10 区・7-11 区（本書報告）に入り、『旧練兵場遺跡Ⅴ』で報告した第 28 次調査 7-7 区・7-8 区・7-13 区・7-14 区を通って、善通寺市教育委員会が平成 11 年度に老人ホーム建設に伴って調査した第 17 次調査区の北東部、第 30 次調査・第 29 次調査区（本書報告）を通り、再び第 19 次調査区の北部（『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告）に入る。『旧練兵場遺跡Ⅱ』では第 19 次調査の北部で検出された河川は両河川の関係が不明であったため、南部で検出された河川とは別名で、SR02 と報告されている。

本書に掲載する第 28 次調査区では、SR01 はＵ字状に蛇行し、検出長 85 m、幅 8 ～ 13 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.6 ～ 0.7 m である。図 19・20 は SR01 の土層断面図である。図 19 ａａ´は第 1 節

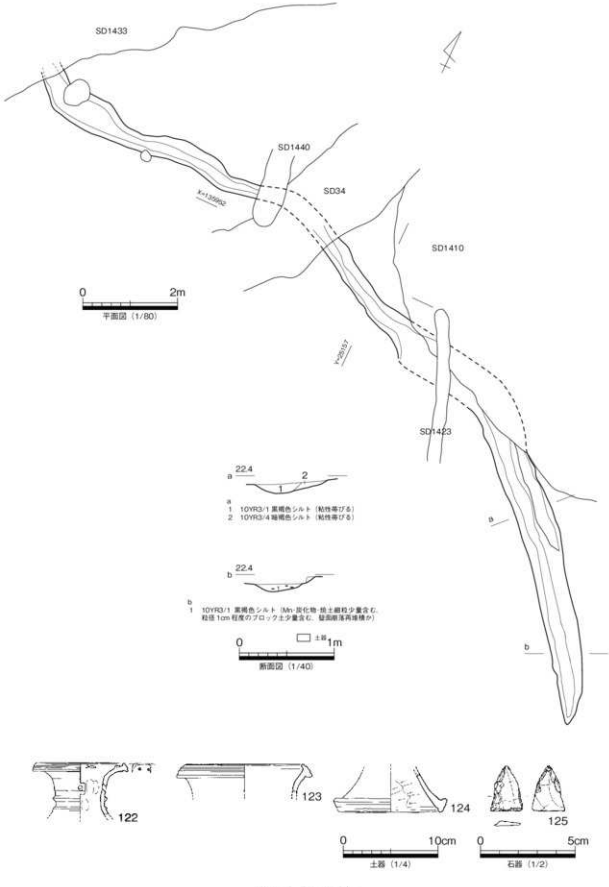

SD1433
SD1440
SD034
SD1410
SD1423
X=135850
Y=25157
0
2m
平面図（1/80）
22.4
a
2
1
a
1　10YR3/1 黒褐色シルト（粘性帯びる）
2　10YR3/4 暗褐色シルト（粘性帯びる）
22.4
b
b
1　10YR3/1 黒褐色シルト（Mn・炭化物・粘土細粒少量含む、粒径 1cm 程度のブロック土少量含む、駆逐断落再堆積か）
0
土器
1m
断面図（1/40）
a
b
122
123
124
125
0
10cm
土器（1/4）
0
5cm
石器（1/2）

図 17　SD1435

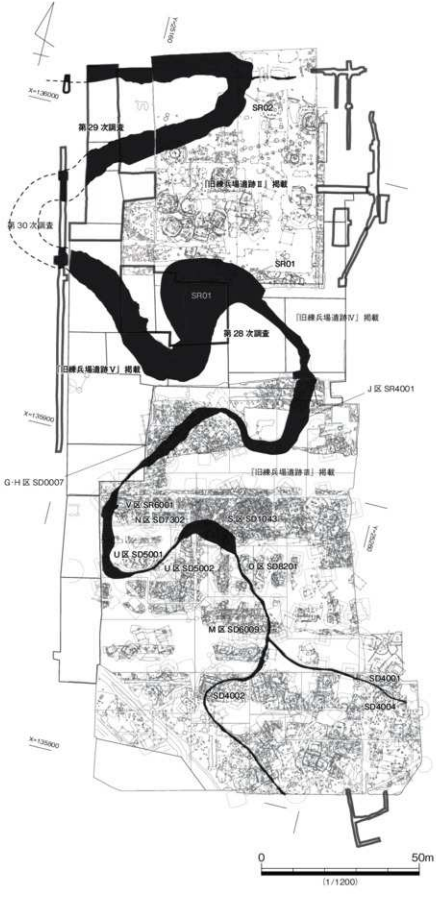

Y=58000
X=136000
SR02
第29 次調査
「旧練兵場遺跡Ⅱ」掲載
第30 次調査
SR01
SR01
「旧練兵場遺跡Ⅳ」掲載
第28 次調査
「旧練兵場遺跡Ⅴ」掲載
J 区 SR4001
X=135900
「旧練兵場遺跡Ⅲ」掲載
G･H 区 SD0007
V区 SR6001
N区 SD7302
S区 SD1043
Y=56000
U区 SD5001
U区 SD5002
O区 SD6201
M区 SD6003
SD4001
SD4002
SD4004
X=135800
0
50m
(1/1200)

図 18　SR01(1)

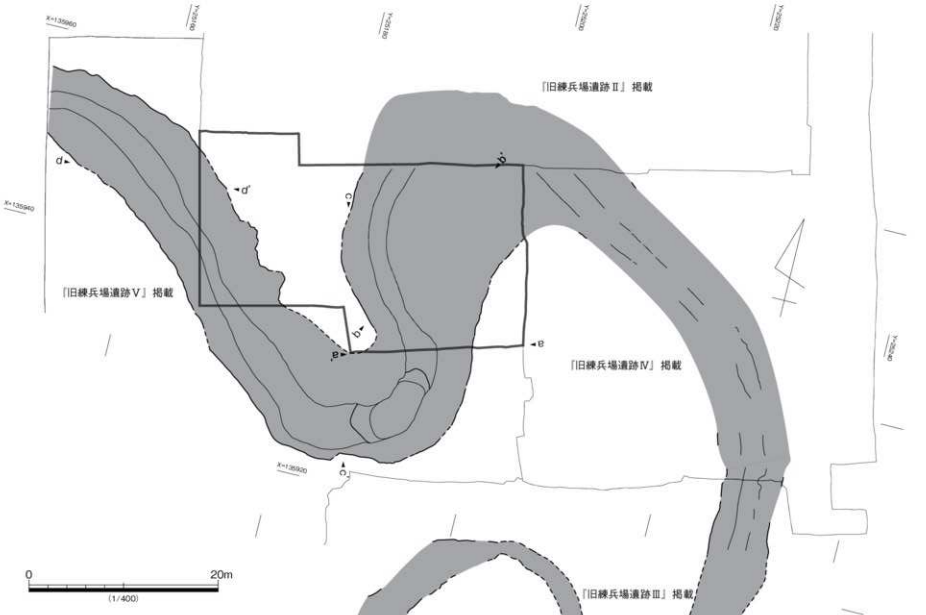
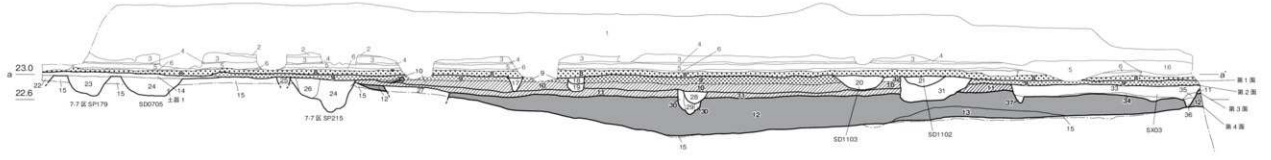
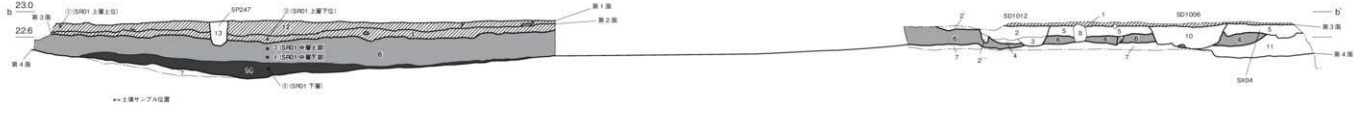

X=139960
Y=25140
Y=25130
Y=25120
Y=25110
X=139940
X=139920
Y=25120
「旧練兵場遺跡Ⅱ」掲載
「旧練兵場遺跡Ⅴ」掲載
「旧練兵場遺跡Ⅳ」掲載
「旧練兵場遺跡Ⅲ」掲載
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
0
20m
(1/400)

図19　SR01（2）



a-a'
1 造成土 盛土
2 10YR7/1 灰白色粘土シルト（全体に鉄分の流動による変色を認める）
3 5Y5/1 灰色粘土シルト（わずかに炭化物を含む）
4 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト（鉄分により変色）
5 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト（鉄分により変色）
6 10YR6/2 灰黄褐色粘質シル（鉄分により変色）
7 5Y7/2 灰白色粘質シルト（鉄分により変色）
8 5Y8/1 灰白色粘質シルト、中世包含層
9 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（土器を含む、上位は変色あり）古代包含層か、SR01 最上層
10 10YR3/1 黒褐色粘質土（土器の細片を多く含む）SR01 上層
11 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（上面に近ってこぶし大以下の礫や土器が多く推積する、他土塊（5mm程）をごく少量含む）SR01 上層
12 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土（2.5Y4/1 黄灰色粘質シルトや2.5Y6/2 灰黄色粘質土ブロックを多く含む）SR01 中層
13 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む）SR01 中層
14 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（治層の影響で土位に変色、径 1cm 以下の地山ブロックを少量含む）
15 地山土 2.5Y7/3 浅黄色粘質土
16 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト
17 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト
18 2.5Y4/1 黄灰色粘質土（治層の影響で土位は変色）
19 10YR3/1 黒褐色粘質土
20 10YR5/1 褐灰色粘質シルト（全体に鉄分マンガンが沈着）
21 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト（全体に鉄分マンガンが沈着）
22 2.5Y4/1 黄灰色粘質土（径 1cm 以下の地山ブロックを少量含む）
23 2.5Y3/2 黒褐色粘質土（径 3cm 以下の地山ブロックを多く含む）
24 10YR5/1 黒褐色粘質土（径 1cm 以下の地山ブロックを少量含む）
25 10YR3/1 黒褐色粘質土（径 1cm 以下の地山ブロックを少量含む）
26 10YR3/1 黒褐色粘質土（径 3cm 以下の地山ブロックを少量含む）
27 10YR5/2 灰黄褐色粘質土（地山ブロックと 10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックを多く含む）
28 2.5Y3/2 黒色粘質土（土器を多く包含、抜き取り痕か）
29 10YR3/1 黒褐色粘質土（2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む）柱痕
30 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む）埋め土
31 5Y2/1 黒色粘質土（全体に土器を包含）
32 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（2.5Y6/1 黄灰色粘質シルトブロックを多く含む）
33 2.5Y3/1 黒色粘質土（南壁 12 層ブロックを少量含む、土器細片を多く含む）
34 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
35 5Y4/1 灰色粘質シルト
36 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（径 1cm 以下の地山ないし南壁 1 2 層ブロックをまばらに多く含む）
37 5Y2/1 黒色粘質土



b-b'
1 2.5Y4/1 黄灰色砂まじりシルト質土（Fe·Mn を多く含む、小礫相砂を含む）
2 10YR3/2 黒褐色砂まじりシルト質土（Fe·Mn を含む、小礫相砂を含む）SD1012 上層
2' 10YR3/2 黒褐色砂まじりシルト質土（2 層と同一層と考えられる）
2'' 10YR3/2 黒褐色シルト質土（粘か？）
3 2.5Y3/1 黒褐色砂まじりシルト質土（2 層より粘質、細砂相相砂を含む、Fe もわずかに含む）SD1012 下層
4 2.5Y5/3 黄褐色砂質土と 2.5Y3/1（黒褐色シルト質土が混在するように推積）SD1012 下層
5 2.5Y3/1 黒褐色シルト質土（小礫もわずかに含む、Fe を含む、細砂を含む）SX04
6 2.5Y3/1 黒褐色極細砂質土（小礫相砂を含む、Fe を含む）
7 2.5Y5/6 黄褐色極細砂質土（Fe·Mn を含む）地山
8 10YR3/2 黒褐色シルト質土（2cm 以下地山ブロックをわずかに含む、Fe·Mn を多く含む）
9 2.5Y3/1 黒褐色極細砂まじり粘質土
10 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土（Fe·Mn を多く含む、小礫相砂を含む、1cm 以下地山ブロックをわずかに含む）
11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（中～極細砂主体、2cm 以下の礫をわずかに含む）SR01 中層
12 2.5Y3/2 黒褐色砂まじりシルト質土（土器片多数包含、小礫相砂を多く含む、Fe·Mn を含む）SR01 上層上位
13 2.5Y5/2 暗灰黄色砂まじりシルト質土（Fe·Mn を多く含む、小礫相砂を多く含む）SP247
14 2.5Y3/1 黒褐色砂まじりシルト質土（4mm 以下の礫を多く含む、Fe·Mn を含む）

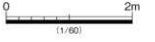
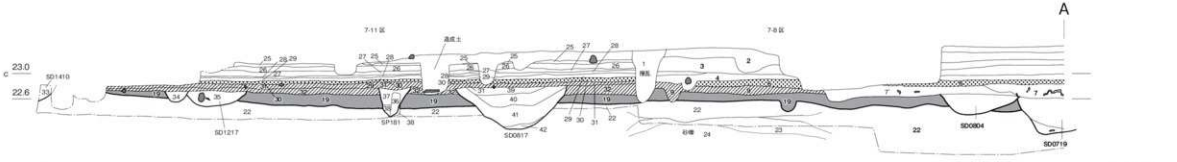


図 20 SR01（3）



c-c'

1 2.5Y4/1 黒灰色砂質シルト
2 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト
3 5Y7/1 灰白色砂質シルト（Mn 粒含む）
4 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト（酸化鉄粒含む）
5 5Y7/1 灰白色砂質シルト（Mn 粒含む）
6 5Y7/1 灰白色砂質シルト混じり 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト
7 2.5Y2/1 黒色粘質シルト
7 2.5Y3/1 黒褐粘質シルト
8 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト混じり粘質シルト
9 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト
10 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト（2.5Y7/4 浅黄色粘質シルトブロック微量混じる）
11 2.5Y7/4 浅黄色粘質シルトブロック少量混じり 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト
12 2.5Y3/1 黒褐色小礫混じり砂質シルト
13 2.5Y3/1 黒褐小礫混じり砂質シルト（12 よりやや濃い）
14 2.5Y7/4 浅黄色粘質シルトブロック混じり 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト
15 2.5Y3/1 黒褐色小礫微量混じり砂質シルト
16 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト
17 2.5Y7/6 明黄褐色粘質シルトブロック混じり 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト（小礫・土器片多量に混じる）
18 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルト
19 2.5Y5/2 暗灰黄色小礫混じり砂質シルト
20 2.5Y6/4 にぶい黄色混じり 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト
21 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルトブロック混じり 2.5Y7/6 明黄褐色粘質シルト
22 2.5Y7/6 明黄褐色砂質シルト（地山）
23 2.5Y6/2 灰黄色粘質砂
24 2.5Y6/1 黄灰色砂礫層
25 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト（鉄分により変色）
26 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、鉄分をまばらに多く含む
27 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト、2.5Y7/1 灰白色粘質シルトブロックをまばらに多く含む
28 10YR6/2 灰黄褐色粘質シル（鉄分により変色）
29 5YB/1 灰白色粘質シルト、中世包含層
30 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（土器を含む、上位は変色あり）古代包含層か、SR01 最上層
31 10YR3/1 黒褐色粘質土（土器の細片をまばらに多く含む）SR01 上層
32 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（上面に向ってこぶし大以下のレキや土器が多く堆積する、焼土塊（5mm 程）もごく少量含む）SR01 上層
33 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（2.5Y 灰黄色粘質土ブロックを少量含む）
34 2.5Y6/2 灰黄色粘質土（地山土ブロックを多く含む）
35 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（地山土ブロックを多量に含む、こぶし大の礫と土器を多量に含む）
36 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト（径 1cm 以下の 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む）
37 5Y4/1 灰色粘質土（地山土ないし 10 層ブロックを多く含む）
38 2.5Y4/1 黄灰色粘質土（地山ないし 10 層ブロックを少量含む）
39 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土（径 2cm 以下の地山土ブロックないし SR01 中層ブロックを少量含む）
40 5Y4/1 灰色粘質シルト（地山ブロック＋細ラミナ一部ごと含む）
41 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（上面に向ってこぶし大以下の礫や土器が多く堆積する、焼土塊（5 cm程）もごく少量含む）
42 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土（2.5Y4/1 黄灰色粘質シルトで 2.5Y5/2 灰黄色粘質土ブロックを多く含む）

d-d'

1 10YR2/2 黒褐色シルト（Mn 炭化物・焼土細粒を少量含む、粒径 1～2cm のブロック土を少量含む）SR01 上層
2 10YR2/2～3/2 黒褐色シルト（Mn 炭化物・焼土細粒を少量含む、SD10 上層
3 10YR2/1 黒色シルト（Mn 炭化物・焼土細粒を少量含む、粒径 1～2cm のブロック土を少量含む）SD10 中層
4 2.5Y3/1 黒褐色シルト（Mn 炭化物を少量含む、粒径 1～5cm のブロック土をやや多量に含む）SD10 下層
5 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土、地山
6 10YR7/6 明黄褐色シルト（Fe・Mn）ベース層
7 10YR3/1 黒褐色シルト（Mn 炭化物・焼土細粒を少量含む、粒径 1～2cm のブロック土を若干含む）
8 10YR2/2～3/2 黒褐色シルト（Mn 炭化物・焼土細粒を少量含む）
9 10YR2/1 黒色シルト（Mn 炭化物・焼土細粒を少量含む、粒径 1～2cm のブロック土を少量含む）
10 2.5Y3/1 黒褐色シルト（Mn 粒径 1～3cm のブロック土をやや多量含む）
11 10YR4/1 褐灰色シルト（Fe・Mn 炭化物・焼土粒を少量含む）SR01 最上層
13 10YR3/1 黒褐色粘質土　SR01 上層
14 10YR3/1～4/1 黒褐色シルト（Mn・Fe・炭化物を少量含む）SR01 上層
15 10YR4/1～5/1 褐灰色シルト（Mn・Fe・炭化物・焼土細粒を若干量含む、粒径 1～3cm ブロック土を少量含む）
16 2.5Y5/4 黄褐色シルト（Fe・Mn、下面付近に粒径 5～6cm のブロック土を少量含む）SR01 中層
17 2.5Y4/2～4/1 暗灰黄色シルト（Fe・Mn・炭化物粒を少量含む、粒径 1cm 程度のブロック土を底面付近に少量含む）SP479
18 10YR4/1 褐灰色シルト（Fe・Mn・炭化物・焼土粒を少量含む）SR01 最上層
19 2.5Y4/1～4/2 暗灰黄色シルト（Fe・Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む、粒径 1cm 程度のブロック土を少量含む）SD
20 2.5Y3/1 黒色粘土（Fe、粒径 1～2cm 程度のブロック土を少量含む）SR01 下層
21 2.5Y3/1 黒色粘土（Fe、粒径 1～2cm 程度のブロック土を少量含む）SR01 下層
22 10YR5/1 褐灰色シルト（径 2～3cm大のベースブロック・Mn 粒を多く含む）
23 10YR5/1 褐灰色シルト　SD08
24 10YR4/1 褐灰色シルト（径 5cm 大のベースブロックを少量含む）SD08
25 10YR4/2 灰黄褐色シルト
26 10YR4/2 灰黄褐色シルト
27 10YR5/2 灰黄褐色シルト
28 10YR3/3 褐褐色シルト　SD08
29 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土（2.5Y3/1 黒褐色粘質土ブロックを多く含む）遺構埋土
30 5Y5/2 灰オリーブ色粘質砂（径 1cm 以下の礫・砂層）
31 2.5Y6/2 灰黄色粘質土（2.5Y3/1 黒褐色粘質土ブロックを少量含む）
32 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（上面に向ってこぶし大以下のレキや土器が多く堆積する、焼土塊（5mm 程）もごく少量含む）SR01 上層
33 2.5Y6/2 にぶい黄色粘質土
34 5Y3/2 オリーブ色粘質土、地山（ブロックを少量含む）
35 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（地山土ブロックを少量含む）SR01 下層
36 2.5Y3/1 黒褐色シルト質土（相径～1cm 以下の礫を含む、Fe を含む、径 0.5cm 前後の地山ブロックもわずかに含む）
37 2.5Y6/2 灰黄色細砂質土（小礫を含む、Fe を含む）SP224
38 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質土
39 2.5Y3/1 黒褐色粘質土、地山（6 層ブロックを多く含む）
40 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土（小礫を含む、Fe・Mn を含む）
41 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土（小礫・相径を含む、Fe を含む）

図 21　SR01（4）

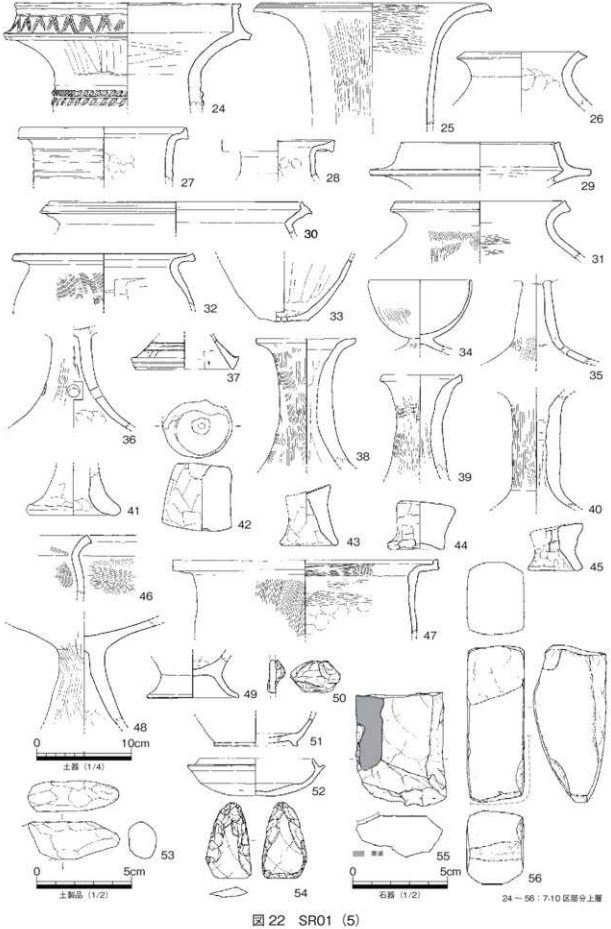

24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
0
10cm
土器（1/4）
0
5cm
土製品（1/2）
0
5cm
石器（1/2）
24～56：7-10区部分上層

図22　SR01（5）

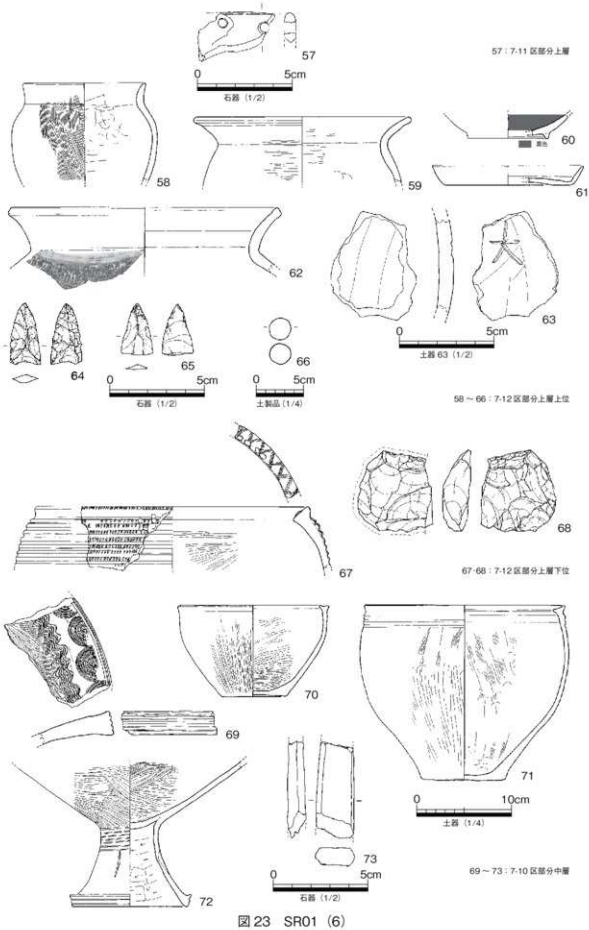

57
0 5cm
石器（1/2）
57：7-11 区部分上層
58
59
60
黒色
61
62
63
0 5cm
土器63（1/2）
64
65
0 5cm
石器（1/2）
66
0 5cm
土製品（1/4）
58～66：7-12区部分上層上位
67
68
67·68：7-12区部分上層下位
69
70
71
0 10cm
土器（1/4）
72
73
0 5cm
石器（1/2）
69～73：7-10区部分中層

図23　SR01（6）

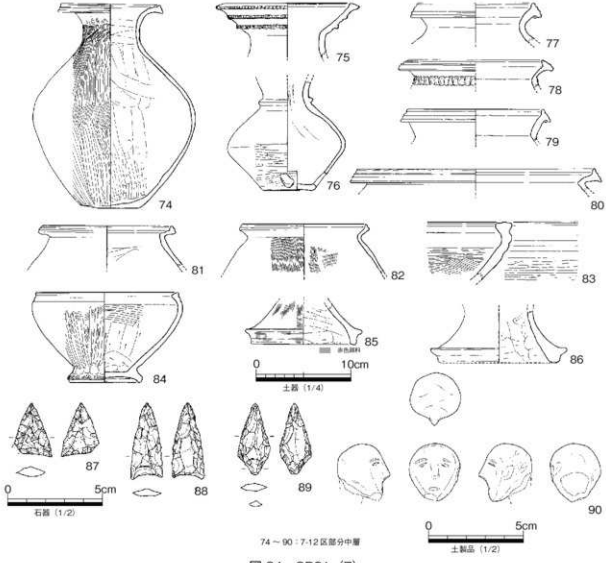


図 24　SR01（7）

にも掲載したが、7-10 区・7-11 区の南壁の土層断面図である。また、図 20 ｃｃ´は『旧練兵場遺跡Ⅴ』に掲載した 7-8 区東壁と 7-11 区の土層断面図である。そのほか、7-12 区・7-13 区部分（ｄｄ´）、7-10・11 区部分（ｂｂ´）の土層断面図を掲載した。発掘調査では SR01 の埋土を下層・中層・上層・最上層の４層に大別した。各調査区によって微妙に土色・土質は異なるが、いずれの調査区でも下層は厚さ 0.2 ～ 0.3 m の黒褐色粘質シルトで、弥生時代前期から中期後半の土器を含む。中層は厚さ 0.3 ～ 0.5 m のにぶい黄褐色粘質シルトで、弥生時代中期後半の土器を含む。SR01 は中層の堆積で埋土の堆積はほぼ終了するが、若干の凹みが後世まで残り、凹みには黒褐色粘質シルト（上層）、その上部には 7-13 区・7-14 区では褐灰色シルト～黒褐色粘質シルト（最上層）が堆積する。第１節でも報告したが、上層を２層に分けて、上層下位の上面から８世紀末の土坑 7-11 区 SK01、最上層上面には中世の遺構が掘られていることから、上層下位は８世紀末以前、最上層は中世以前の堆積であることがうかがわれる。なお、第７章第１節の分析によると、上層上位・下位のいずれの層からもイネの植物珪酸体が多量に検出されたことから、これらの土層は耕作土層の可能性が高い。また、中層からは検出されなかった。

遺物は下層から上層のいずれの層位からも多量に出土した。24 ～ 56 は 7-10 区部分の上層から出土し

た遺物である。7-10 区部分の上層から出土した 29 は弥生土器壺口縁部である。複合口縁で、複合部が突出し、弥生時代後期の西部瀬戸内に多く見られる形態であるが、土器胎土は旧練兵場遺跡で一般的にみられるものである。そのほか土師器甕（46・47）や須恵器底部片（51）、須恵器杯（52）などがある。47 は土師器甕で、9 世紀に属する。52 は須恵器杯で、陶邑編年 TK217 型式に属し、7 世紀前葉から中葉のものである。56 は結晶片岩製の柱状片刃石斧を叩き石に転用したものである。57 は 7-11 区部分の上層から出土した。57 は磨製石包丁の背部付近で、石材は輝緑凝灰岩の可能性が高い。2 個の円孔がある。58 ～ 66 は 7-12 区部分の上層の上位から出土した。60 は黒色土器椀で 10 世紀前半、61 は須恵器皿で、8 世紀後半に属する。63 は須恵器甕の体部片で、外面に「大」の字が箆描きされる。67・68 は 7-12 区部分上層下位から出土した遺物である。上層と各遺構の埋土の区別は付き難く、上部から掘り込まれている遺構の遺物が混入している可能性も否定できないが、上層には弥生時代中期から後期の土器のほか古代の土師器・須恵器が含まれる。特に 7-12 区上層上位には 7 ～ 10 世紀の遺物が含まれる。

69 ～ 73 は 7-10 区部分中層、74 ～ 90 は 7-12 区部分中層から 7-12 区部分の上層上位から出土した遺物である。73 は刃部・基部を欠損するが、結晶片岩製の扁平片刃石斧である。85 は高杯脚部で、赤彩がみられる。土器胎土は茶褐色で、角閃石・雲母を含む。吉備地方からの搬入品であろう。90 は土製品で、人の頭部を象ったものである。下部には剥離痕があり、剥離面は円形で、首が付いていたことがうかがわれる。頭部の長さは 3.1cm、幅 2.6cm。顔は逆三角形で、鼻は高く、頭部には髪の毛の表現はない。ヘラ状工具により線状の凹みで眉・目・口を表現している。顔の左側面の耳に当たる場所には凹みがあり、耳を表現している可能性もあるが、右側面には凹みはみられない。同じような土製品は岡山市南方（済生会）遺跡から出土している [1]。南方（済生会）遺跡例は頭部の長さは 2.4cm、幅 2.6 ｃｍとほぼ同じ大きさである。このように中層から出土した土器はいずれも弥生時代中期後半のものである。本書で掲載した調査区では下層から出土した遺物は図化可能なものはみられなかった。

このように SR01 の埋没は弥生時代中期から始まり、大部分は弥生時代中期後半までに埋没している。また、上層下位層上面からは 8 世紀末ごろの土師器焼成土坑が検出されていることから、上層下位の堆積は 8 世紀末以前、上層上位の堆積は 10 世紀ごろであると考えられる、なお、本書 7 章に自然科学的分析の結果を掲載しているが、分析の結果上層の黒褐色粘質シルト層にはイネ科の植物珪酸体が含まれることが指摘されているから、上層は古代の耕作による攪拌層の可能性が高い。

2．弥生時代後期

竪穴建物

7-12 区 SH02（図 25）

7-12 区東部第 2 面（Ⅳ層上面）で検出された遺構である。周辺は現在の建物基礎の攪乱や古代の柱穴や溝によって削平され、遺構の全体は不明瞭であるが、溝が弧状に巡ることから、竪穴建物と考えた。建物の平面形はややいびつな円形と推定される。壁溝は幅 0.1 ～ 0.3 m、深さ 0.5 mである。柱穴は SP319・SP176・SP178・SP240 がある。いずれも平面形は円形で、径 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.05 ～ 0.2 mである。遺物は土器片が少量出土した。小片のため詳細な時期は不明であるが、平面形が円形であることから SH02 は弥生時代のものと考えられる。

7-10 区 SX04（図 26）

7-10 区北東部第 3 面（Ⅳ層上面）で検出された遺構である。古代の溝 SD1006・SD1012・SD1015、

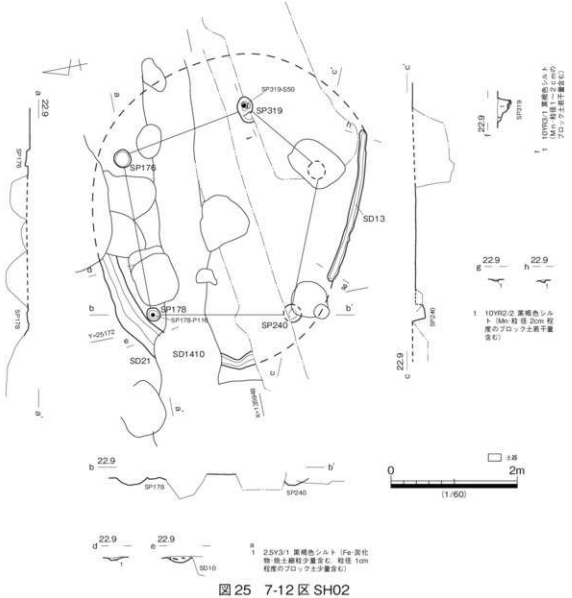


図 25　7-12 区 SH02

古代の柱穴 SK02 と重複し、削平されるため、SX04 の西部・北部・南部は不明であるが、残存する遺構の東部の輪郭が円弧状で、底面は平坦であることから、平面形円形の竪穴建物と考えた。東壁際には壁溝 SD17 がある。SD17 は幅・深さとも 0.1 m前後である。遺構の底面から柱穴は検出されず、主柱穴は不明である。遺物は少量の土器片が出土しただけであるが、平面形が円形であることから SX04 は弥生時代の竪穴建物と考えられる。

土坑

7-11 区 SK06（図 27）

7-11 区西部第 3 面（SR01 中層上面）で検出された土坑である。古代の掘立柱建物 SB07 の柱穴 SP146 と重複し、西部は削平される。平面形は楕円形で、長軸 1.6 m、短軸 0.8 mである。断面形は浅い皿状で、深さ 0.05 mである。遺物は土器片が少量した。須恵器片はみられないことから、SK06 は弥生時代のものと考えられる。

7-11 区 SX02（図 28 ～ 30）

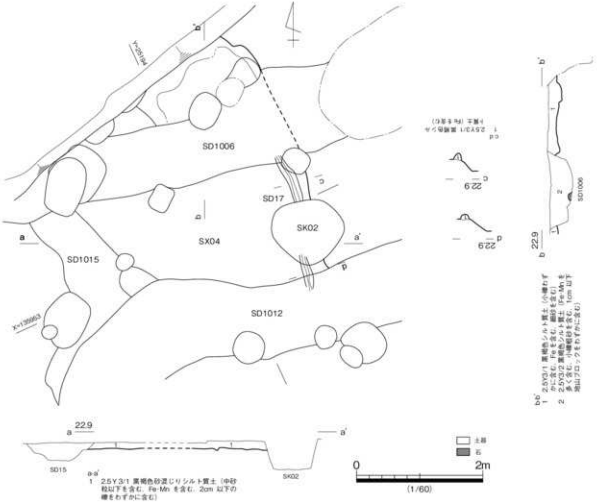


図26　7-10区 SX04

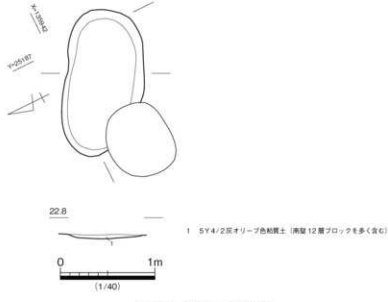


図27　7-11区 SK06

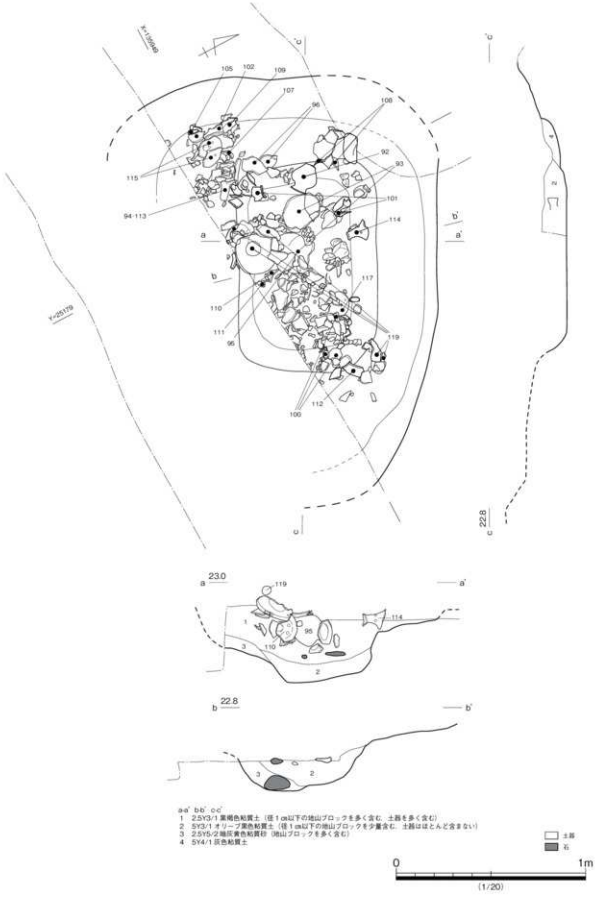


図28　7-11区SX02（1）

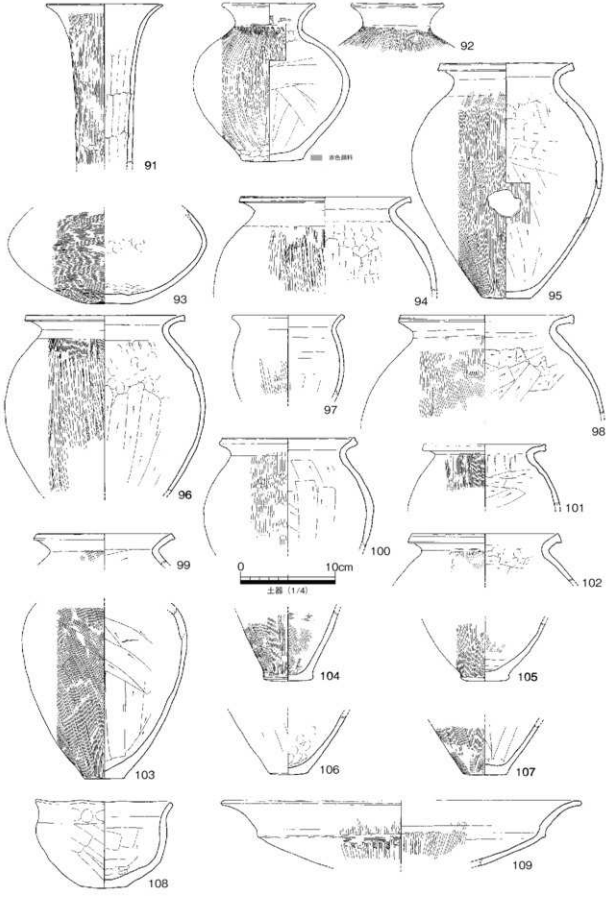


図29　7-11区SX02（2）

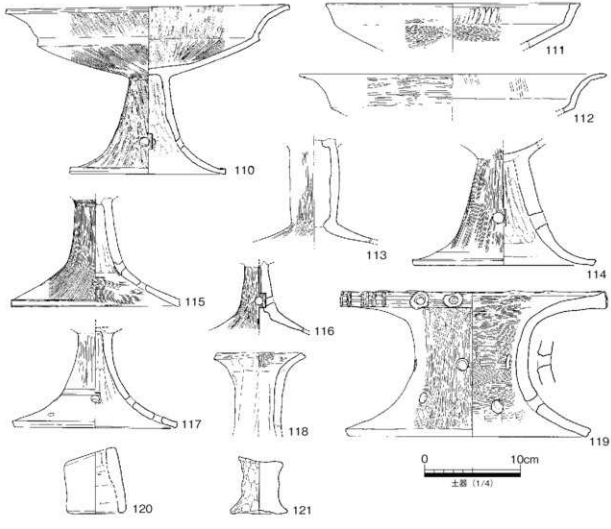


図 30　7-11 区 SX02（3）

7-11 区北西部第 3 面（Ⅳ層上面）で検出された土坑である。南部は攪乱によって削平されるため、不明である。残存部分から平面形はややいびつな隅丸長方形で、長軸 2.1 m以上、短軸 1.4 m以上と考えられる。底面は二段になり、最深部の深さは 0.4 mである。SX02 の中からは多量の弥生土器が出土した。いずれも破片の状態で出土したことから、廃棄されたものと考えられる。91 ～ 121 は SX02 から出土した土器である。91 は長頸壺の口頸部、93 は壺の体部から底部である。接合点はなかったが、胎土が類似しており、同一個体の可能性が高い。92 は頸部外面の一部に刻み目があり、赤彩が施される。これらの土器はいずれも弥生時代後期中葉に属することから、SX02 も同時期のものと考えられる。

溝

SD1010（図 31）

7-10 区南東部第 3 面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。調査時の遺構名は SD10 である。SD10 は南西から北東（N60° E）に向かう。SD10 の中央部は中世の柱穴 SP11 に削平され、SP11 の東でいったん途切れるが、これらを合わせた検出長 2.8 m、幅 0.15 m、深さ 0.5 mである。遺物は少量の弥生片が出土した。竪穴建物の壁溝の一部の可能性もある。遺物は土器小片が少量出土した。須恵器はみられな

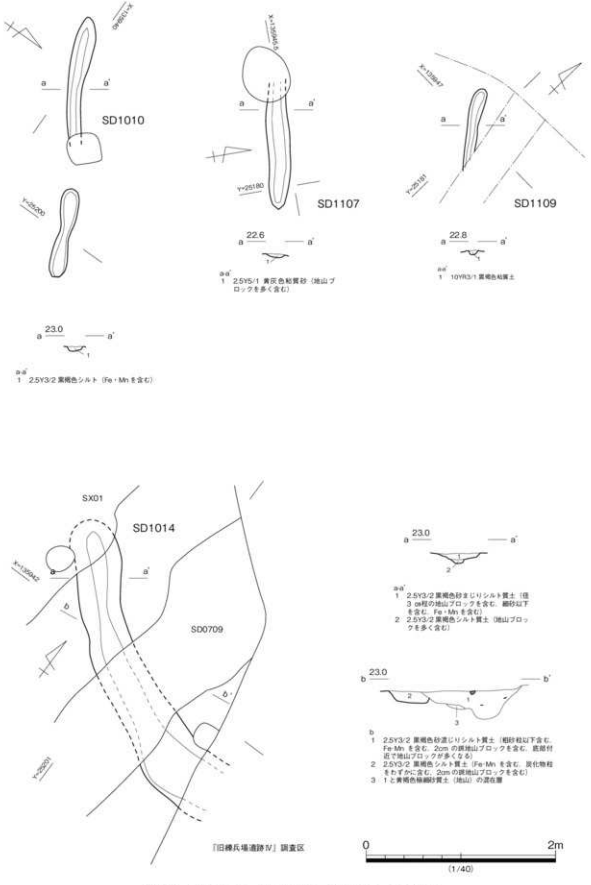


図 31　SD1010・SD1107・SD1109・SD1014

いことから、弥生時代のものと考えられる。

SD1014（図 31）

7-10 区南東部第 3 面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。調査時の遺構名は SD14 である。東から北西（W50° N）に向かう。東端に隣接する調査区は『旧練兵場遺跡Ⅳ』（平成 26 年 3 月刊行）で報告した 7-5 区であるが、7-5 区西部は攪乱によって大きく削平されており、SD1014 の東端は不明である。SD1014 は北西端では古代の土坑 7-11 区 SX01、中央部では古代の溝 SD0709 と重複し、削平される。いずれも SD1014 のほうが古い。SD1014 の検出長は 3.0 m、溝幅 0.4 ～ 0.5 m、深さ 0.15 m である。弥生土器片が少量出土したことから、SD1014 は弥生時代の溝と考えられる。

SD1107（図 31）

7-11 区の西部第 3 面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。調査時の遺構名は SD07 である。南東から北西方向に走る。溝の北西端は中世の柱穴 SP10 と重複し、削平される。検出長 1.2 m、幅 0.2 m、断面形は浅い皿状で、深さは 0.05 m である。土器小片が 1 点出土しただけで、詳細な時期は不明であるが、SD1107 は弥生時代の溝と考えられる。

SD1109（図 31）

7-11 区の西部第 3 面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。調査時の遺構名は SD09 である。南東から北西方向に走る。南東端は攪乱によって削平される。検出長 2.2 m、幅 0.15 m で、断面形は皿状で、深さ 0.05 m である。土器小片が 1 点出土しただけで、詳細な時期は不明であるが、弥生時代の竪穴建物の壁溝の可能性が高い。

SD1113（図 32）

7-11 区の西部第 3 面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。調査時の遺構名は SD13 である。ほぼ東西に向かう。東端は古代から中世の柱穴 SP134、西端は古代の溝 SX1101 と重複し、削平される。SD1113 は検出長 0.8 m、幅 0.15 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.05 m である。土器体部小片が 1 点出土しただけで、詳細な時期は不明であるが、弥生時代の竪穴建物の壁溝の可能性が高い。

SD1115（図 32）

7-11 区の南西部第 3 面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。調査時の遺構名は SD15 である。南東から北西（N65° W）に向かう。南東端は中世の柱穴 SP160 と重複し、削平される。北西端は 7-12 区に連続するがこの付近は削平されているため不明である。SD1115 は検出長 4.1 m、幅 0.4 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.1 m である。遺物は土器片・サヌカイト片が少量出土しただけである。須恵器は含まないことから、弥生時代の溝と考えられる。

SD1117（図 32）

7-11 区南東部第 3 面（SR01 中層上面）で検出された溝である。調査時の遺構名は SD17 である。南南東から北北西（N22° W）に向かう。北西端は古代から中世の柱穴 SP200 と重複し、削平される。検出長 1.2 m、幅 0.15 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.05 m である。竪穴建物の壁溝の可能性が高い。土器小片が 10 点程度出土した。須恵器は含まないことから、弥生時代の溝と考えられる。

SD1118（図 32）

7-11 区南西部第 3 面（SR01 中層上面）SX03 の底面で検出された溝である。調査時の遺構名は SD18 である。南西から北東（N43° E）に向かう。南西端は攪乱によって大きく削平される。検出長 1.2 m、幅 0.2 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.05 m である。遺物は土器小片が 1 点出土した。遺物の詳細な時

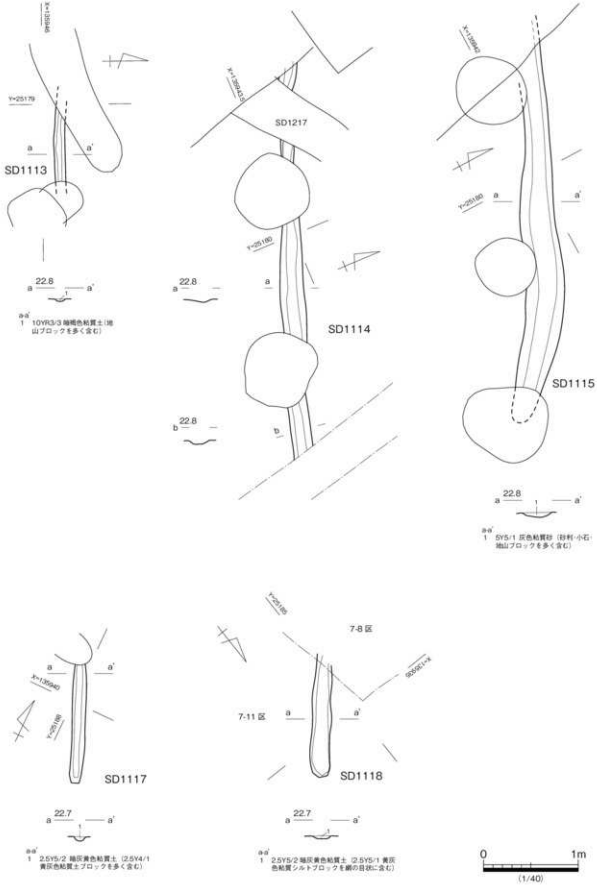


図 32　SD1113・SD1114・SD1115・SD1117・SD1118

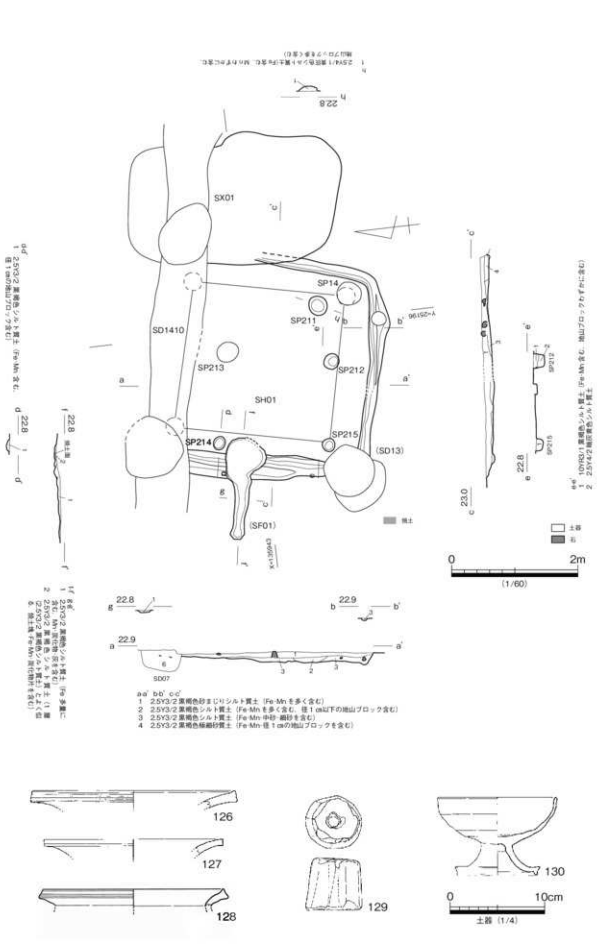


図33　7-10区 SH01

期は不明であるが、SR01 中層上面で検出されたことから、弥生時代の溝と考えられる。

3．古代

竪穴建物

7-10 区 SH01（図 33）

7-10 区南部で検出された竪穴建物である。建物の北部は古代の溝 SD1410、東部は 7 世紀の土坑 SX01 と重複し、削平される。建物の平面形は方形で、東西長は 3.5 m、南北長は 3.5 m前後、深さは 0.2 mである。壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.05 mの壁溝が巡り、西壁中央付近には竈がある。竈は残存状態が悪く、焚き口と考えられる浅い落ち込みと煙道と考えられる浅い溝が検出されただけで、竈の袖は残存していなかった。煙道の長さは住居の壁から測ると 1.0 mである。焚き口の底面には焼土が貼り付いていた。主柱穴は SP215 をはじめ 4 個で構成されると推定されるが、北部は古代の溝 SD1410 によって削平される。また、東南に当たる柱穴の場所には中世の柱穴 SP14 があり、主柱穴は SP14 と重複している可能性が高い。遺物は土器・須恵器片などが整理箱 1 箱程度出土した。126 ～ 130 は SH01 から出土した遺物である。126 ～ 128 は弥生土器の口縁部、129 は弥生時代から古墳時代の支脚である。130 は須恵器高杯で陶邑編年 TK217 型式に属し、7 世紀中葉のものである。弥生土器片も含まれるが、130 の時期から SH01 は 7 世紀中葉のものと考えられる。

7-11 区 SX03（図 34）

7-11 区南西端の第 2 面（SR01 上層下位上面）、7-8 区北東端・7-7 区北西端で検出された竪穴建物である。

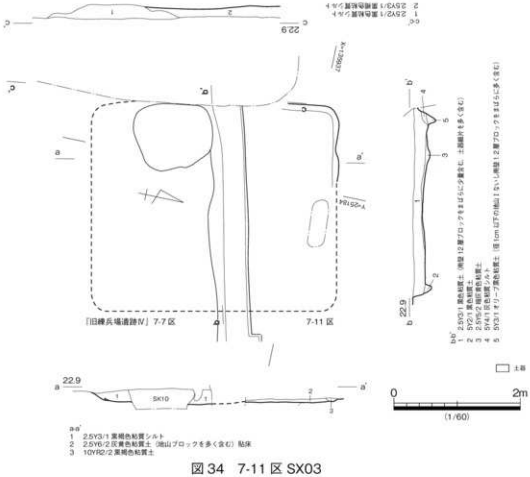


図 34　7-11 区 SX03

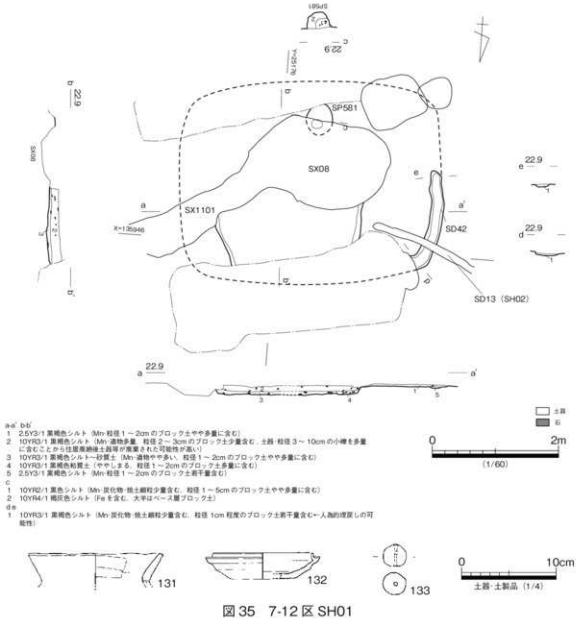


図35　7-12区 SH01

SX03は3調査区の境界にあり、遺構全体を同時に調査しておらず、整理時に図面上で復元した竪穴建物である。7-11区では建物の北部が検出された。7-8区では攪乱のため大きく削平されており、西端は不明であるが、7-7区と7-8区の調査区境に設定した土層断面用の畦（7-8区東壁）で建物の断面が確認できた。また、発掘調査時に7-7区では建物の東部を検出できなかったが、整理時に土層断面（7-7区西壁）図や写真を観察し、建物の断面を確認した。7-11区で確認されている建物の北西隅の形状から、平面形は隅丸方形と考えられる。遺構の東部は平面的な検出はできなかったが、7-11区の南壁の観察から東西長は3.0 m、7-7区西壁の観察から南北長は3.7 mで、平面形は長方形と考えられる。また、床面は平坦で、床面までの深さは0.2 mである。主柱穴は未検出である。遺物は土器片が少量出土した。7-11区ではSR01上層下位上面で検出されていることから、SX03は7世紀ごろのものと考えられる。

7-12区SH01（図35）

7-12区東部で検出された竪穴建物である。周辺は現代の建物基礎の攪乱により削平され、中央部には古代の溝SX1101、古代の土坑SX08と重複し、削平されるため建物の全体は不明瞭である。建物の壁

は未検出であるが、壁溝 SD42 の形状から SH01 の平面形は方形と考えられる。SD42 の内側には幅 1.0 mのベッド状遺構があり、その内側の床面は 0.1 m下がる。壁溝 SD42 は幅 0.2 m、深さ 0.5 mである。床面からは柱穴 SP581 が検出された。SP581 の平面形は円形で、径 0.4 ～ 0.5 m、深さ 0.25 mである。遺物は土器・須恵器片が整理箱 1 箱程度出土した。いずれも小破片である。131 ～ 133 は SH01 から出土した遺物である。131 は土師器甕、132 は須恵器杯、133 は土製の玉である。132 は陶邑編年 TK217 型式に属する。これらの遺物から SH01 は 7 世紀中葉のものと考えられる。

掘立柱建物

SB03（図 36）

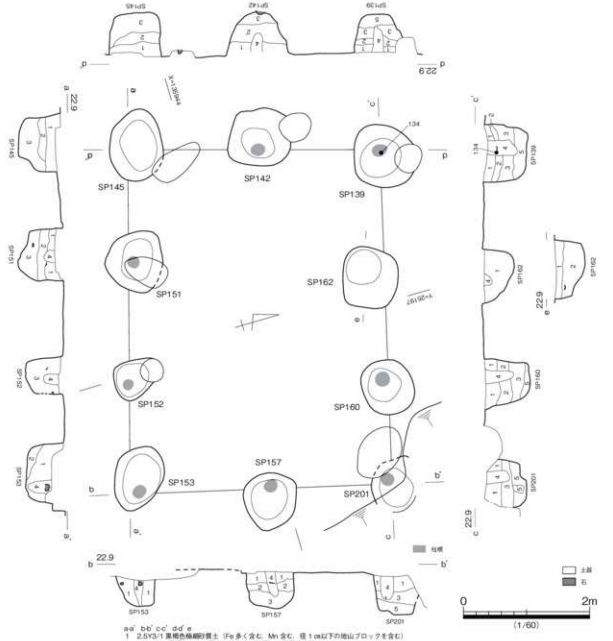
7-10 区第 3 面（SR01 中層上面）で検出された掘立柱建物である。桁行 3 間（5.3 m）、梁間 2 間（3.8 m）、桁行の方向は E 16° S で、周辺の条里地割の方向とは異なる。南側の桁行の柱穴 SP145・SP151・SP152・SP153 は 8 世紀に埋没する溝 SD1410 埋土上面で検出された。建物の柱穴は円形またはややいびつな方形である。南側の中ほどの柱穴 SP152 は径 0.5 ～ 0.7 m、深さ 0.6 mとやや小さいが、他の柱穴は径 0.8 ～ 1.0 m、深さ 0.6 ～ 0.7 mである。柱穴の埋土は黒褐色シルトを中心とする土層である。各柱穴からの出土遺物は整理箱 5 箱と多いが、大半が弥生土器の細片である。SP139 の柱痕から出土した 134 は須恵器高杯脚部、SP145 から出土した 135・136 は須恵器甕口縁部、SP152 から出土した 140 は須恵器壺の体部である。これらの須恵器は 7 世紀に属する。SP151 から出土した 137 は須恵器の口縁部、138 は土師器甕の口縁部で、10 世紀から 11 世紀に属する。また、SP201 からは鉄釘（141）が出土した。SP151・SP201 は中世の柱穴と重複しており、遺物が混入した可能性がある。SB03 は付近の条里地割の方向とは異なり、SB06・SB07 とほぼ同じ方向である。これらの建物は 8 世紀のものであることから、SB03 も同時期のものと考えられる。

SB04（図 37・38）

7-12 区南部で検出された掘立柱建物である。SB22 と重複する。建物の方向や出土遺物から SB04 のほうが古いと考えられる。SB04 は桁行 3 間（6.3 m）、梁間 2 間（4.4 m）で、桁行の方向は N 21° W である。柱穴の平面形は隅丸方形またはいびつな円形である。建物の北東隅にある SP304 は 1 個の柱穴として調査しているが、底面の形状から 2 個の柱穴が重複していると考えられる。柱穴の新旧関係は不明であるが、SB04 の柱穴は東側と考えられる。また、SP304 の南側に位置する SP127 も 2 個の柱穴が重複している可能性が高い。柱穴の直径または 1 辺の長さは 0.5 ～ 0.9 m、深さ 0.2 ～ 0.7 mである。柱穴の埋土は黄灰色シルト・黒褐色シルトを中心とする。各柱穴からの出土遺物は合計整理箱 1 箱程度である。SP60 の掘り方から出土した 142 は土師器杯で 10 世紀中葉から後半に属する。SP62 から出土した 144 は弥生土器の体部片で、外面にヘラ描きの文様がみられる。SP157 から出土した 147 は須恵器杯口縁部、SP472 から出土した 150 は須恵器皿で、いずれも 9 世紀前半に属する。これらの出土遺物から SB04 は 10 世紀後半のものと考えられる。

SB06（図 39）

7-11 区南西部から 7-12 区南東部第 2 面（SR01 中層上面）にかけて検出された掘立柱建物である。7 世紀の溝 SD0817 と重複するが、SB06 のほうが新しい。また、10 世紀の掘立柱建物 SB08 と重複するが、SB06 のほうが古い。SB06 は桁行 3 間（4.7 m）、梁間 2 間（3.4 ～ 3.7 m）の総柱の建物である。桁行の方向は N20° E である。柱穴の平面形は円形で、径 0.6 ～ 0.7 m、深さ 0.2 ～ 0.6 mである。柱穴の埋土は黒褐色シルトを中心とし、一部の柱の抜き取り痕に灰色シルトが堆積する。各柱穴からの出土遺物は


SP145
SP142
SP139
SP151
SP162
SP152
SP160
SP153
SP157
SP201
22.9
a a' b b' c c' d d' e
1 2.5Y3/1黒褐色細砂質土（Fe多く含む、Mn含む、径1cm以下の地山ブロックを含む）
2 10YR3/1黒褐色シルト質土と地山土（砂質）の互層状堆積
2' 10YR3/1黒褐色シルト質土（径1cm程度の地山ブロックをわずかに含む）
3 10YR3/1黒褐色シルト質土（地山土の3cm程の ブロックをわずかに含む）
4 2.5Y3/2黒褐色シルト質土
5 10YR3/1黒褐色砂質シルト質土（地山土（砂質）を多く含む）
5' 10YR3/1黒褐色シルト質土（径1cm程度の地山ブロックをわずかに含む）
柱痕
土器
石
0 2m
(1/60)

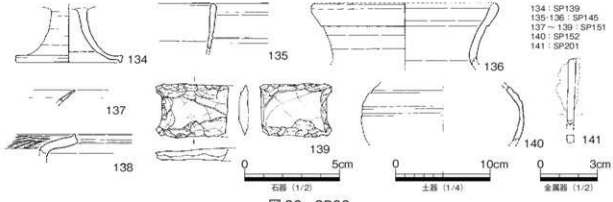

134 : SP139
135·136 : SP145
137 ～ 139 : SP151
140 : SP152
141 : SP201
134
135
136
137
138
139
140
141
0 5cm
石器 (1/2)
0 10cm
土器 (1/4)
0 3cm
金属器 (1/2)

図36 SB03

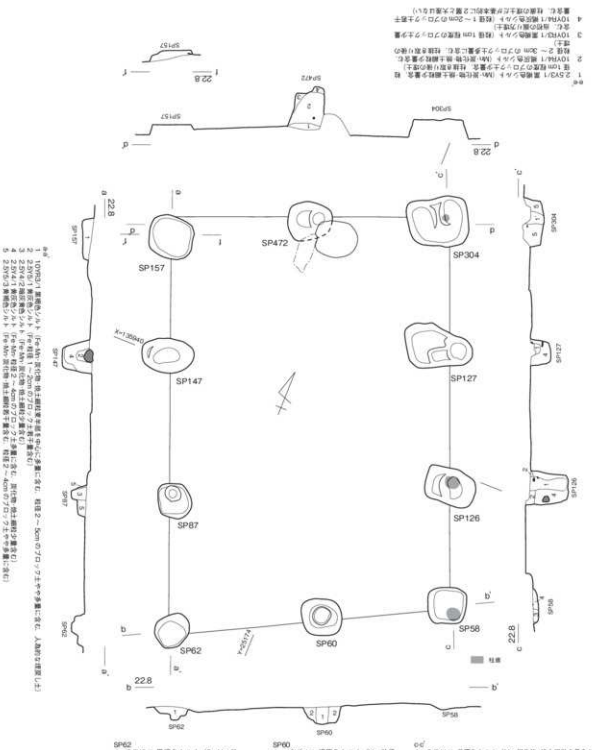

SP157
SP472
SP304
SP147
SP127
SP87
SP126
SP62
SP60
SP58
22.8
土器
石
0
2m
(1/60)

図37　SB04（1）

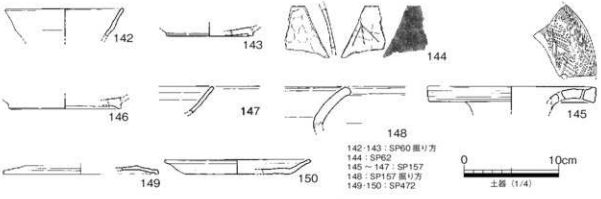


図 38　SB04（2）

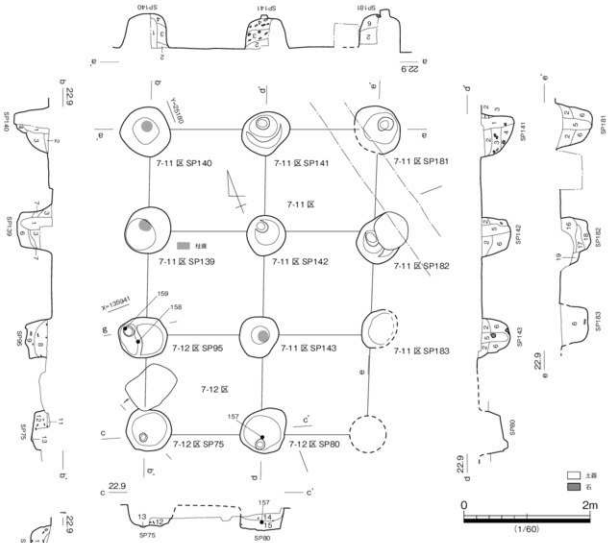
整理箱 5 箱と多いが、大半が弥生土器の細片である。7-12 区 SP75 から出土した 151 は須恵器甕の口縁部、7-11 区 SP182 から出土した 152、7-11 区 SP182 から出土した 153 と 7-10 区 SP142 から出土した 156 は土師器甕、7-11 区 SP183 から出土した 154 は土師器高杯である。7-12 区 SP80 から出土した 157 は管玉で、材質は超塩基性岩である。7-11 区から出土した 155 は須恵器壺体部片で、8 世紀に属することから、同方位の SB03・SB07 と同様 SB06 は 8 世紀のものと考えられる。

SB07（図 40・41）

7-12 区南部第 2 面（SR01 上層下位上面）で検出された掘立柱建物である。中世の溝 SD1102・SD1103、掘立柱建物 SB01 と重複する。これらの遺構よりも SB07 のほうが古い。SB07 は桁行 3 間（4.7 m）、梁間 2 間（3.1 ～ 3.3 m）の総柱の建物で、桁行の方向は N24° E である。柱穴の平面形は円形またはややいびつな円形である。桁行・梁間の柱穴は径 0.7 ～ 0.8 m、深さ 0.2 ～ 0.5 m であるが、束柱の柱穴は径 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.1 ～ 0.15 m とやや小さい。柱穴の埋土は黒褐色シルトを中心とし、一部の柱痕に灰色シルトが堆積する。各柱穴からの出土遺物は整理箱 4 箱程度であるが、大半が弥生土器細片である。SP146 から出土した 160 は土師器高杯の脚部、SP150 から出土した 161 は土師器甕、SP151 から出土した 163 と SP188 から出土した 165 は須恵器杯、SP188 から出土した 164 は弥生土器甕底部、SP191 から出土した 166 は土師器鉢、167 は須恵器杯、168 は須恵器甕口縁部である。SP150 から出土した 162 は土製品であるが、種類は不明である。165 は 8 世紀に属することから、同方位の SB06・SB03 と同様 SB07 は 8 世紀のものと考えられる。

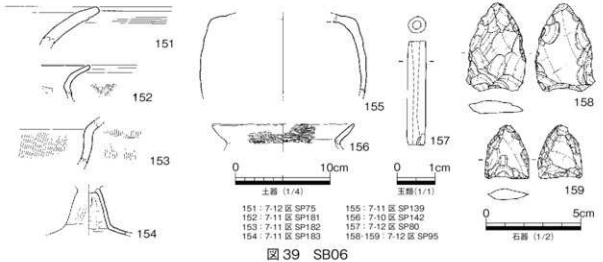
SB08（図 42）

7-11 区東部から 7-12 区西部第 2 面（SR01 上層下位上面）にかけて検出された掘立柱建物である。8 世紀の掘立柱建物 SB06、8 世紀の溝 SD0817 と重複する。これらの遺構よりも SB08 のほうが新しい。また、中世の溝 SD1102 と重複するが SB08 のほうが古い。SB08 は桁行 4 間（7.2 ～ 7.9 m）、梁間 3 間（4.6 ～ 4.8 m）で、桁行の方向は E32° N である。柱穴の平面形はややいびつな円形またはややいびつな隅丸方形で、径または長軸は 0.6 ～ 1.0 m、深さ 0.1 ～ 0.5 m である。柱穴の掘方の埋土は黒色粘質シルトを中心とし、柱痕は黄灰色または灰色シルトである。また、7-11 区 SP177・7-12 区 SP125・7-12 区 SP74・7-11 区 SP161・7-11 区 SP160・7-11 区 SP157 からは厚さ 5 ～ 10cm の平石が検出された。各柱穴からの出土遺物は整理箱 6 箱と多いが、大部分が弥生土器細片であった。7-11 区 SP156 から出土した 173 は須恵器杯で 9 世紀前半、7-11 区 SP159 から出土した 174 も須恵器杯で、10 世紀前半に属する。7-11 区 SP178 から出土した 177 も須恵器杯である。176 は土師器皿で 8 世紀から 9 世紀に属する。これ



a-a' b-b' c-c' d-d' e-e' f-g

1 2.5Y3/2 黒褐色粘質土（径 1 cm 以下の 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルトブロックを少量含む） 柱痕
2 5Y4/1 灰色粘質土（地山土ないし南隣 12 層ブロックを多く含む）
3 7.5Y2/1 黒色粘質土（5Y5/2 灰オリーブ色粘質土ブロックを多く含む）
4 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土（5Y5/2 灰オリーブ色粘質土ブロックを多く含む）
5 7.5Y4/1 灰色粘質シルト（径 1cm 以下の地山と南隣 12 層ブロックをまばらに少量含む） 柱痕
6 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（地山と南隣 12 層ブロックを多量に含む）
7 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土（2.5Y5/1 黄灰色粘質土ブロックを多く含む）
8 10YR3/2 黒褐色シルト（Mn 炭化物・焼土細粒少量含む）
9 2.5Y3/1 黒褐色シルト（炭化物・焼土細粒少量含む。層底面を中心に 3 cm 程度のブロックと若干量含む）
10 10YR2/1 黒色粘土（Fe 粒径 1cm 以下のブロックを極少量含む）
11 2.5Y3/2 黒褐色シルト（Mn 粒径 1 ～ 2cm のブロックと多量に含む）人為的埋め戻しか
12 2.5Y3/1 黒褐色シルト（Mn 炭化物・焼土細粒少量含む。粒径 1cm 程度のブロックと 8 底面付近に少量含む）
13 10YR3/1 黒褐色シルト（Mn 粒径 1cm 程度のブロック土少量含む）
14 10YR3/1 黒褐色シルト（Mn 炭化物・焼土細粒を少量含む）
15 10YR2/1 黒色シルト（Mn 炭化物・焼土細粒を少量含む）
16 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（径 2cm 以下の地山ブロックを多く含む）
17 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
18 2.5Y2/1 黒色粘質土
19 5Y2/1 黒色粘質土



151 : 7-12 区 SP75
152 : 7-11 区 SP181
153 : 7-11 区 SP182
154 : 7-11 区 SP183
155 : 7-11 区 SP139
156 : 7-10 区 SP142
157 : 7-12 区 SP80
158･159 : 7-12 区 SP95

図 39　SB06

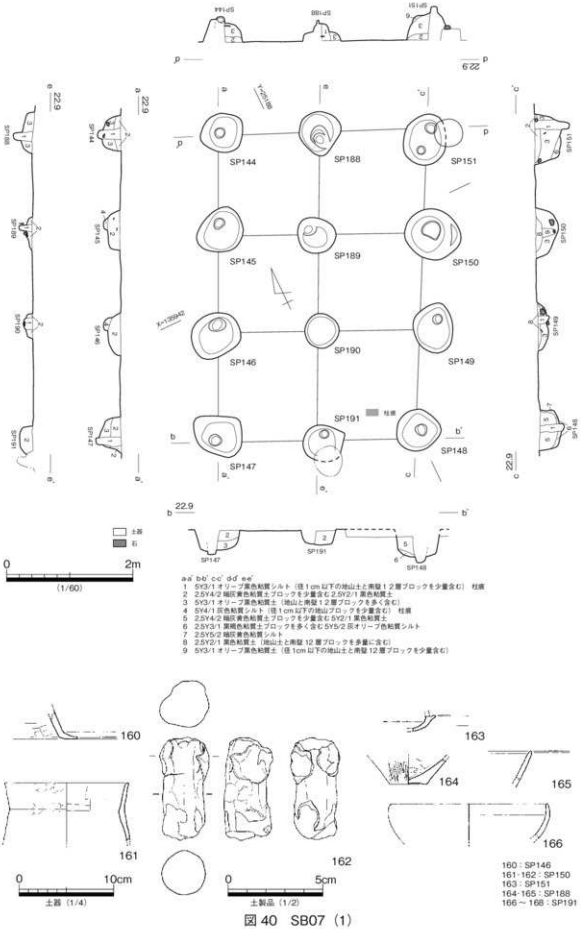

SP144
SP188
SP151
SP145
SP189
SP150
SP146
SP190
SP149
SP191
柱痕
SP147
SP148
22.9
土器
石
0
2m
(1/60)
a a' b b' c c' d d' e e'
1 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト（径1cm以下の地山土と南壁12層ブロックを少量含む） 柱痕
2 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む 2.5Y2/1 黒色粘質土
3 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（地山土と南壁12層ブロックを多く含む）
4 5Y4/1 灰色粘質シルト（径1cm以下の地山ブロックを少量含む） 柱痕
5 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む 5Y2/1 黒色粘質土
6 2.5Y3/1 黒褐色粘質土ブロックを多く含む 5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト
7 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
8 2.5Y2/1 黒色粘質土（地山土と南壁12層ブロックを多量に含む）
9 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（径1cm以下の地山土と南壁12層ブロックを少量含む）
160
161
162
163
164
165
166
0
10cm
土器 (1/4)
0
5cm
土製品 (1/2)
160：SP146
161・162：SP150
163：SP151
164・165：SP188
166～168：SP191

図40 SB07（1）

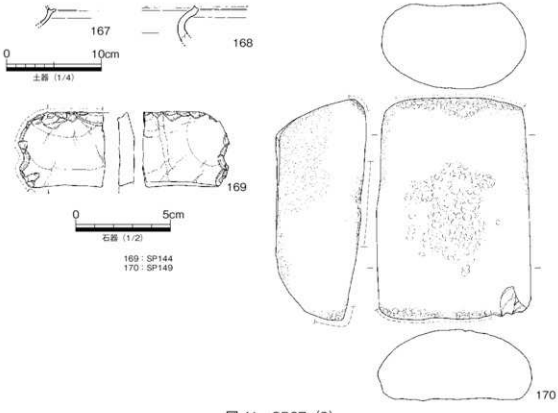


図41　SB07（2）

らの遺物から SB08 は 10 世紀前半のものと考えられる。

SB15（図 44）

7-10 区南部から 7-7 区北部にかけて検出された掘立柱建物である。9 世紀の掘立柱建物 SB19、中世の掘立柱建物 SB12 と重複する。SB15 は桁行 3 間（6.5 m）、梁間 2 間（4.3 m）で、桁行の方向は N35°W である。柱穴の平面形は円形またはややいびつな方形で、径または 1 辺 0.5 ～ 0.8 m、深さ 0.4 ～ 0.7 m である。各柱穴からの遺物は整理箱 1 箱程度である。弥生土器細片が多い。7-11 区 SP153 から出土した 178・179 は須恵器杯で、いずれも焼成不良である。178 は 8 世紀後半に属する。7-11 区 SP153 から出土した 180・181、7-11 区 SP170 から出土した 182 は土師器杯である。これらは赤彩が施され、7-11 区 SK01 から出土した土師器と類似しており、8 世紀末から 9 世紀初頭のものと考えられる。これらの遺物から SB15 は 9 世紀のものと考えられる。

SB19（図 45）

7-10 区から 7-11 区にかけて検出された掘立柱建物である。9 世紀の掘立柱建物 SB15、中世の掘立柱建物 SB12 と重複する。SB19 は桁行 2 間（3.6 ～ 3.9 m）、梁間 1 間（2.7 m）で、桁行の方向は N62°W である。柱穴の平面形は円形で、径 0.3 ～ 0.7 m、深さ 0.2 ～ 0.4 m である。各柱穴からは整理箱 1 箱程度の遺物が出土したが、弥生土器細片が多い。7-10 区 SP35 から出土した 183 は須恵器蓋である。184 は須恵器皿で 9 世紀前半に属する。185 は須恵器甕口縁部である。7-10 区 SP194 から出土した 186 は土師器鉢で、7 世紀から 8 世紀初頭に属する。これらの遺物から SB19 は 9 世紀のものと考えられる。

SB21（図 46・47）

7-11 区北端で検出された掘立柱建物である。建物の北側は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区で

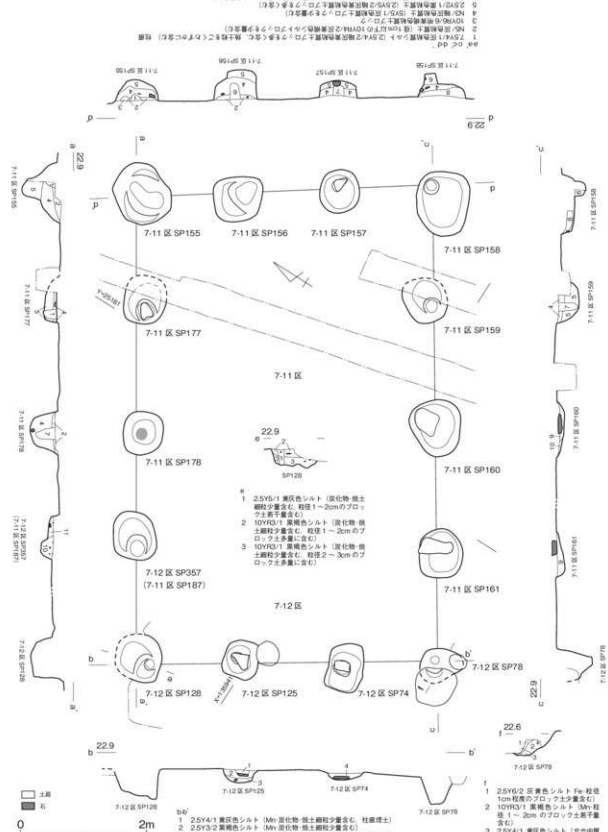

7-11 区
7-12 区
7-11 区 SP155
7-11 区 SP156
7-11 区 SP157
7-11 区 SP158
7-11 区 SP159
7-11 区 SP160
7-11 区 SP161
7-11 区 SP162
7-11 区 SP163
7-11 区 SP164
7-11 区 SP165
7-11 区 SP166
7-11 区 SP167
7-11 区 SP168
7-11 区 SP169
7-11 区 SP170
7-11 区 SP171
7-11 区 SP172
7-11 区 SP173
7-11 区 SP174
7-11 区 SP175
7-11 区 SP176
7-11 区 SP177
7-11 区 SP178
7-11 区 SP179
7-11 区 SP180
7-11 区 SP181
7-11 区 SP182
7-11 区 SP183
7-11 区 SP184
7-11 区 SP185
7-11 区 SP186
7-11 区 SP187
7-11 区 SP188
7-12 区 SP74
7-12 区 SP78
7-12 区 SP125
7-12 区 SP128
7-12 区 SP357
(7-11 区 SP187)
SP128
22.9
22.6
a-a'
1 2.5Y5/1 黄灰色シルト（炭化物・焼土細粒少量含む，粒径1～2cmのブロック土多量含む）
2 10YR3/1 黒褐色シルト（炭化物・焼土細粒少量含む，粒径1～2cmのブロック土多量に含む）
3 10YR3/1 黒褐色シルト（炭化物・焼土細粒少量含む，粒径2～3cmのブロック土多量に含む）
b-b'
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量含む，柱痕埋土）
2 2.5Y3/2 黒褐色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量含む）
3 2.5Y3/1 黒褐色シルト（Mn・粒径1cm程度のブロック土少量含む）
4 2.5Y4/1 黄灰色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量含む，粒径2～3cmのブロック土多量に含む）
c-c'
1 2.5Y6/2 灰黄色シルト Fe・粒径1cm程度のブロック土少量含む）
2 10YR3/1 黒褐色シルト（Mn・粒径1～2cmのブロック土若干量含む）
3 2.5Y4/1 黄灰色シルト（やや中粗質ぶる，粒径1cm程度のブロック土少量含む）
d-d'
1 10YR4/1 褐灰色シルト（2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロック多量含む）
2 10YR3/1 黒褐色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒を多量含む，粒径1～3cmのブロック多量含む）
3 10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック
4 N5/灰色粘質土（2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロック多量含む）
5 2.5Y2/1 黒褐色粘質土（2.5Y5/3 明黄褐色粘質土ブロック多量含む）
6 2.5Y4/1 黄灰色粘質土（粒1cm以下の2.5Y5/3 明黄褐色粘質土ブロック多量含む）
7 2.5Y2/2 オリーブ黒粘質シルト（粒1cm以下の2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロック多量含む）
8 N4/灰色粘質土（2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロック多量含む）
9 2.5Y3/2 黒褐色粘質土（粒2cm以下の明山土ブロック多量含む）
10 10YR3/1 黒褐色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒を多量含む，粒径1～3cmのブロック多量含む）
11 10YR4/1 褐灰色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒を多量含む，粒径1～3cmのブロック多量に含む）
土器
石
0
2m
(1/60)

図 42　SB08（1）

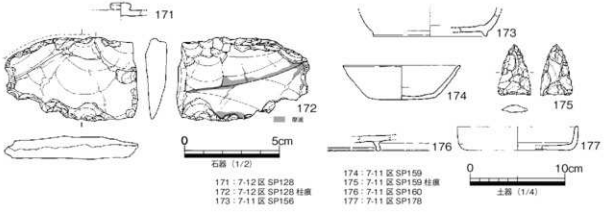


図43　SB08（2）

ある。建物の南東部は現代の建物基礎の攪乱で削平され、不明であるが、桁行3間（5.5～6.1 m）、梁間2間（3.2～3.5 m）である。桁行の方向はN30° Wである。柱穴の平面形は隅丸方形または円形である。東側の桁行のSP112だけは1辺1.0 m、深さ0.4 mと大きいが、その他の柱穴は1辺または直径0.6～0.7 m、深さ0.2～0.3 mである。各柱穴からは整理箱1箱程度の遺物が出土した。SP82からは187～192が出土した。187は須恵器杯の口縁部片で、口縁部端が黒い。十瓶山付近で生産された須恵器で、中世に属する。188・189は須恵器杯底部である。189は焼成不良で、9世紀前半に属する。190～192は須恵器杯底部で、190・192は8世紀後半から9世紀前半に属する。SP84から出土した193は土師器杯で、赤彩がみられる。おそらく7-11区SK01と同じようなこの付近の窯で焼成されたものであろう。8世紀末から9世紀初頭のものである。SP85から出土した194～199は土師器杯である。194・195のような形態の杯は京都で多量に出土する。京都では194は10世紀後半、195は9世紀後半に比定される。196は10世紀に属する。197は底部外面にへら切り痕の上に板状の工具痕が残る。200は土師器椀、201は土師器甕、202～204は須恵器杯である。202・204は9世紀後半から10世紀中葉に属する。SP89からは205～208が出土した。205～207は須恵器杯、208は蓋のつまみである。207は須恵器杯で、9世紀後半から10世紀中葉に属する。SP125から出土した210は黒色土器椀で、10世紀に属する。187のような中世の須恵器片も含まれるが、小片であることから混入の可能性が高い。これらの遺物からSB21は10世紀のものと考えられる。

SB22（図48・49）

7-12区南部から7-8区にかけて検出された掘立柱建物である。桁行5間（7.8 m）、梁間2間（4.2 m）で、桁行の方向はN28° Wである。柱穴の平面形は隅丸方形またはいびつな円形である。柱穴の直径または1辺の長さは0.5～0.7 m、深さ0.2～0.3 mである。柱穴の埋土は灰黄色シルトから黒褐色シルトである。各柱穴からは整理箱1箱程度の遺物が出土した。SP52から出土した212は須恵器蓋である。SP89からは213～216が出土した。213は土師器皿で10世紀前半に属する。214は土師器椀で10世紀後半、216は須恵器蓋である。SP97から217・218、SP98から219・220、SP121の掘り方から221、SP153の掘り方から224・225、SP267から227～229が出土した。215・217・218・220・221・225・227は須恵器杯である。215は10世紀前半、221は9世紀に属する。219は土師器甕で9世紀、222～224は土師器杯で、222・223は10世紀後半、224は10世紀前半に属する。228は緑釉陶器碗で10世紀前半、229は須恵器甕の口頸部で、古墳時代後期のものである。これらの遺物からSB22は10世紀後半のものと考えられる。

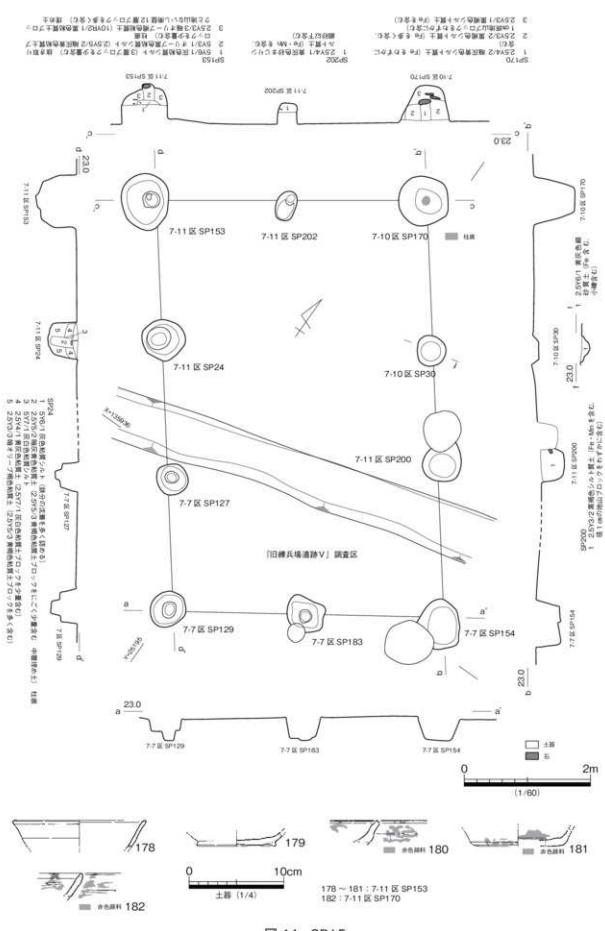

7-11 区 SP153
7-11 区 SP202
7-10 区 SP170
7-11 区 SP24
7-10 区 SP30
7-11 区 SP200
7-7 区 SP127
「旧練兵場遺跡V」調査区
7-7 区 SP129
7-7 区 SP183
7-7 区 SP154
23.0
0
2m
(1/60)
178
179
180
181
182
赤色顔料
10cm
土器 (1/4)
178～181：7-11 区 SP153
182：7-11 区 SP170

図44　SB15

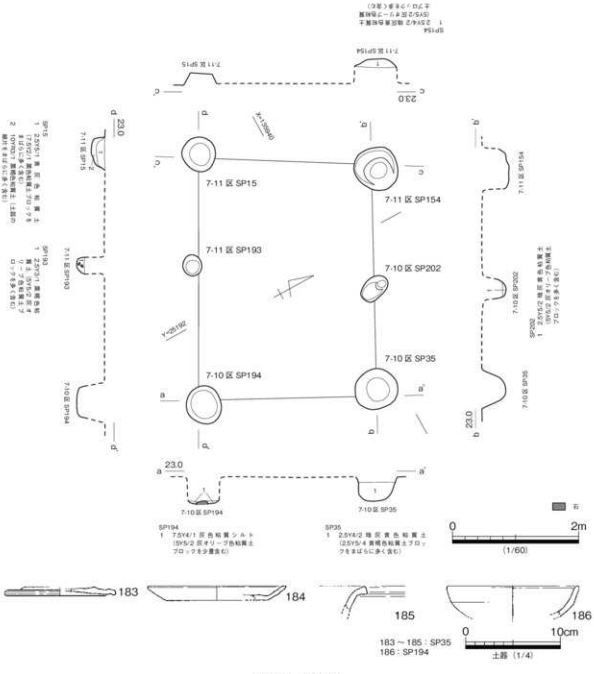

7-11 区 SP15
7-11 区 SP154
7-11 区 SP193
7-10 区 SP202
7-10 区 SP35
7-10 区 SP194
23.0
SP194
1 7.5Y4/1 灰色粘質シルト
(5Y5/2 灰オリーブ色粘質土
ブロックを少量含む)
SP35
1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
(2.5Y5/4 黄橙色粘質土ブロッ
クをまばらに多く含む)
0
2m
(1/60)
183
184
185
186
183～185：SP35
186：SP194
0
10cm
土器 (1/4)

図45 SB19

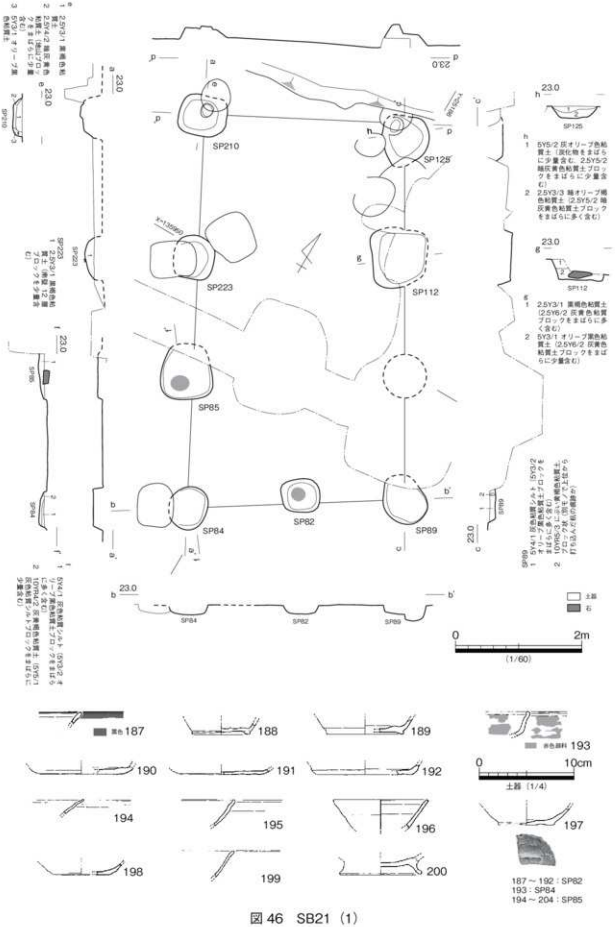

SP210
SP125
SP223
SP112
SP85
SP84
SP82
SP89
23.0
土器
石
0
2m
(1/60)
黒色 187
188
189
190
191
192
194
195
196
198
199
200
赤色顔料 193
0
10cm
土器 (1/4)
197
187～192：SP82
193：SP84
194～204：SP85

図46 SB21 (1)

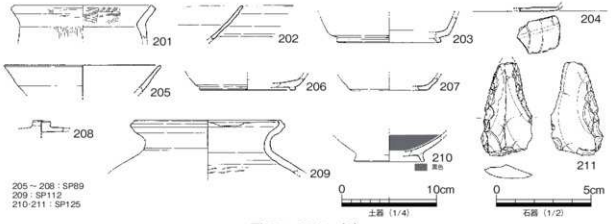


図47　SB21（2）

SB23（図50）

7-12区北部で検出された掘立柱建物である。古代の溝SD1410・SD1211と重複する。SB23のほうが新しい。SB23は桁行3間（4.5 m）、梁間2間（3.5 m）で、桁行の方向はN25° Wである。柱穴の平面形はややいびつな方形で、長軸0.5～1.2 m、深さ0.3～0.6 mである。柱穴の埋土は黒褐色シルトを中心とする。各柱穴からは整理箱1箱程度の遺物が出土した。SK09から230～232、SK11から233～235、SK12から236、SP347から237、SP358から238が出土した。230・231は土師器杯である。230は底部がやや突出し、底部が薄く、10世紀前半に属する。232は須恵器杯である。233は土師器皿である。233は赤彩がある。赤彩された土器が多量に出土した7-11区SK01から出土した土器にも同形態の皿があることから、8世紀末から9世紀初頭に属すると考えられる。234・235は滑石製の臼玉である。237は土師器羽釜で、9世紀に属する。238は石製の有孔円盤である。表面は研磨されるが、端部付近は研磨が不十分で、端面には線状痕がみられる。表面には2個の孔があり、貫通する。石材は蛇紋岩または滑石であろう。これらの遺物からSB23は10世紀のものと考えられる。

SB24（図51）

7-10区北部で検出された掘立柱建物である。古代の溝SD1012と重複するが、SB24のほうが新しい。SB24は桁行3間（5.5 m）、梁間1間（2.4 m）で、桁行の方向はN25° Wである。北西隅に当たる柱穴付近には現代の建物基礎による攪乱があり、削平されているため柱穴は不明である。柱穴の平面形は隅丸方形または円形である。東側の桁行の柱穴SP100・SP132・SP65は平面形円形で、径0.4～0.5 m、深さ0.2～0.3 mと小さいが、その他の柱穴の長軸または径は0.7～0.9 m、深さ0.3～0.5 mである。SP48の柱痕埋土は黄灰色シルトであるが、その他の柱穴の埋土は黒褐色シルトを中心とするものである。各柱穴からは土器・須恵器が少量出土した。SP43から489～492、SP46から493、SP65から494・495、SP77から496～498が出土した。489・492・493・495・496は須恵器椀、490は須恵器杯、491は須恵器皿、494は土師器杯、497・498は緑釉陶器碗である。494は赤彩が施されており、7-11区SK01で焼成された土師器の形態と類似することから、8世紀末から9世紀初頭に属すると考えられる。490・496・497・498は10世紀、493は9世紀に属する。これらの遺物からSB24は10世紀のものと考えられる。

SB25（図52）

7-11区北部で検出された掘立柱建物である。梁間2間（3.8 m）、桁行1間以上（2.5 m以上）である。

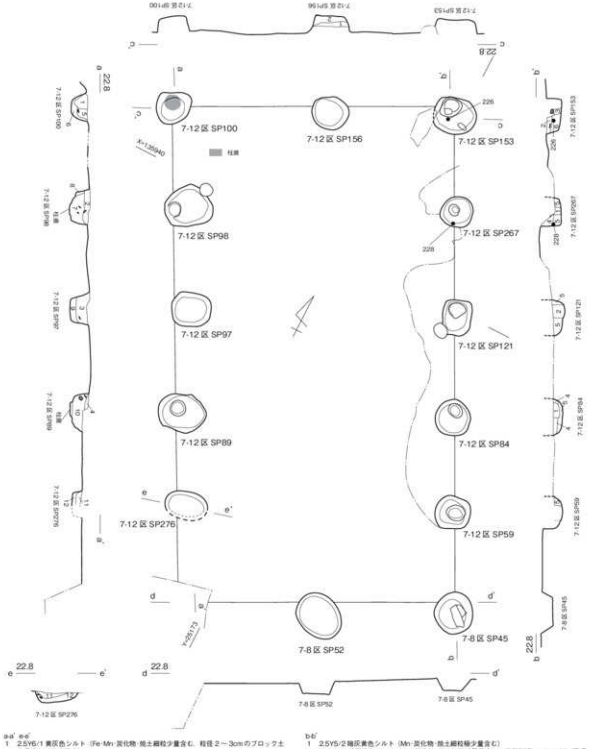

7-12区 SP100
7-12区 SP156
7-12区 SP153
7-12区 SP98
7-12区 SP267
7-12区 SP97
7-12区 SP121
7-12区 SP89
7-12区 SP84
7-12区 SP276
7-12区 SP59
7-8区 SP52
7-8区 SP45
22.8
226
228
a-a'
1 2.5Y6/1 黒灰色シルト（Fe・Mn・炭化物・焼土細粒少量含む、粒径2～3cmのブロック土少量含む、柱痕埋土）
2 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（Fe・Mn を含む）
3 2.5Y4/1 黄灰色シルト（Fe・Mn を含む、粒径 1 ～ 3cm のブロック土少量含む、炭化物粒少量含む）
4 10YR5/2 灰黄褐色シルト（Fe・Mn を含む、炭化物粒・焼土細粒少量含む、粒径 2cm 程度のブロック土少量）
5 10YR4/1 褐灰色シルト（Fe・Mn・炭化物粒少量含む、粒径2～3cmのブロック土少量含む）
6 2.5Y4/1 黄灰色シルト（Fe・Mn・炭化物・焼土細粒若干量含む、粒径2～3cmのベースブロック若干量含む）
7 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト（Fe・Mn を含む、粒径2～3cmのベースブロックク少量含む、炭化物粒若干量含む）
8 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト（Fe・Mn を含む、粒径 2 ～ 3cm のブロック土多量に含む）
9 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト（Fe を含む、粒径 1 ～ 2cm のブロック土多量に含む、ベース量に近似）
10 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（Fe・Mn を含む、炭化物粒・焼土細粒若干量含む、粒径 3cm 程度のブロック土若干量含む）
11 10YR4/1 褐灰色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量、粒径 1cm 前後のブロック土少量）
12 2.5Y5/1 黄灰色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量、粒径 1 ～ 2cm ブロック土少量）
b-b'
1 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒極少量含む）
2 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒若干量含む、底面付近に 10YR3/1 黒褐色シルトブロック状に含む）
3 2.5Y4/1 黄灰色シルト（炭化物・焼土細粒少量含む）
4 2.5Y4/1 黄灰色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量含む、粒径 1 ～ 3cm のブロック土若干量含む）
5 10YR3/1 黒褐色シルト（粒径 1 ～ 2cm のブロック土中中多量に含む）
6 10YR3/1 黒褐色シルト（炭化物・焼土細粒極少量含む、粒径 1 ～ 3cm のブロック土多量に含む）
c-c'
1 10YR3/1 黒褐色シルト（Fe・粒径 1 ～ 5cm のブロック土若干量含む、炭化物・焼土細粒少量含む）
2 2.5Y4/1 黄灰色シルト（Fe・炭化物・焼土細粒少量含む、粒径 1 ～ 5cm のブロック土多量に含む）
土器
石
0
2m
(1/60)

図 48　SB22（1）

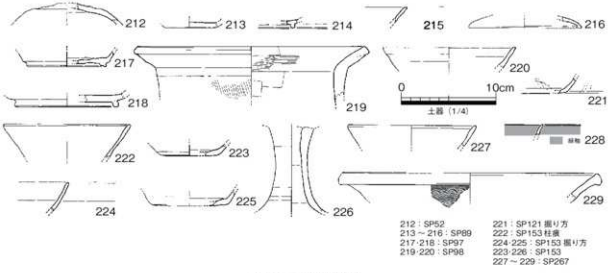


図49　SB22（2）

建物は北部に延びる可能性があるが、柱穴は未検出である。桁行の方向はN32°Wである。柱穴の平面形はややいびつな円形またはややいびつな隅丸方形で、長軸0.6～1.2 m、深さ0.1～0.5 mである。SK02から239～242、SP83から243～245、SP83柱痕から246が出土した。239は土師器椀、240は土師器杯で、9世紀末から10世紀初頭に属する。241・242は須恵器口縁部片である。243・245は須恵器杯、244は土師器杯、245は須恵器杯、246は須恵器皿である。243は9世紀前半、246は9世紀後半に属する。これらの遺物からSB25は10世紀のものと考えられる。

SB44（図53）

7-11区北部から『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告されたF区にかけて検出された掘立柱建物で、整理時に図上復元したものである。『旧練兵場遺跡Ⅱ』ではSB44と報告されており、本書でも同名で報告する。梁間の1間が2.7 mとやや長いが、桁行の柱穴列がそろっていることから、建物を復元した。桁行3間（5.5 m）、梁間2間（4.5 m）で、桁行の方向はN52°Eである。柱穴の平面形はいびつな円形またはいびつな隅丸方形で、長軸0.5～0.9 m、深さ0.4～0.9 mである。各柱穴からは整理箱1箱の遺物が出土した。SP99から247～251が出土した。247は土師器甕の底部、248は黒色土器椀で、10世紀後半に属する。249·250は須恵器杯である。いずれも体部が直線的で、焼成不良である。10世紀前半に属する。251は中国越州窯産の青磁水注の底部片である。体部外面には青磁釉が施される。底部付近は無釉である。体部には1条の凹みがみられる。底部はやや上げ底であることから、9世紀前半のものと考えられる。これらの遺物からSB44は10世紀のものと考えられる。

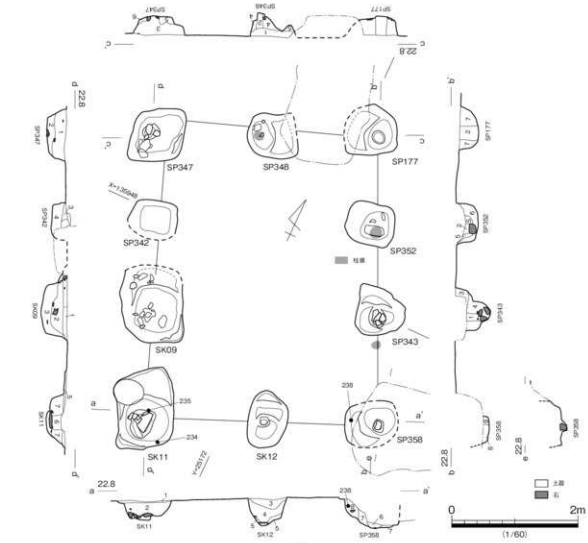
柱穴・小穴・土坑

SK02（図54）

7-10区の北部第1面（Ⅲ層上面）で検出された柱穴である。掘立柱建物を構成する柱穴と考えられるが、建物は復元できなかった。平面形はややいびつな円形で、径1.0 m、深さ0.5 mである。底面には礫が置かれていた。252は埋土1層から出土した須恵器杯で10世紀、253・254は須恵器蓋のつまみで6世紀から7世紀に属する。これらの遺物からSK02は10世紀のものと考えられる。

7-10区SP127（図55）

7-10区の北東部第1面（Ⅲ層上面）で検出された土坑である。周辺には攪乱坑があり、上部は削平を

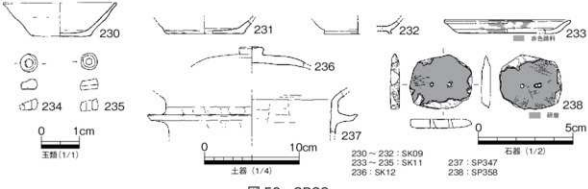


a-a'
1 10YR3/2 黒褐色シルト（Fe・Mn・粒径2～7cmのブロック土をやや多量に含む）
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト（Fe・Mn・粒径2～7cmのブロック土を多量に含む）
3 2.5Y3/2 暗灰黄色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量、粒径1～2cmのブロック土多量に含む）
4 2.5Y4/1 黄灰色シルト（炭化物・焼土細粒少量、粒径1～2cmのブロック土若干量含む）
5 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（Fe・粒径10cmのブロック土多量、ほとんどがブロック土層）
6 2.5Y3/1 黒褐色シルト（粒径1cm程度のブロック土少量含む、炭化物・焼土細粒少量含む）
7 2.5Y4/1 黄灰色シルト（Fe を少量含む・人為的埋戻しと、粒径1～5cmのブロック土をやや多量に含む、通物やや多い）
8 2.5Y4/1 黄灰色シルト（Fe・粒径1～5cmのブロック土非常に多量に含む）

b-b'
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト（炭化物・焼土細粒少量含む）
2 2.5Y4/1 黄灰色シルト（Mn）
3 10YR4/1 褐灰色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量含む、粒径1～2cmのブロック土若干量含む）
4 10YR3/1 黒褐色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量含む、粒径2～3cmのブロック土やや多量に含む）
5 2.5Y5/1 ～6/1 黄灰色シルト（Mn・粒径1cm程度のブロック土少量含む）
6 10YR3/1 黒褐色シルト（Mn・粒径1～2cmのブロック土若干量含む）
7 5Y4/1 灰色シルト（Mn・粒径1～2cmのブロック土少量含む）
8 2.5Y3/1 黒褐色シルト（粒径1cm程度のブロック土少量含む、炭化物・焼土細粒少量含む）
9 2.5Y4/1 黄灰色シルト（粒径1～5cmのブロック土をやや多量に含む、通物やや多い）

c-c'
1 10YR4/1 褐灰色シルト（Mn・粒径1～2cmのブロック土少量含む）
2 10YR4/2 灰黄褐色シルト（Mn）
3 2.5Y3/2 黒褐色シルト（Mn・粒径1cm程度のブロック土少量含む、炭化物・焼土細粒少量含む）
4 10YR3/2 黒褐色シルト（粒径1～2cmのブロック土多量に含む、炭化物・焼土細粒少量含む）
5 10YR3/1 黒褐色シルト（Fe・粒径2～3cmのブロック土やや多量に含む）
6 2.5Y3/2 黒褐色シルト（Mn・粒径1～2cmのブロック土やや多量に含む）

d-d'
1 2.5Y3/2 黒褐色シルト（Mn・粒径1cm程度のブロック土少量含む、炭化物・焼土細粒少量含む）
2 2.5Y3/2 黒褐色シルト（Mn・粒径1～2cmのブロック土やや多量に含む）
3 10YR3/2 黒褐色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量含む）
4 10YR3/2 黒褐色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量含む、粒径1～2cmのブロック土多量に含む・人為的埋戻し土）
5 10YR3/2 黒褐色シルト（Fe・Mn・粒径2～7cmのブロック土やや多量に含む）
6 10YR4/2 灰黄褐色シルト（Mn・粒径1～2cmのブロック土少量含む・SK11 柱痕埋土）
7 2.5Y3/2 黒褐色シルト（Fe・Mn・粒径2～7cmのブロック土を多量に含む）



230～232：SK09
233～235：SK11
236：SK12
237：SP347
238：SP358

図50　SB23

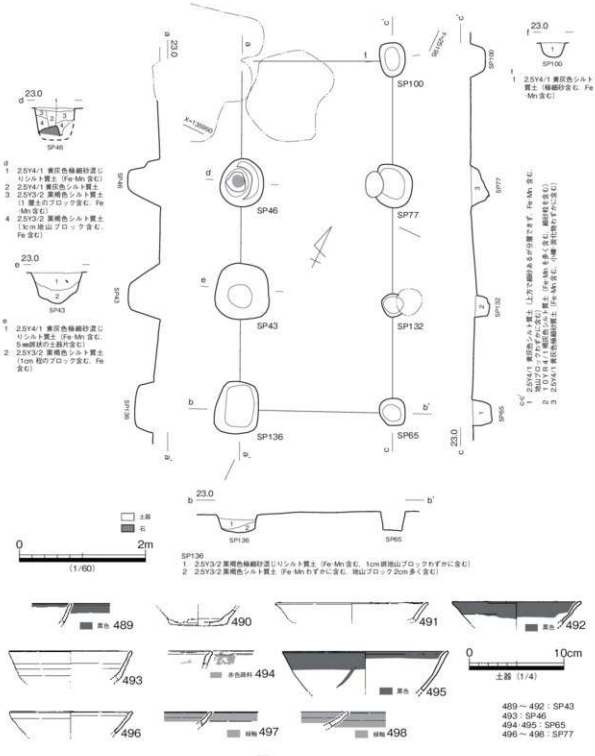

SP46
SP77
SP43
SP132
SP136
SP65
SP100
SP108
SP77
SP132
SP65
23.0
d
1 2.5Y4/1 黄灰色極細砂混じりシルト質土（Fe・Mn 含む）
2 2.5Y4/1 黄灰色シルト質土
3 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土（1 層土のブロック含む，Fe・Mn 含む）
4 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土（1cm 地山ブロック含む，Fe 含む）
e
1 2.5Y4/1 黄灰色極細砂混じりシルト質土（Fe・Mn 含む，5 ㎝倒状の土器片含む）
2 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土（1cm 程の地山ブロックわずかに含む，Fe 含む）
SP136
1 2.5Y3/2 黒褐色極細砂混じりシルト質土（Fe・Mn 含む，1cm 倒地山ブロックわずかに含む）
2 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土（Fe・Mn わずかに含む，地山ブロック 2cm 多く含む）
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト質土
土器
石
0
2m
(1/60)
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
黒色
赤色顔料
緑泥
0
10cm
土器（1/4）
489～492：SP43
493：SP46
494・495：SP65
496～498：SP77

図 51　SB24

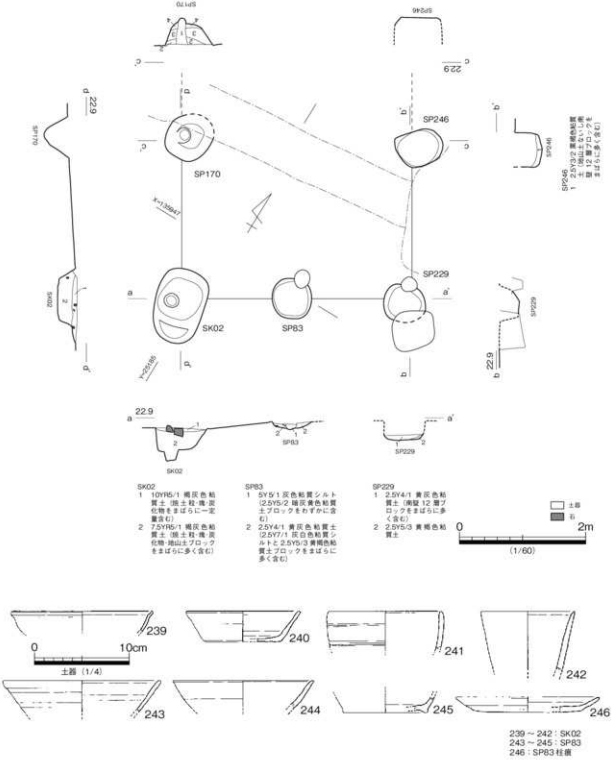

SP170
1 2.5YR3/1 暗赤褐色シルト（粒（10cm 以下）の 2.5YR3/3 黄褐色粘質土ブロックをまばらに含む）
2 5YR4/1 灰褐色土（粒（10cm 以下）の 2.5YR3/3 黄褐色粘質土ブロックをまばらに含む）
3 5YR3/1 オリーブ黒色粘質土（粒（10cm 以下）の 2.5YR3/3 黄褐色ブロックをまばらに含む）
4 2.5YR3/2 黄褐色粘質土（粒（10cm 以下）の 2.5YR3/3 黄褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む）
SP246
1 2.5YR3/2 黄褐色粘質土（粒（10cm 以下）の 2.5YR3/3 黄褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む）
SK02
1 10YR5/1 褐灰色粘質土（焼土粒・炭化物をまばらに一定量含む）
2 7.5YR5/1 褐灰色粘質土（焼土粒・炭化物・地山土ブロックをまばらに多く含む）
SP83
1 5Y5/1 灰色粘質シルト（2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロックをわずかに含む）
2 2.5Y4/1 黄灰色粘質土（2.5Y7/1 灰白色粘質シルトと 2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む）
SP229
1 2.5Y4/1 黄灰色粘質土（焼土 12 層ブロックをまばらに多く含む）
2 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
土器
石
0
2m
(1/60)
0
10cm
土器（1/4）
239
240
241
242
243
244
245
246
239～242：SK02
243～245：SP83
246：SP83 柱痕

図 52　SB25

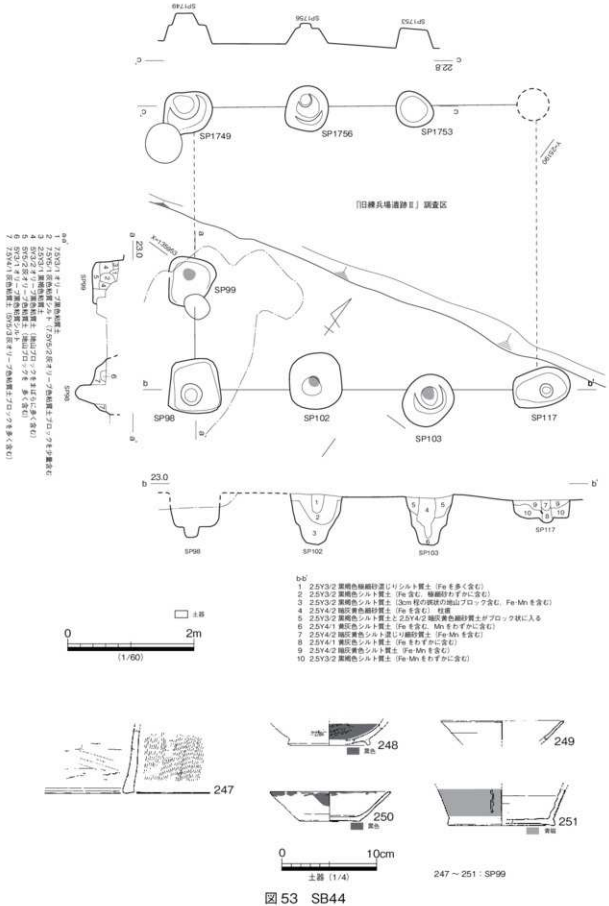

SP1749
SP1756
SP1753
22.8
c
c'
「旧練兵場遺跡Ⅱ」調査区
SP99
SP98
SP102
SP103
SP117
23.0
a
a'
b
b'
b-b'
1 2.5Y3/2 黒褐色極細砂混じりシルト質土（Fe を多く含む）
2 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土（Fe 含む、極細砂わずかに含む）
3 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土（3cm 程の炭状の地山ブロック含む、Fe・Mn を含む）
4 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂質土（Fe を含む）　柱痕
5 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土と 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂質土がブロック状に入る
6 2.5Y4/1 黄灰色シルト質土（Fe を含む、Mn をわずかに含む）
7 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混じり細砂質土（Fe・Mn を含む）
8 2.5Y4/1 黄灰色シルト質土（Fe をわずかに含む）
9 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質土（Fe・Mn を含む）
10 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土（Fe・Mn をわずかに含む）
土器
0
2m
(1/60)
247
248
黄色
249
250
黄色
251
青磁
0
10cm
土器（1/4）
247～251：SP99

図 53　SB44

受ける。平面形は下端の形状からややいびつな楕円形で、長軸 0.7 m、短軸 0.4 m程度で、深さ 0.25 m である。埋土からは 255 ～ 258 が出土した。255 ～ 257 は土師器杯、258 は土師器羽釜である。いずれも 10 世紀前半に属することから、SP127 は同時期のものと考えられる。

7-10 区 SK03（図 56）

7-10 区南部第 2 面（SR01 上層下位上面）で検出された遺構である。両端は中世の柱穴と重複しており、削平される。残存部分から平面形は長楕円形と推定される。長軸 0.8 m以上、短軸 0.6 m、深さ 0.2 m である。遺物は瓦・土器・須恵器小片が少量出土した。259 は平瓦で、凸面には格子状のタタキ目があり、瓦質である。SK03 の詳細な時期は不明であるが、中世の柱穴に削平されることや埋土の土質から古代または中世の可能性が高い。

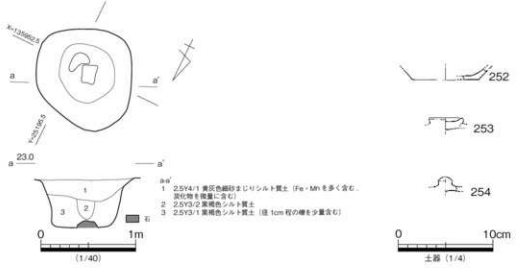


図 54　7-10 区 SK02

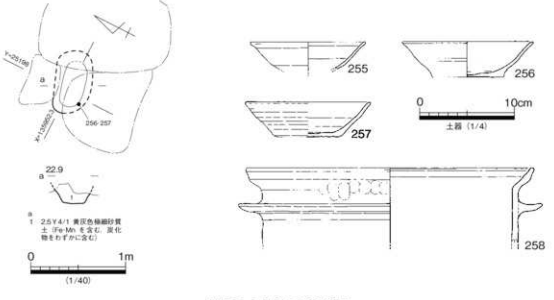


図 55　7-10 区 SP127

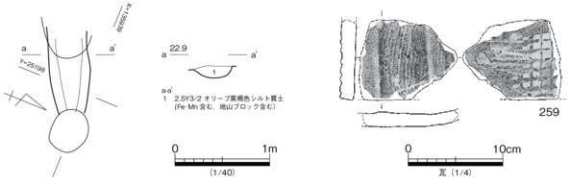


図 56　7-10 区 SK03

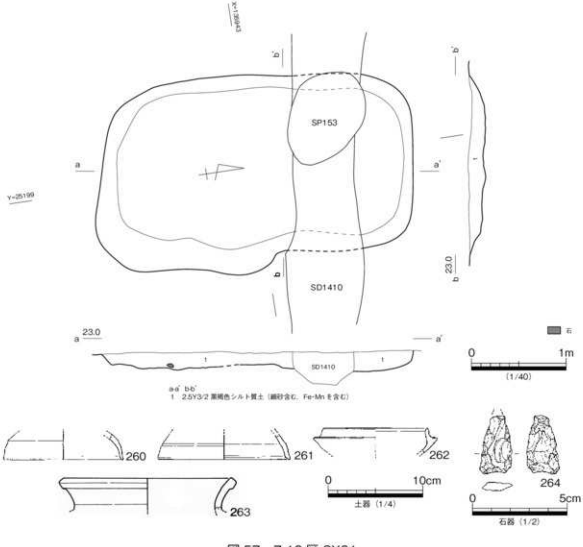
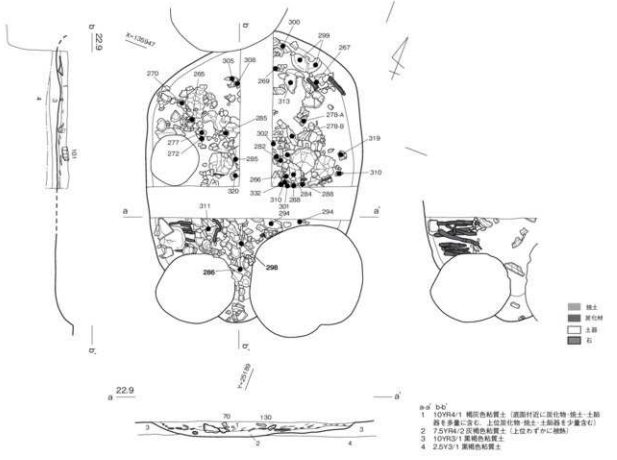
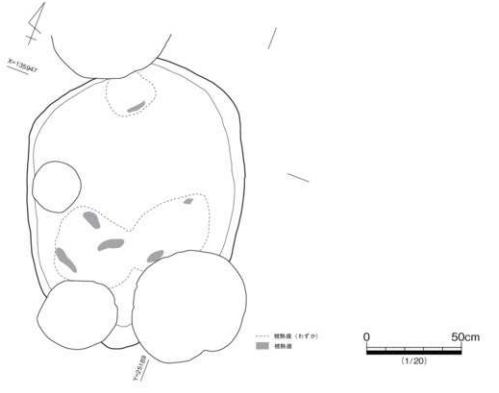


図 57　7-10 区 SX01



遺物・炭化材出土状況



底面被熱状況

図 58　7-11 区 SK01（1）

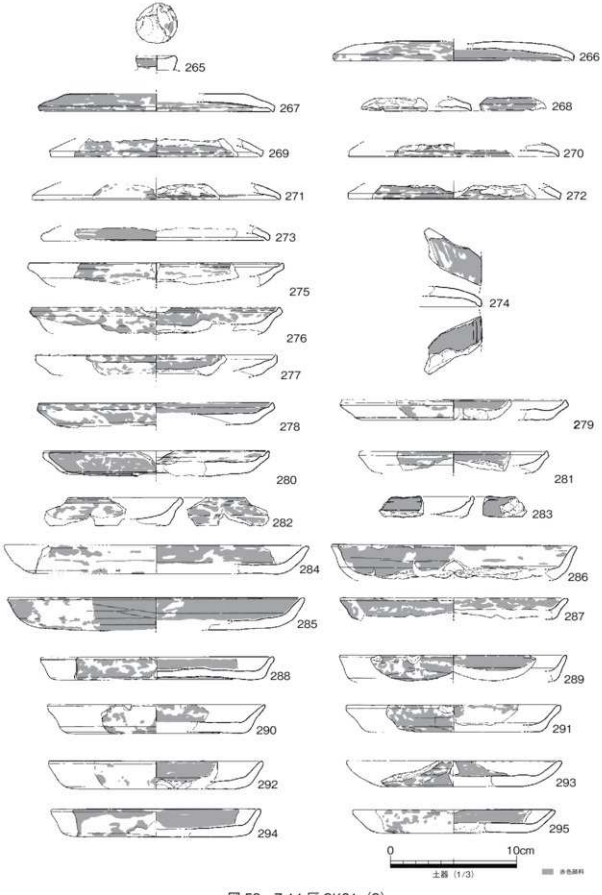


図 59　7-11 区 SK01（2）

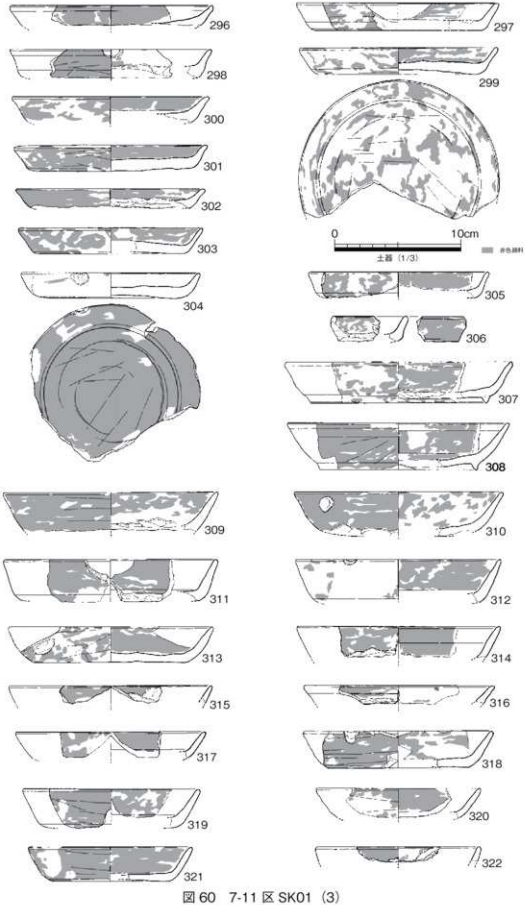


図60　7-11 区 SK01（3）

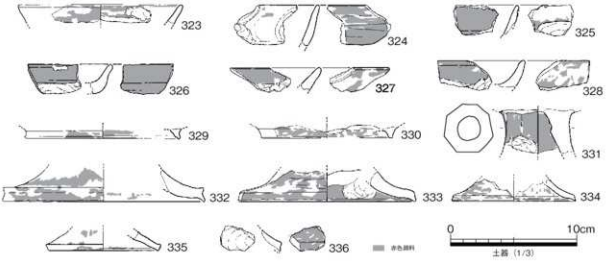


図 61　7-11 区 SK01（4）

7-10 区 SX01（図 57）

7-10 区南部第 2 面（SR01 上層下位上面）で検出された土坑である。8 世紀の掘立柱建物 SB03 の柱穴 SP153、8 世紀の溝 SD1410 と重複し、削平される。また、7 世紀の竪穴建物 SH01 と重複するが、SX01 のほうが新しい。SX01 の平面形は隅丸長方形で、長軸 3.3 m、短軸 2.0 m である。底面はほぼ平坦で、深さは 0.2 m である。埋土は黒褐色シルト質土で、整理箱半分程度の土器・須恵器片が出土した。260・261 は須恵器蓋、262 は須恵器杯、263 は須恵器甕である。これらの須恵器は陶邑編年 TK217 型式に属することから、SX01 は 7 世紀前半から中葉のものと考えられる。

7-11 区 SK01（図 58 ～ 61）

7-11 区北部第 3 面（SR01 中層上面）で検出された土坑である。8 世紀に埋没する溝 SD1410 の埋土上面で検出された。中世の掘立柱建物 SB01 の柱穴 7-11 区 SP12・7-11 区 SP07 と重複し、一部が削平される。SK01 の平面形は卵形で、長軸 1.6 m、短軸 1.2 m である。断面形は浅い皿状で、底面はほぼ平坦である。最深部の深さは 0.07 m で、土坑内からは多量の土器片と焼土塊や炭化材が出土した。土器片は規則正しく並べられたような状態ではなく、小破片が混在したような状態で出土した。これらはいずれも赤彩が施された土師器で、破裂痕がみられるものが多い。焼土塊は少量であったが、遺構内のほぼ全面から出土した。床面や壁、土器の上部・下部の両方から出土した。焼土の一部には面をもつものもあり、表面が凸凹しているものが多く、藁状の圧痕があるものもみられる。床面は平坦である。床面でも北端と南半分に僅かな被熱痕がみられる。壁には被熱痕はみられない。南西部の底面には数本の炭化材が平行に並べた状態で出土した。また、SK01 内の北東部では土器や焼土の上からも炭化材が少量出土した。炭化材はいずれも枝状で、太さは径 1 ～ 4cm 程度、最も長いもので 22cm 程度である。このように焼土・炭化材・焼成破裂痕のある土器片が多数出土していることから、SK01 は土師器を焼成した土坑と考えられる。土器は多量に出土したが、完形品はなく、いずれも焼成破裂痕のある土器片ばかりであることから、これらの土器は SK01 内で焼かれたが、焼成に失敗したため取り上げられることなく、そのまま廃棄されたものと考えられる。SK01 での土器焼成は浅い土坑を掘削後、燃料の木を置き、その上に赤色顔料が塗られた土器を置き、さらにその上に燃料の木や藁を置き、土をかぶせて焼成したと推定される。

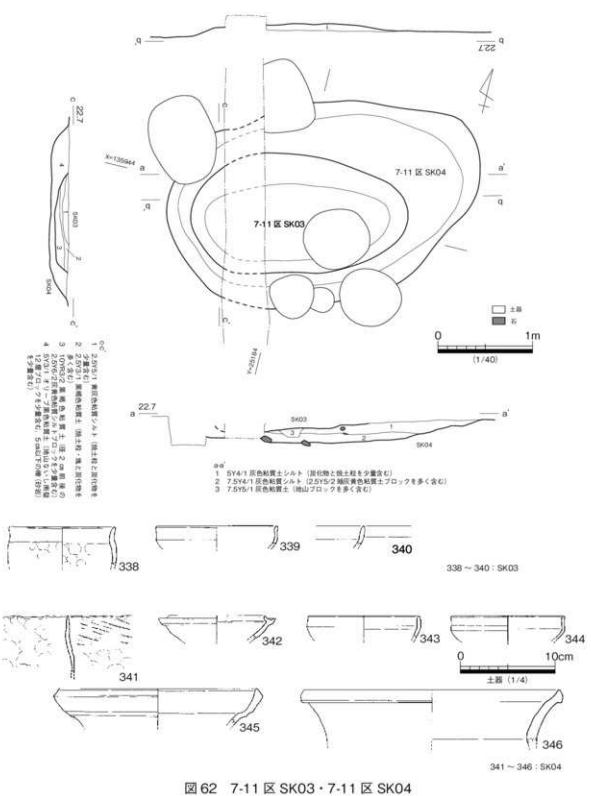


図 62　7-11 区 SK03・7-11 区 SK04

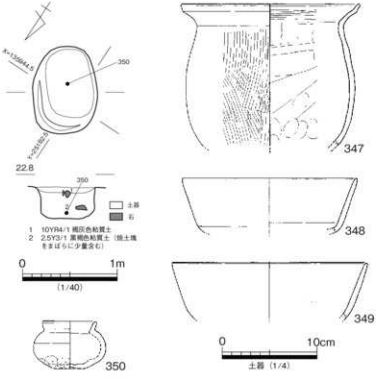


図63　7-11 区 SK05

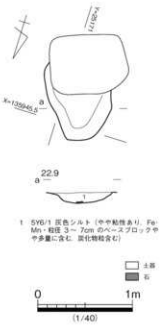


図64　7-12 区 SK02

265 ～ 336 は SK01 から出土した遺物である。これらの中には完形品はなく、いずれも赤彩されていた。第 4 章第 5 節で詳述するが、SK01 出土土器のうち 14 点の土器を分析した結果、土器に付着した赤色顔料の原料はベンガラであった。これらの中には天地が不明瞭なものもあるが、265 ～ 274 は蓋、275 ～ 306 は皿、307 ～ 330 は杯、331 ～ 336 は高杯の脚部と考えた。圧倒的に皿・杯が多い。265 のようにつまみが出土していることから、蓋はいずれもつまみが付いていたと考えられる。天井部は平坦で、口縁部は下方に僅かに突出する。いずれも回転ナデを施したあとで、赤色顔料を塗布する。皿は蓋と形態が類似するが、蓋としたものより深いものを皿とした。皿も口縁端部を上方に摘み上げたような形状で面をもつものと、丸いものの 2 種類がある。いずれも外面にはヘラケズリやヘラミガキが施されず、ナデ調整が施される。杯も皿同様口縁端部に面をもつものと丸いものの 2 種類があり、外面にはナデ調整が施される。また、底部は 307・308 のように高台をもつものと高台をもたないものがある。高杯は少量みられる。331 は脚部片で、外面に面をもち、断面形は八角形である。これらの土器はいずれも赤色顔料が塗布されている。SK01 から須恵器は出土しておらず、同時期に存在した須恵器の様相はつかめていない。本書で報告した遺構の中には赤色顔料が塗布された土器が含まれている遺構もあるが、須恵器と共伴する良好な資料はなく、SK01 の実年代については今後の課題である。なお、このような赤色顔料を塗布する土器は京都府の長岡京跡で多く出土することから、SK01 は長岡京跡とほぼ同時期の 8 世紀末頃から 9 世紀初頭のものである可能性が高い。

7-11 区 SK03（図 62）

7-11 区西部第 3 面（SR01 中層上面）で検出された土坑である。平安時代の掘立柱建物 SB08 と重複し、削平される。また、土坑 SK04 と重複するが、SK03 のほうが新しい。SK03 の平面形は楕円形で、長軸 2.2

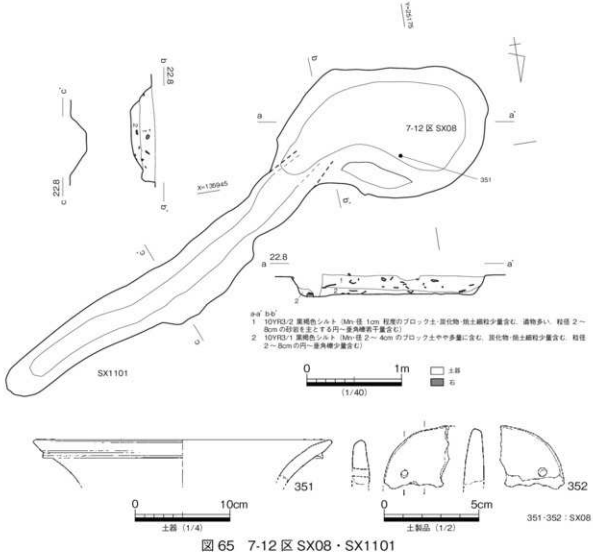


図 65　7-12 区 SX08・SX1101

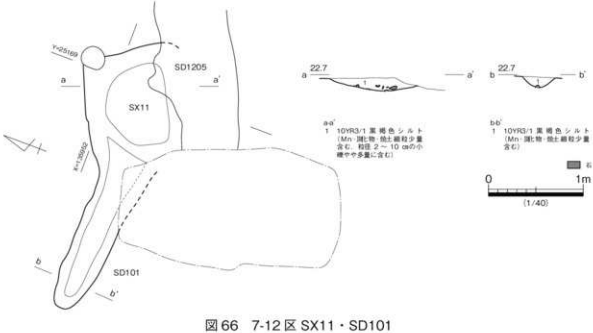


図 66　7-12 区 SX11・SD101

m、短軸 1.2 mである。断面形は浅い皿状で、深さは 0.15 mである。埋土には焼土粒と炭化物が多く含まれる。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。338 は土師器甕、339・340 は須恵器杯である。これらの遺物から SK03 は 7 世紀のものと考えられる。

7-11 区 SK04（図 62）

7-11 区西部第 3 面（SR01 中層上面）で検出された土坑である。土坑 SK03 と重複する。SK04 のほうが古い。SK04 の平面形はややいびつな楕円形で、長軸 3.4 m、短軸 2.1 mである。断面形は浅い皿状で、深さ 0.2 ～ 0.3 mである。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。341 は製塩土器、342 ～ 344 は須恵器杯、345・346 は須恵器甕である。これらの遺物から SK04 は 7 世紀のものと考えられる。

7-11 区 SK05（図 63）

7-11 区西部第 2 面（SR01 上層下位上面）で検出された土坑である。平面形は楕円形で、長軸 0.9 m、短軸 0.6 mである。断面形は箱形で、深さ 0.35 mである。遺物は土器・須恵器が出土した。347 は土師器甕、348･349 は須恵器鉢、350 は須恵器小壺である。350 は SK05 のほぼ中央の底面付近から出土した。これらの遺物から SK05 は 7 世紀後半のものと考えられる。

7-12 区 SK02（図 64）

7-12 区のほぼ中央部第 1 面（Ⅲ層上面）で検出された土坑である。SK02 の南部は掘立柱建物 SB23 の柱穴 SK01 と重複し、削平される。SK01 のほうが新しい。SK02 の平面形はいびつな楕円形で、長軸 0.9 m前後、短軸 0.7 mである。平面形は浅い皿状で、深さ 0.15 mである。遺物は土器片・須恵器片が少量出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構と同様古代のものと考えられる。

7-12 区 SX08（図 65）

7-12 区東部第 2 面（Ⅳ層上面）で検出された土坑である。7-11 区から南西に向かう溝 SX1101 と重複する。SX1101 のほうが新しい。発掘調査時には SX08 と SX1101 を連続する同一遺構と考え、両遺構とも SX08 としていたが、調査後に別遺構と考え、土坑を SX08、溝を SX1101 とした。SX08 の平面形はややいびつな楕円形で、長軸 2.4 m、短軸 1.4 m、断面形は箱形で、最深部の深さは 0.2 mである。遺物は整理箱 1 箱程度出土した。351 は須恵器甕、352 は分銅形土製品である。須恵器が出土していることから古墳時代後期から 7 世紀頃のものと考えられる。

SX1101（図 65）

7-12 区の東部から 7-11 区西部第 2 面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。西端は土坑 7-12 区 SX08 と重複し、削平される。SX1101 のほうが新しい。発掘調査時には SX08 と SX1101 を連続する同一遺構と考え、両遺構とも SX08 としていたが、調査後に別遺構と考え、土坑を SX08、溝を SX1101 とした。なお､7-11 区で検出された SX08 の溝部分は 7-12 区では SX01（発掘時の遺構名）と連続する。このため、SX08 の溝部分を SX1101 とした。SX1101 の方向は N75° E で、幅 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.4 m、検出長 3.6 mである。遺物は少量出土した。図化していないが、底部外面に回転ヘラ切り痕が残る須恵器小片が出土していることから、古代のものと考えられる。

7-12 区 SX11・SD101（図 66）

7-12 区の北部第 2 面（Ⅳ層上面）で検出された土坑である。西端は溝 SD101 と重複するが、新旧関係は不明である。発掘調査時には SX11 と SD101 を連続遺構と考え、両遺構とも SX11 としていたが、調査後に別遺構と考え、土坑を SX11、溝を SD101 とした。また、SX11 の南部は近世の溝 SD1205 と重複し、削平され、攪乱によって削平される。SX11 の平面形はややいびつな方形で、残存部分の長軸

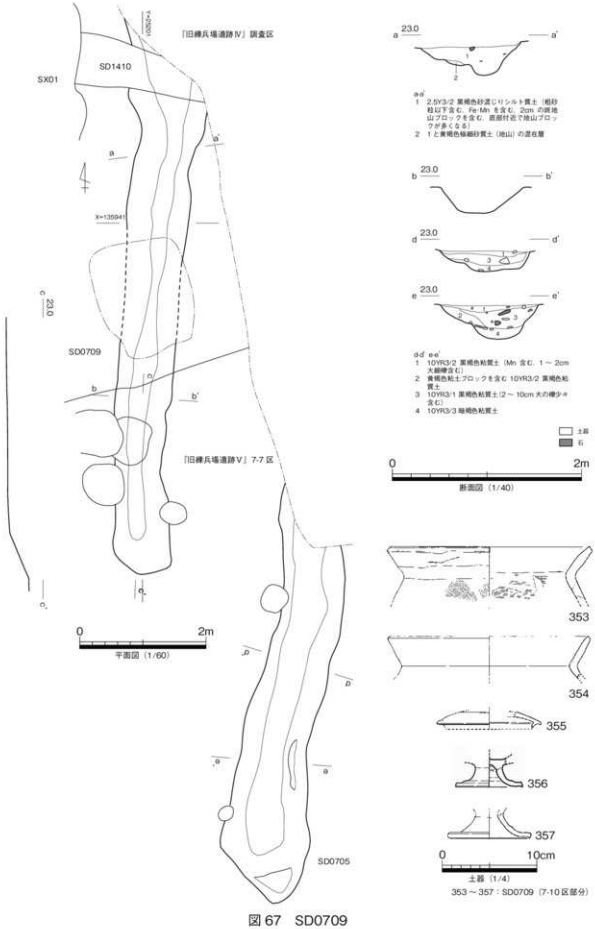

「旧練兵場遺跡Ⅳ」調査区
SX01
SD1410
y=-12300
x=135941
SD0709
「旧練兵場遺跡Ⅴ」7-7 区
SD0705
23.0
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
e
e'
0
2m
平面図（1/60）
a-a'
1 2.5Y3/2 黒褐色砂質じりシルト質土（粗砂粒以下含む。Fe・Mn を含む。2cm の岡地山ブロックを含む。底部付近で地山ブロックが多くなる）
2 1と黄褐色極細砂質土（地山）の混在層
b-b'
d-d' e-e'
1 10YR3/2 黒褐色粘質土（Mn 含む。1 ～ 2cm 大礫含む）
2 黄褐色粘土ブロックを含む 10YR3/2 黒褐色粘質土
3 10YR3/1 黒褐色粘質土（2 ～ 10cm 大の樹少々含む）
4 10YR3/3 暗褐色粘質土
土器
石
0
2m
断面図（1/40）
353
354
355
356
357
0
10cm
土器（1/4）
353 ～ 357：SD0709（7-10 区部分）

図 67　SD0709

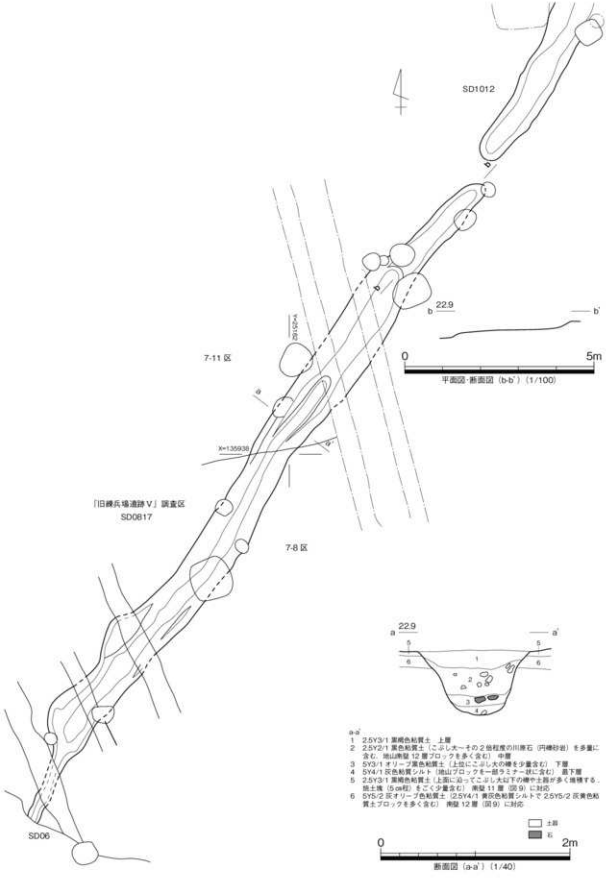

SD1012
b
b'
22.9
0
5m
平面図・断面図（b-b'）（1/100）
7-11 区
X=135938
「旧練兵場遺跡Ⅴ」調査区
SD0817
7-8 区
SD06
a
a'
22.9
a-a'
1　2.5Y3/1 黒褐色粘質土　上層
2　2.5Y2/1 黒色粘質土（こぶし大～その2倍程度の川原石（円礫砂岩）を多量に含む。地山南盤 12 層ブロックを多く含む）中層
3　5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（上位にこぶし大の礫を少量含む）下層
4　5Y4/1 灰色粘質シルト（地山ブロックを一部ラミナー状に含む）最下層
5　2.5Y3/1 黒褐色粘質土（上面に沿ってこぶし大以下の礫や土器が多く堆積する。焼土塊（5 cm径）も少し少量含む）南盤 11 層（図 9）に対応
6　5Y5/2 灰オリーブ色粘質土（2.5Y4/1 黄灰色粘質シルトで 2.5Y5/2 灰黄色粘質土ブロックを多く含む）南盤 12 層（図 9）に対応
土器
石
0
2m
断面図（a-a'）（1/40）

図 68　SD0817（1）

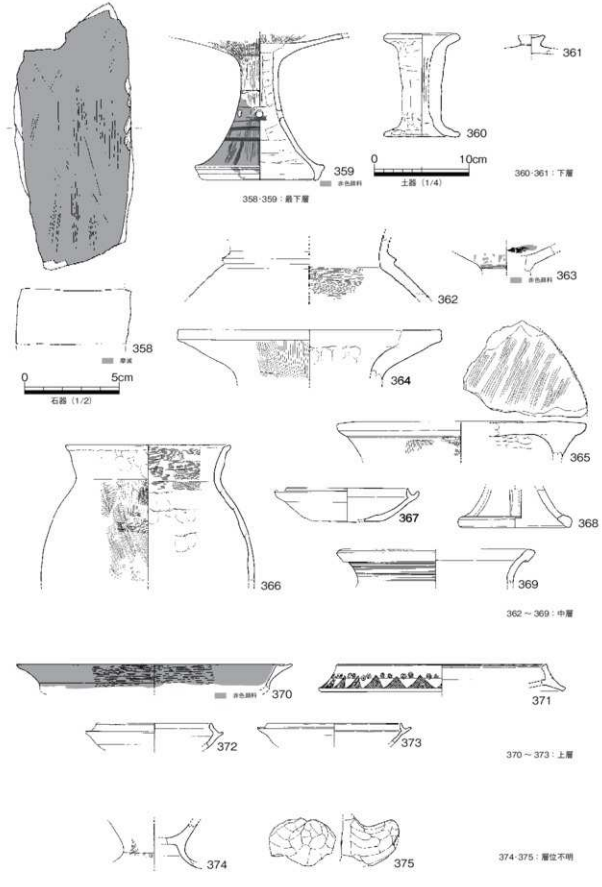

358
0
5cm
石器（1/2）
358·359：最下層
359
赤色顔料
0
10cm
土器（1/4）
360
361
360·361：下層
362
363
赤色顔料
364
365
366
367
368
369
362～369：中層
370
赤色顔料
371
372
373
370～373：上層
374
375
374·375：層位不明

図69　SD0817（2）

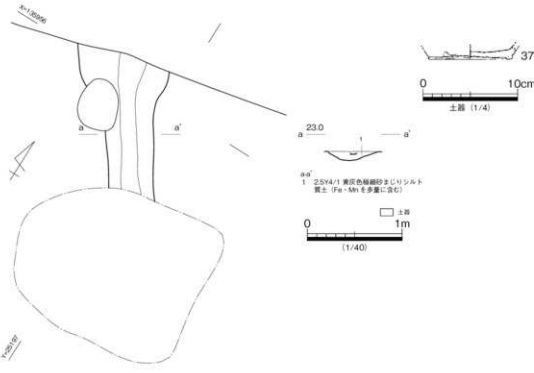


図 70　SD1003

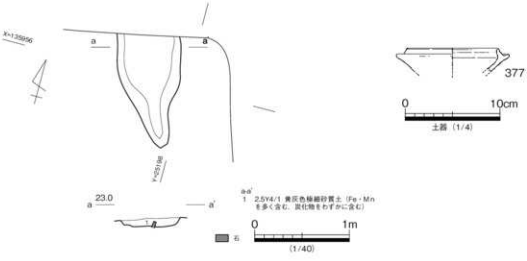


図 71　SD1005

は 1.2 m である。断面形は浅い皿状で、最深部の深さは 0.25 m である。SD101 はほぼ東西方向で、検出長 1.8 m、幅 0.4 m、断面形は浅い皿状で、最深部の深さは 0.2 m である。これらの遺構からは土器・須恵器片が少量出土した。図化していないが、須恵器の様相から両遺構は古代のものと考えられる。

溝

SD0709（図 67）

7-10 区東部第 2 面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。溝の南部は『旧練兵場遺跡Ⅴ』で報告した 7-7 区に連続する。この溝は『旧練兵場遺跡Ⅴ』では SD0709 として報告されたことから、同名を踏襲

するが、調査時の遺構名はSD09である。SD0709は南北（N3° E）に延び、北端は『旧練兵場遺跡Ⅳ』で報告した7-5区に入る。7-5区の西端付近は攪乱によって大きく削平されており、SD0709の北端は確認できなかった。また、7-7区では8世紀の掘立柱建物7-7区SB03の柱穴SP166、溝SD1410と重複しており、削平される。これらよりもSD0709のほうが古い。7-7区から7-10区にかけての検出長は8.6 m、幅0.9 ～ 1.2 m、深さ0.3 mである。7-7区で検出されたSD0709の南端は急傾斜である。また、埋土は黒褐色シルトで、流水の痕跡は認められない。これらのことから、SD0709は用水路ではなく、区画のために掘られた溝の可能性が高い。なお、SD0709の東1.8 mにはSD0709と平行して南北に延びる溝SD0705がある。SD0705は7-7区で検出された溝で、北部は7-5区に延びるが、攪乱によって大きく削平されており、北端は未検出である。SD0705もSD0709と同様、南端は急傾斜で、流水痕跡は認められない。これらの溝は平行することから、これらの間は道の可能性もある。SD0709の埋土からは土器・須恵器片が少量出土した。353・354は土師器甕、355は須恵器蓋、356・357は須恵器高杯の脚部である。これらの須恵器は7世紀に属することから、SD0709は7世紀のものと考えられる。

SD0817（図68・69）

7-8区第2面（SR01中層上面）、7-11区第2面（SR01上層下位上面）で検出された溝である。調査時の遺構名は7-11区ではSD01であるが、『旧練兵場遺跡Ⅴ』で報告した溝SD0817と同一遺構であるため、同名を使用する。SD0817は南西から北東（N35° E）に向かう。南端は7世紀ごろ埋没する溝SD06と重複する。最終埋没はSD06のほうが新しい。南端付近は溝幅0.3 ～ 0.4 m、深さ0.1 ～ 0.15 mであるが、中央部は幅広で深くなり、幅1.2 ～ 1.5 m、深さ0.6 ～ 0.7 mとなる。また、溝の北端は幅狭で浅くなり、幅0.7 m、深さ0.2 ～ 0.3 mとなる。北端の0.6 m北方には南西から北東に向かい、東南東に向かう溝SD1012（図74）がある。SD1012の南端は幅0.8 m、深さ0.2 mと浅く、SD0817はSD1012と連続する可能性が高い。遺物は多量の土器・須恵器が出土した。358・359は底面付近、360・361は下層、362 ～ 369は中層、370・373は上層、374・375はSD0817から出土したが、層位不明である。358は砥石で、石材は安山岩の可能性が高い。359は弥生土器高杯の脚部である。櫛状工具による直線文と赤彩がみられる。胎土は茶褐色である。岡山県備中地方産で、搬入品である。弥生時代後期初頭に属する。360は弥生土器支脚、361は須恵器蓋である。362は弥生土器壺、363は高杯の杯部である。363も茶褐色で、359と胎土が類似する。岡山県備中地方産で搬入品である。364・365は弥生土器器台、366は土師器甕、367は須恵器杯、368は須恵器高杯の脚部、369は須恵器甕である。370は弥生土器高杯の杯部で赤彩がある。胎土は茶褐色である。胎土や形態から岡山県備中地方産で、弥生時代後期初頭に属する。371は器台の口縁部である。胎土は茶褐色である。口縁部外面には丁寧なヘラ描きによる鋸歯文と円形竹管文がみられる。372・373は須恵器杯である。374は弥生土器の脚部、375は土師器の把手である。弥生土器も混じるが、須恵器はいずれも陶邑編年TK217型式に属することから、SD0817は7世紀のものと考えられる。

SD1003（図70）

7-10区北東隅第1面（Ⅲ層上面）で検出された溝である。北部は『旧練兵場遺跡Ⅱ』（平成23年2月刊行）で報告された調査区であるが、攪乱によって大きく削平されているため溝SD1002の北端は検出されていない。南部は攪乱によって大きく削平される。SD1003は南東から北西（N25° W）に向かう。溝幅は0.5 ～ 1.0 m、断面形は浅い皿状で、最新部の深さは0.1 mである。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。376は須恵器の底部で、8世紀から9世紀に属する。SD1003は付近の条里地割に平行する。この付近

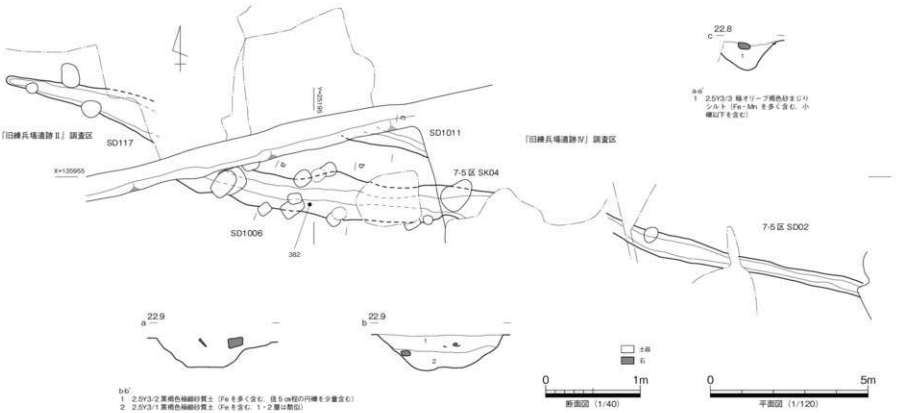


図72　SD1006・SD1011（1）

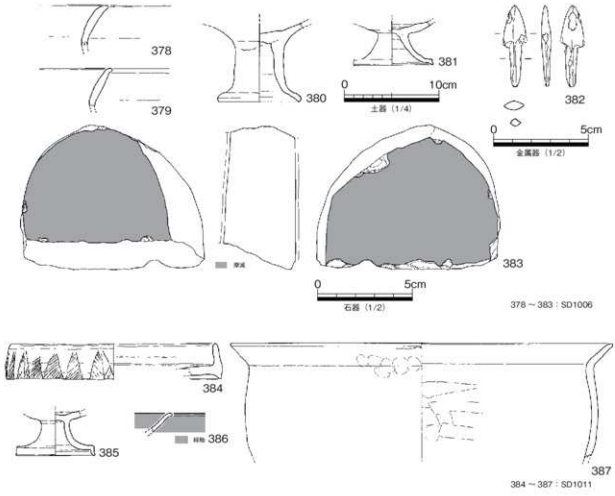


図73　SD1006・SD1011（2）

では条里地割に平行する遺構は9世紀以降のものであることから、SD1003は9世紀頃のものと考えられる。

SD1005（図71）

7-10区北東隅第1面（Ⅲ層上面）で検出された溝である。北部は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区であるが、攪乱によって大きく削平されているため溝SD1005の北端は検出されていない。SD1005は南東から北西（N20° W）に向かう。溝幅は0.3～1.4 mである。断面形は浅い皿状で、最深部の深さは0.1 mである。遺物は須恵器・土師器が少量出土した。377は須恵器杯で、陶邑編年TK217型式に属することから、SD1005は7世紀のものと考えられる。

SD1006（図72・73）

7-10区北東端第3面（SR01中層上面）で検出された溝である。北部は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区である。調査区の境界付近は攪乱によって削平されるが、『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された溝SD117に連続する可能性が高い。また、東部は『旧練兵場遺跡Ⅳ』で報告された7-5区SK04に連続し、攪乱を挟んだ東側の7-5区SD002に連続する可能性が高い。SD1006は南東から北西（N20° W）に向かう。東接調査区と合わせると検出長は21 m、溝幅は0.6～1.5 mである。断面形はU字形で、最新部の深さは0.4 mである。遺物は土器・須恵器片が整理箱半分程度出土した。378～383はSD1006から出土し

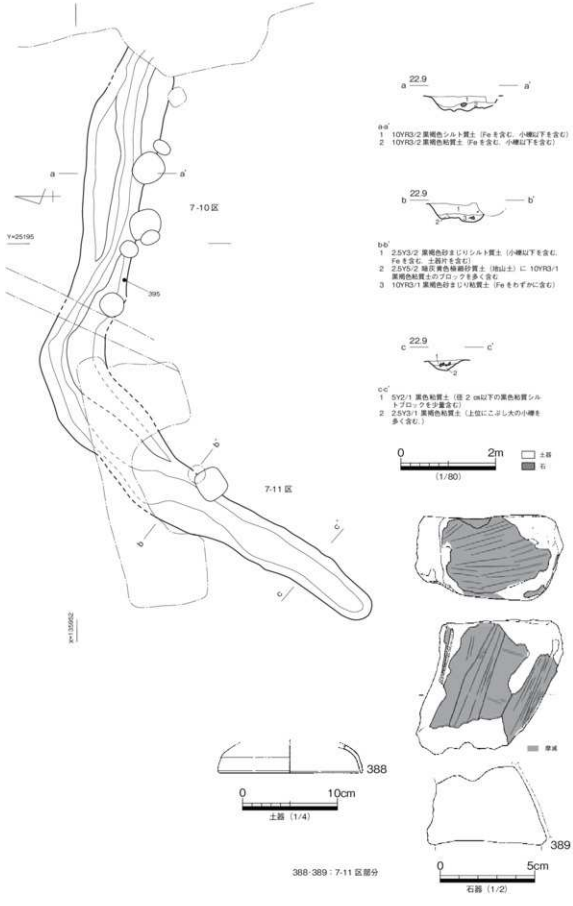

a
a'
7-10区
Y=25195
395
b
b'
7-11区
c
c'
X=135952
22.9
a-a'
1 10YR3/2 黒褐色シルト質土（Feを含む、小礫以下を含む）
2 10YR3/2 黒褐色粘質土（Feを含む、小礫以下を含む）
b-b'
1 2.5Y3/2 黒褐色ililシルト質土（小礫以下を含む、Feを含む、土器片を含む）
2 2.5Y5/2 暗灰黄色砂細砂質土（地山土）に 10YR3/1 黒褐色粘質土のブロックを多く含む
3 10YR3/1 黒褐色ililシルト質土（Feをわずかに含む）
c-c'
1 5Y2/1 黒色粘質土（径 2 cm以下の黒色粘質シルトブロックを少量含む）
2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（上位にこぶし大の小礫を多く含む。）
0
2m
土器
石
(1/80)
388
0
10cm
土器（1/4）
摩滅
389
0
5cm
石器（1/2）
388-389：7-11 区部分

図 74　SD1012（1）

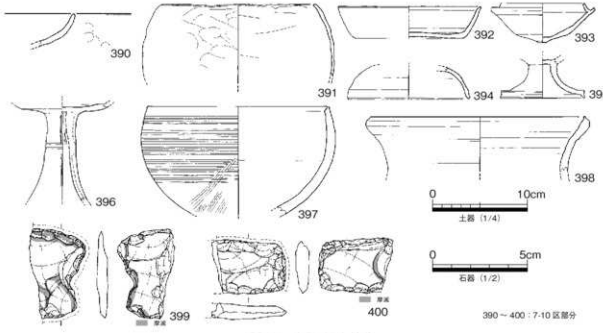


図75　SD1012（2）

た遺物である。378・379は土師器甕、380は土師器高杯の脚部、381は須恵器高杯の脚部、382は銅鏃、383は砥石である。383の石材は砂岩である。382は弥生時代のものであるが、土師器・須恵器の様相からSD1006は7世紀のものと考えられる。

SD1011（図72・73）

7-10区北東隅第3面（SR01中層上面）で検出された溝である。調査区北東隅で検出されたため、溝の北端は検出されていない。北部は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区である。調査区の境界付近は攪乱によって削平される。また、東部は『旧練兵場遺跡Ⅳ』で報告された7-5区であるが、攪乱が深く、SD1011に連続する溝は検出されていない。SD1011はSD1006と平行して南東から北西（N20° W）に向かう。7-10区での検出長2.4 m、現存溝幅0.5 m、断面形はV字形で、最新部の深さは0.3 mである。遺物は土器・須恵器片などが少量出土した。384は弥生土器器台、387は土師器甕、385は須恵器高杯の脚部、386は緑釉陶器碗の口縁部である。385は7世紀に属し、386は9世紀に属する。386は小破片であることから、混入した可能性が高い。SD1006と平行することや須恵器の様相からSD1011も7世紀のものと考えられる。

SD1012（図74）

7-11区と7-10区第3面（SR01中層上面）で検出された溝である。調査時の遺構名は7-11区ではSD11、7-10区ではSD12である。SD0817の北方の延長線上にあり、7-11区では南西から北東（N35° E）に向かい、7-10区に入るとL字状に屈曲して、東南東（E10° S）に向かう。検出長15 m、溝幅1.0～1.6 m、深さ0.2～0.4 mである。埋土は黒褐色シルトを中心とし、砂層の堆積はみられなかった。遺物は土器・須恵器片などが整理箱2箱程度出土した。388・389は7-11区部分から出土した。388は須恵器蓋、389は砥石で、石材は凝灰岩である。390～400は7-10区部分から出土した。390は土師器杯、391は土師器鉢、392・393は須恵器杯、394は須恵器蓋、395・396は須恵器高杯、397は須恵器鉢、398は須恵器甕である。392は8世紀に属するが、他は7世紀に属する。SD1012の南延長上にあるSD0817も7世紀の溝と考

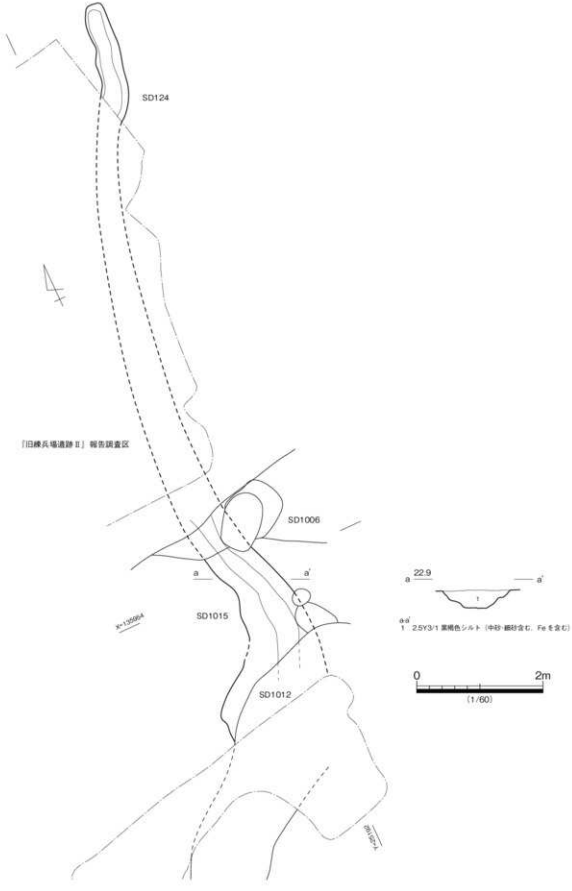

SD124
『旧練兵場遺跡Ⅱ』報告調査区
SD1006
a
a'
SD1015
X=125664
SD1012
Y=25194
a 22.9 a'
1
a-a'
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト（中砂・細砂含む，Feを含む）
0
2m
(1/60)

図76 SD1015

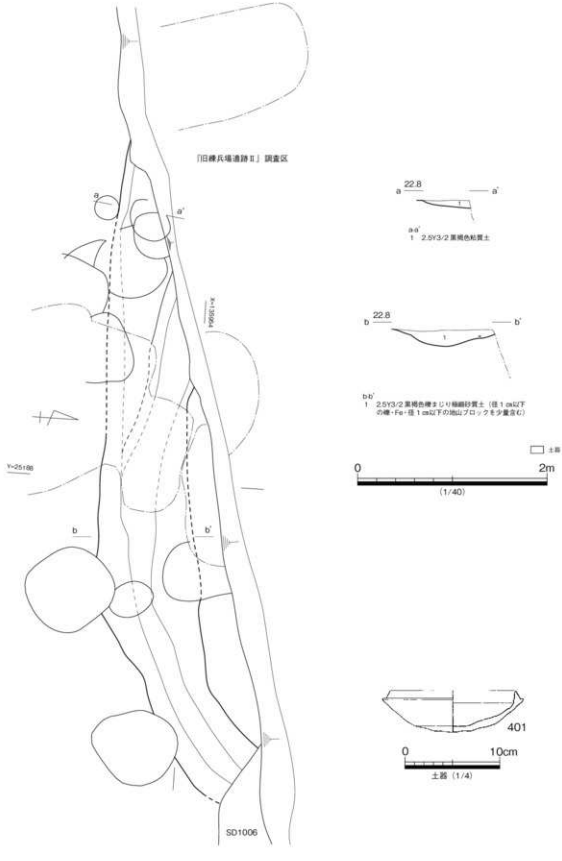

『旧練兵場遺跡Ⅱ』調査区
a
a'
X=139984
Y=25186
b
b'
SD1006
22.8
a
a'
a-a'
1 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
22.8
b
b'
b-b'
1 2.5Y3/2 黒褐色礫まじり極細砂質土（径1 cm以下の礫・Fe・径1 cm以下の地山ブロックを少量含む）
土器
0
2m
(1/40)
401
0
10cm
土器（1/4）

図 77　SD1016

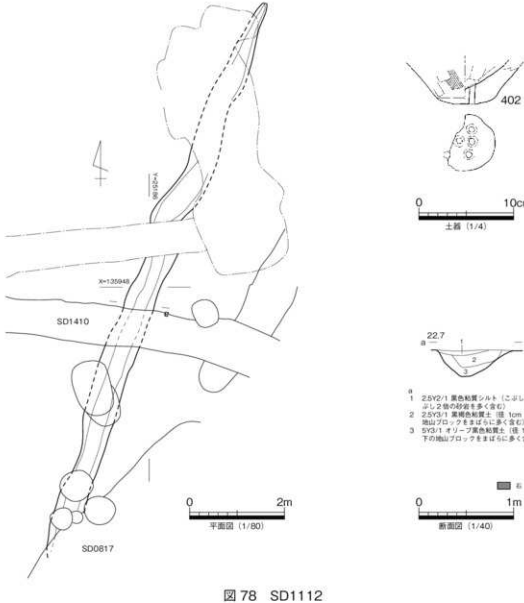


図 78　SD1112

えられることから、SD1012 も同時期のものと考えられる。

SD1015（図 76）

7-10 区北西部第 3 面（SR01 中層上面）で検出された溝である。調査時の遺構名は SD15 である。北端は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区である。この付近には攪乱があり、大きく削平されているが、その北方には SD124 があり、SD1015 はこの溝に連続するものと考えられる。また、7-10 区の北端では 7 世紀の溝 SD1006、10 世紀の掘立柱建物 SB44 の柱穴 SP117 と重複し、削平される。南部は 7 世紀の溝 SD1012 と重複し、削平される。これらの遺構は SD1015 よりも新しい。SD1015 は 7-10 区では検出長 3.3 m、溝幅 0.7 ～ 1.0 m 前後、深さ 0.3 m である。断面形は皿状で、埋土は黒褐色シルトである。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。図化していないが、陶邑編年 TK217 型式の須恵器高杯脚部片が出土していることから、SD1015 は 7 世紀のものと考えられる。

SD1016（図 77）

7-10 区北西部から 7-11 区北東部第 3 面（SR01 中層上面）で検出された溝である。調査時の遺構名は

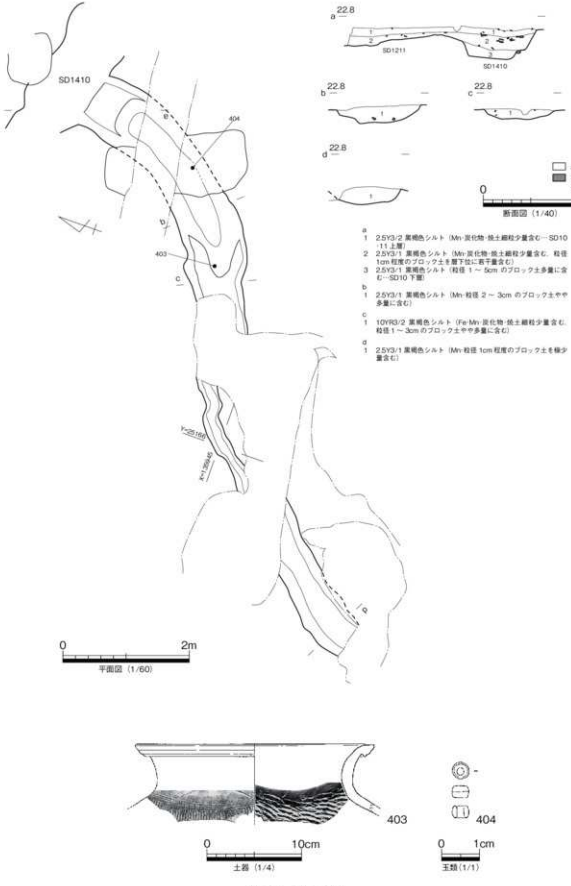

SD1410
404
403
a
b
c
d
22.8
SD1211
SD1410
土器
石
0
1m
断面図（1/40）
a
1 2.5Y3/2 黒褐色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量含む…SD10・11上層）
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量含む，粒径1cm程度のブロック土を層下位に若干量含む）
3 2.5Y3/1 黒褐色シルト（粒径1～5cmのブロック土多量に含む…SD10下層）
b
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト（Mn・粒径2～3cmのブロック土やや多量に含む）
c
1 10YR3/2 黒褐色シルト（Fe・Mn・炭化物・焼土細粒少量含む，粒径1～3cmのブロック土やや多量に含む）
d
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト（Mn・粒径1cm程度のブロック土を極少量含む）
0
2m
平面図（1/60）
403
0
10cm
土器（1/4）
404
0
1cm
玉類（1/1）

図 79　SD1211

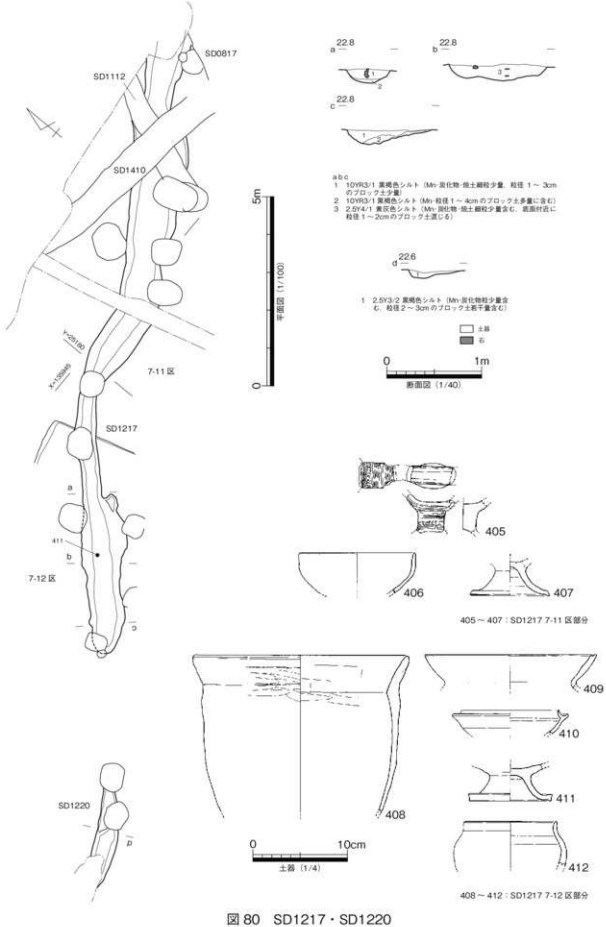


図 80　SD1217・SD1220

7-10 区では SD16、7-11 区では SD08 である。SD1016 は北東から北西に向かって円弧を描く。北東端は 7 世紀の溝 SD1006 と重複し、削平される。また、北西端は 10 世紀の掘立柱建物 SB44 の柱穴 SP99 と重複し削平される。また、北西端は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区であるが、この付近は攪乱されており、連続する遺構は検出されていない。SD1016 は幅 0.6 ～ 1.0 m で、断面形は浅い皿状で、深さ 0.1 ～ 0.2 m である。遺物は整理箱半分程度出土した。401 は須恵器杯である。出土遺物から SD1016 は 7 世紀のものと考えられる。

SD1112（図 78）

7-11 区第 3 面（SR01 中層上面）で検出された溝である。調査時の遺構名は SD12 である。南南西から北北東（N20° E）に向かう。溝の中央部は古代の溝 SD1410 や攪乱によって削平される。また、南端は 7 世紀の溝 SD0817 と重複する。最終埋没は SD0817 が新しい。SD1112 の検出長は 12.5 m、溝幅 0.5 ～ 0.7 m、断面形は半円形で、深さ 0.35 m である。遺物は土器・須恵器片が整理箱半分程度出土した。いずれも小片で、形態がわかるものは僅かである。SD0817 よりも古いことや遺物の時期から SD1112 は 7 世紀のものと考えられる。

SD1211（図 79）

7-13 区西部から 7-12 区の第 2 面（SR01 中層上面）で検出された溝である。調査時の遺構名は SD11 である。ゆるく蛇行しながら南西から北東に向かう。南西端は攪乱によって大きく削平される。北東は南東から北西にほぼ直線状に走る溝 SD1410 と連続する。土層堆積の検討から両溝は同時期に機能したと考えられる。SD1211 は検出長 10 m、幅 0.3 ～ 1.0 m、深さ 0.2 m である。遺物は整理箱 1 箱程度出土した。403 は須恵器甕、404 は滑石製臼玉である。出土遺物から SD1211 は 7 世紀から 8 世紀のものと考えられる。

SD1217（図 80）

7-12 区の東部から 7-11 区で検出された溝である。調査時の遺構名は 7-12 区では SD17、7-11 区では SD04 である。SD1217 はやや蛇行しながら南西から北東（N45 ～ 60° E）に向かう。SD1217 の北東端は攪乱によって削平されており、付近の溝との連続関係は不明であるが、攪乱坑を挟んで北側にある SD1015 に連続する可能性が高い。途中で 7 世紀から 8 世紀の溝 SD1410、7 世紀の溝 SD1112 と重複し、削平される。これらの溝は SD1217 よりも新しい。SD1217 の検出長は 17 m、幅 0.4 ～ 1.1 m、深さ 0.15 ～ 0.2 m である。遺物は土器・須恵器などが整理箱 1 箱程度出土した。405 ～ 407 は 7-11 区部分、408 ～ 412 は 7-12 区部分から出土した。405 は土製品であるが、種類・用途は不明である。上部は U 字状であるが、U 字の先端は欠損する。U 字の下部には数条のへら描き沈線、半裁竹管文が施される。下部も欠損するため、全体の形状は不明である。施文方法から弥生時代のものと考えられる。406 は須恵器杯、407 は須恵器高杯、408･409 は土師器甕、410 は須恵器杯、411 は須恵器高杯脚部、412 は須恵器壺である。これらの須恵器は陶邑編年 TK217 型式に属することから、SD1217 は 7 世紀のものと考えられる。

SD1220（図 80）

7-12 区で検出された溝である。調査時の遺構名は SD20 である。南西から北東方向、SD1217 の南西端に向かうことから、SD1217 に連続すると考えられる。検出長は 1.7 m、幅 0.6 m、深さ 0.1 m である。遺物は土器・須恵器片が少量出土しただけである。SD1220 は SD1217 と同時期で、7 世紀のものと考えられる。

SD1410（図 81・82）

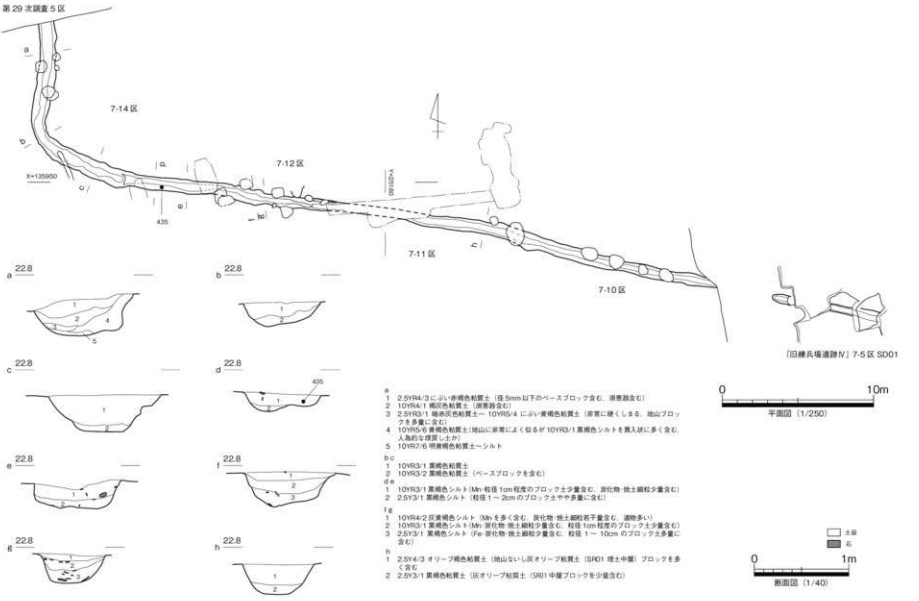

第29次調査5区
7-14区
7-12区
7-11区
7-10区
X=135950
Y=20180
435
22.8
a
1 2.5YR4/3 にぶい赤褐色粘質土（径5mm以下のベースブロック含む、須恵器含む）
2 10YR4/1 褐灰色粘質土（須恵器含む）
3 2.5YR3/1 暗赤灰色粘質土～10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（炭常に硬くしまる、地山ブロックを多量に含む）
4 10YR5/6 黄褐色粘質土（地山に炭常によく似るが10YR3/1黒褐色シルトを斑入状に多く含む、人為的な埋戻しか）
5 10YR7/6 明黄褐色粘質土～シルト
b c
1 10YR3/1 黒褐色粘質土
2 10YR3/2 黒褐色粘質土（ベースブロックを含む）
d e
1 10YR3/1 黒褐色シルト（Mn 粒径1cm程度のブロック土少量含む、炭化物・焼土細粒少量含む）
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト（粒径1～2cmのブロック土中や多量に含む）
f g
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト（Mn を多く含む、炭化物・焼土細粒若干量含む、遺物多い）
2 10YR3/1 黒褐色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量含む、粒径1cm程度のブロック土少量含む）
3 2.5Y3/1 黒褐色シルト（Fe・炭化物・焼土細粒少量含む、粒径1～10cmのブロック土多量に含む）
h
1 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土（地山ないし炭オリーブ粘質土（SR01 埋土中層）ブロックを多く含む）
2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（炭オリーブ粘質土（SR01 中層ブロックを少量含む）
0 10m
平面図（1/250）
「旧練兵場遺跡Ⅳ」7-5区 SD01
土器
石
0 1m
断面図（1/40）

図81　SD1410（1）

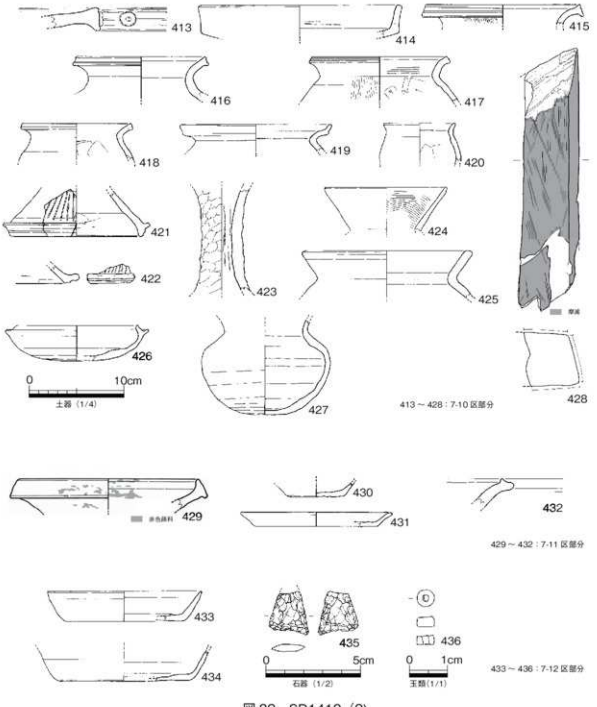

413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
0
10cm
土器（1/4）
413～428：7-10 区部分
429
430
431
432
429～432：7-11 区部分
433
434
435
436
0
5cm
石器（1/2）
0
1cm
玉類(1/1)
433～436：7-12 区部分

図82　SD1410（2）

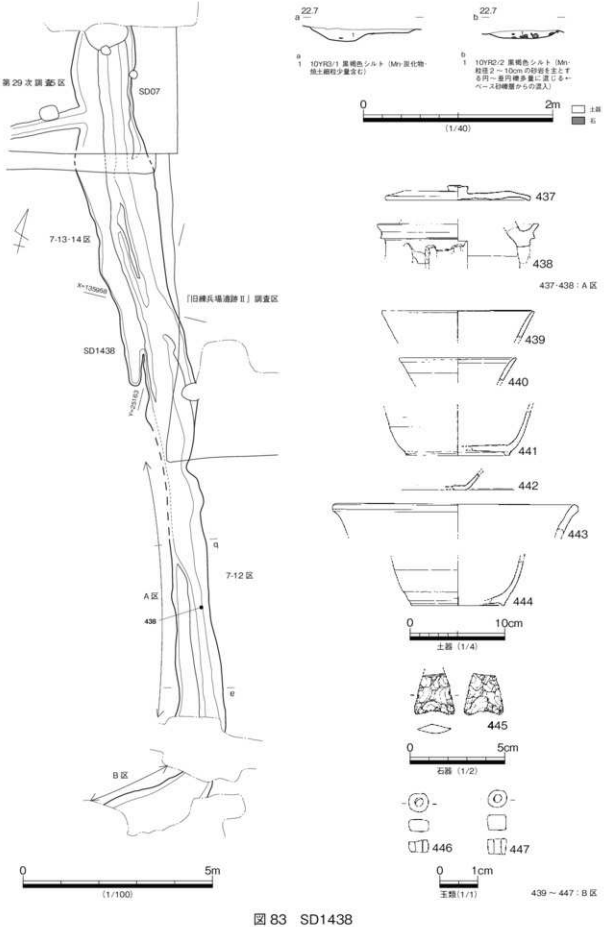

第29次調査5区
SD07
7-13-14区
「旧練兵場遺跡Ⅱ」調査区
SD1438
7-12区
A区
B区
a
b
22.7
1 10YR3/1 黒褐色シルト（Mn・炭化物・焼土細粒少量含む）
1 10YR2/2 黒褐色シルト（Mn・粒径2～10cmの砂岩を主とする円～亜円礫多量に混じる←ベース砂礫層からの流入）
0 2m
(1/40)
土器
石
437
438
437・438：A区
439
440
441
442
443
444
0 10cm
土器（1/4）
445
0 5cm
石器（1/2）
446
447
0 1cm
玉類(1/1)
439～447：B区
0 5m
(1/100)

図83　SD1438

7-10区・7-11区・7-12区で検出された溝である。南東から北西（W10° N）に向かい、7-14 区で北に向かう。調査時の遺構名は 7-10 区では SD07、7-11 区では SD05、7-12 区では SD10 である。SD1410 の東部は『旧練兵場遺跡Ⅳ』で報告された 7-5 区であるが、7-5 区の西部には大きな攪乱坑がある。SD1410 はこの攪乱坑の東にある 7-5 区 SD01 に連続すると考えられる。SD1410 は『旧練兵場遺跡Ⅴ』で報告された 7-14 区に入ると南から北方向（N-S）に走り、第 29 次調査 5 区に入る。なお、『旧練兵場遺跡Ⅴ』での報告遺構名も SD1410 である。7-10 区・7-11 区・7-12 区での検出長は 33 m、断面形はややいびつなU字形で、溝幅 0.8 ～ 1.2 m、深さ 0.2 ～ 0.4 mである。埋土は黒褐色粘質土を中心とし、砂の堆積はみられない。遺物は土器・須恵器などが多量に出土した。413 ～ 428 は 7-10 区部分から出土した。413 ～ 422 は弥生土器、423 は土師器高杯、424 は土師器壺、425 は土師器甕、426 は須恵器杯、427 は須恵器甕である。429 ～ 432 は 7-11 区部分から出土した。429 は弥生土器壺で赤彩が施される。430 は土師器杯、431 は須恵器皿、432 は須恵器甕の口縁部である。433 ～ 436 は 7-12 区部分から出土した。433・434 は須恵器杯、436 は滑石製の臼玉である。426 は 7 世紀中葉、433・434 は 8 世紀中葉、430・431 は 9 世紀から 10 世紀に属する。SD1410 は付近の条里地割とは異なる方向で、8 世紀の掘立柱建物 SB06・SB07 とほぼ同方向である。このように SD1410 からも 8 世紀の遺物は出土しているが、9 世紀から 10 世紀の遺物も出土している。だが、この付近の 9 世紀から 10 世紀の掘立柱建物や溝はいずれも条里地割と同じ方向を向いていることから、SD1410 から出土した 9 世紀から 10 世紀の遺物は混入した可能性が高い。これらのことから、SD1410 は 8 世紀のものと考えられる。

SD1438（図 83）

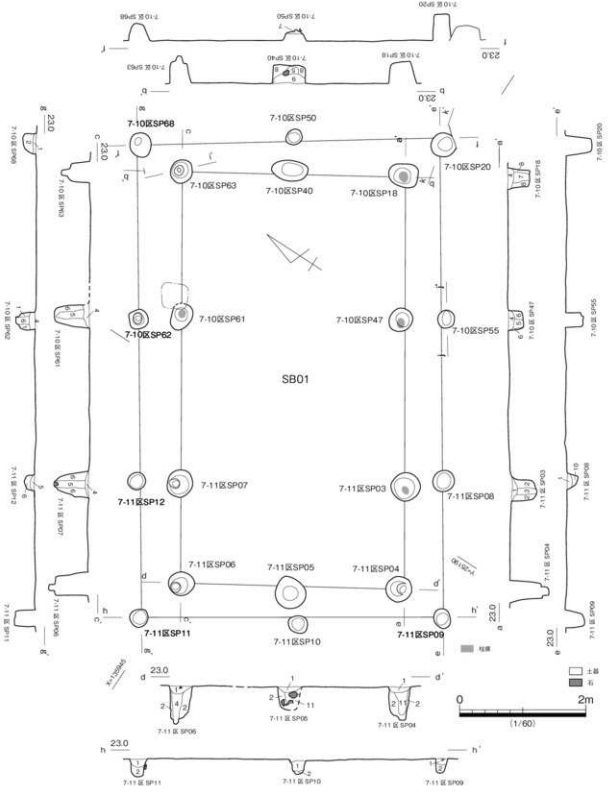
7-12 区・7-13 区・7-14 区から第 29 次調査 5 区にかけて検出された溝である。調査時の遺構名は 7-12 区では SD22 であるが、『旧練兵場遺跡Ⅴ』で SD1438 の遺構名で報告したので、ここでも同名を使用する。SD1438 は第 28 次調査の 7-12 ～ 14 区では 14 m検出されており、溝幅 1.0 ～ 1.7 m、深さ 0.1 ～ 0.15 mである。南東から北西（N20° W）に向かう。付近の条里地割と同方向である。なお、北端は第 29 次調査 5 区に連続するが、この部分は第 2 節で報告する。遺物は土器・須恵器が少量出土した。437・438 は北部のA区、439 ～ 447 は南部のB区から出土した。437 は須恵器蓋、438 は須恵器円面硯、439 ～ 442 は須恵器杯、443 は須恵器甕の口縁部、444 は須恵器壺底部、446・447 は滑石製の臼玉である。437・438 は 8 世紀、439 ～ 441 は 8 世紀中葉、442 は 9 世紀前半に属する。これらの遺物から SD1438 は 8 世紀中葉から 9 世紀前半のものと考えられる。

4．中世

掘立柱建物

SB01（図 84・85）

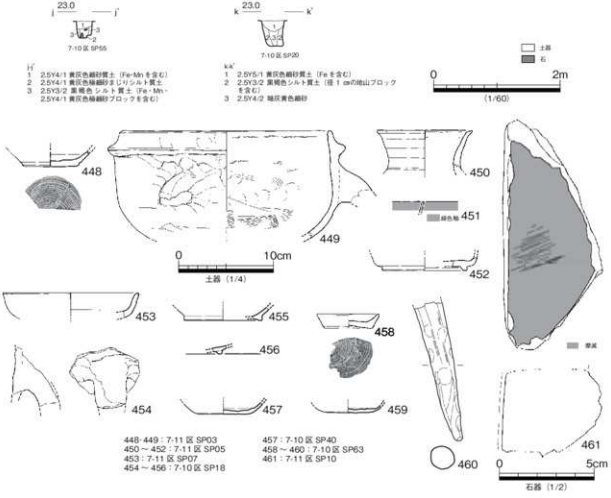
7-10 区から 7-11 区の東端の第 1 面（SR01 上層上面）で検出された掘立柱建物である。桁行 3 間（6.6 m）、梁間 2 間（3.3 ～ 3.6 m）で、四周には庇が付く。桁行の方向は E32° N である。庇を含めると、長軸 7.5 ～ 7.6 m、短軸 4.8 ～ 4.9 mである。建物の柱穴はいずれも円形で、径 0.4 ～ 0.5 m、深さ 0.3 ～ 0.5 mである。庇の柱穴も円形で、径 0.3 m前後である。7-10 区 SP20 だけは深さ 0.5 mと深いが、その他の柱穴は深さ 0.2 ～ 0.3 mで、建物本体の柱穴よりはやや小ぶりで、浅い。柱穴の埋土は灰白色～灰色シルトである。各柱穴からは土器片などが少量出土した。448 は土師質土器杯、449 は土師質土器羽釜、7-11 区 SP05 から出土した 450 は須恵器壺口縁部、451 は陶器の口縁部、452 は須恵器杯の底部、7-11 区 SP07 から出



a-a' b-b' c-c' d-d' e-e' f-f' g-g' h-h'
1 7.5Y7/1 灰白色粘質シルト（鉄分の沈着少量）
2 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（7.5Y6/1 灰色粘質シルトブロックを少量含む）
3 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト（2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む） 柱痕
4 2.5Y4/1 黄灰色細砂質土（Fe・Mn を含む）
5 2.5Y4/1 黄灰色極細砂まじりシルト質土（柱痕）
6 2.5Y4/1 黄灰色シルト質土（2.5Y3/2 黒褐色シルト質土ブロックを含む）
7 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
8 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土（地山ブロックを含む、Fe をわずかに含む）
9 2.5Y5/1 黄灰色細砂質土（Fe・Mn をわずかに含む、炭化物を極めてわずかに含む）
10 10YR4/1 褐灰色粘質土（1 層ブロックを少量含む）
11 7.5Y6/1 灰色粘質シルト（7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質ブロックをごく少量含む） 柱痕

i-i'
1 2.5Y4/1 黄灰色極細砂質土（Fe・Mn 含む）
2 2.5Y4/1 黄灰色極細砂質土（1 層より色調やや暗い）
3 2.5Y4/1 黄灰色シルト質土
4 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質土

図 84　SB01



SB01 出土遺物

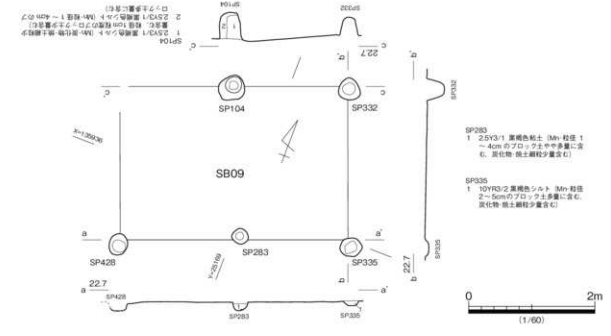


図85　SB01・SB09

土した 453 は土師質土器杯、7-10 区 SP18 から出土した 454 と 7-10 区 SP63 から出土した 460 は土師質土器羽釜の脚部、7-10 区 SP18 から出土した 455 は須恵器の底部、456 は土師質土器椀の底部、457 は土師質土器小皿である。7-10 区 SP63 から出土した 458・459 は土師質土器小皿である。7-11 区 SP10 から出土した 461 は安山岩製の砥石である。451 は緑色釉のかかった陶器片であるが、近世陶磁器の可能性が高い。449 は 14 世紀、448 は 13 世紀に属する。小片の 451 は混入であろう。古代の遺物も含むが、13 世紀から 14 世紀の遺物がみられることから、SB01 は 14 世紀のものと考えられる。

SB09（図 85）

7-12 区の南西端から 7-13 区の南東端にかけて検出された掘立柱建物である。古墳時代後期の溝 SD34 と重複するが、SD34 よりも新しい。北西隅に当たる柱穴は未検出である。桁行 2 間（3.7 m）、梁間 1 間（2.5 m）、桁行の方向は E30° N である。柱穴の平面形は円形で、径 0.25 ～ 0.4 m、深さ 0.1 ～ 0.4 m である。柱穴の埋土は黒褐色シルトを中心とするもので、炭化物・焼土を少量含む。各柱穴からは少量の土器・須恵器片が出土した。いずれも小片である。柱穴の規模が小さいことや、建物の方向が条里地割とほぼ同じであることから、SB09 は中世のものと考えられる。

SB10（図 86）

7-10 区で検出された掘立柱建物である。14 世紀の掘立柱建物 SB01、13 世紀の掘立柱建物 SB11、8 世紀の掘立柱建物 SB03 と重複する。梁間は 1 間（2.4 m）、桁行は 4.5 m で西側の桁行は 2 間、東側の桁行は 1 間である。建物の方向は N31° W である。柱穴の平面形は円形で、径 0.3 ～ 0.6 m、深さ 0.1 ～ 0.4 m である。柱穴の埋土は黄灰色シルトを中心とするもので、各柱穴からは少量の土器・須恵器片が出土した。SP44 から 462・463、SP45 から 464・465、SP54 から 466・467 が出土した。462 ～ 467 はいずれも須恵器杯である。467 は 12 世紀から 13 世紀に属することから、SB10 は 12 世紀から 13 世紀のものと考えられる。

SB11（図 87）

7-10 区ほぼ中央で検出された掘立柱建物である。中世の掘立柱建物 SB10・SB01 と重複する。SB11 は桁行 3 間（6.5 m）、梁間 1 間（2.7 m）で、桁行の方向は N65° E である。北西隅に当たる SP147 は中世の柱穴 SP48 と重複し、削平される。SP166・SP23 の平面形は長楕円形、その他の柱穴は円形である。SP166・SP23 は 2 個の柱穴が重複していた可能性が高い。その他の円形の柱穴は径 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m である。各柱穴からは整理箱 1 箱の遺物が出土した。大部分は土器小片である。SP25 から出土した 468 と SP155 から出土した 470 は土師質土器杯、SP147 から出土した 469 は須恵器杯である。468 は 12 世紀から 13 世紀、469 は 9 世紀から 10 世紀、470 は 13 世紀前半に属する。これらの遺物から SB11 は 13 世紀のものと考えられる。

SB12（図 88）

『旧練兵場遺跡Ⅴ』で報告された 7-7 区北端から 7-11 区南部の第 1 面（SR01 上層上面）にかけて検出された掘立柱建物である。桁行 2 間（3.9 m）、梁間 1 間（2.4 m）で、桁行の方向は N35° W である。柱穴の平面形はいずれも円形で、径 0.3 ～ 0.6 m、深さ 0.05 ～ 0.3 m である。各柱穴からは土器・須恵器片が少量出土した。7-11 区 SP14 から出土した 471 は土師質土器杯、472 は土師質土器羽釜の脚部、473・474 は須恵器杯、475 は須恵器蓋、477 は弥生土器壺の口縁部、7-11 区 SP19 から出土した 476 は須恵器杯、7-11 区 SP24 から出土した 478 は土師質土器土鍋の体部、7-7 区 SP130 から出土した 479 は土師器高杯の脚部である。479 の内外面には赤彩が施される。7-11 区 SK01 から出土した土師器焼成失

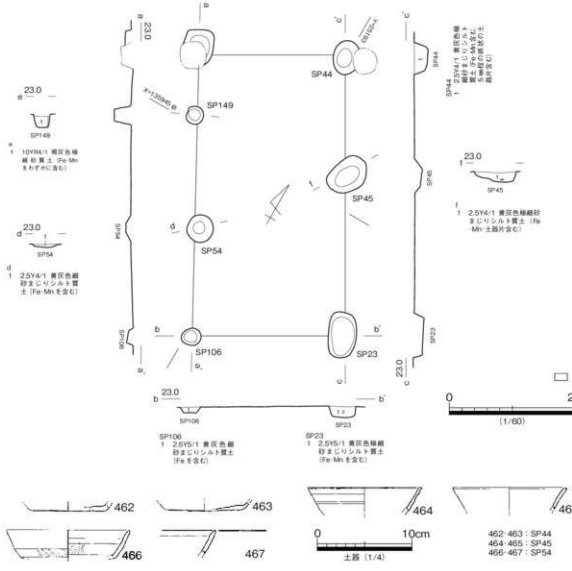


図86　SB10

敗品の高杯と類似する。13世紀以降の土師質土器羽釜片が出土していることや、埋土の色調・土質からSB12は中世のものと考えられる。

SB17（図89）

7-11区の北部第1面（SR01上層上面）で検出された掘立柱建物である。南側の桁行の柱穴の一部は攪乱によって削平されており、未検出である。SB17は桁行3間（10.5 m）、梁間1間（2.7 m）で、桁行の方向はN60° Eである。柱穴の平面形は円形で、径0.3～0.6 m、深さ0.05～0.3 mである。各柱穴からは土器・黒色土器・須恵器小片が少量出土した。SP57から出土した480は黒色土器椀、SP65から出土した481は土師質土器杯、SP69から出土した482は土師質土器土鍋の口縁部である。480は外面には回転ヘラミガキ、内面には分割ヘラミガキを施し、11世紀から12世紀前半のものである。481は13世紀から14世紀、482は14世紀から15世紀に属する。これらの遺物からSB17は14世紀から15世紀のものと考えられる。

SB20（図90）

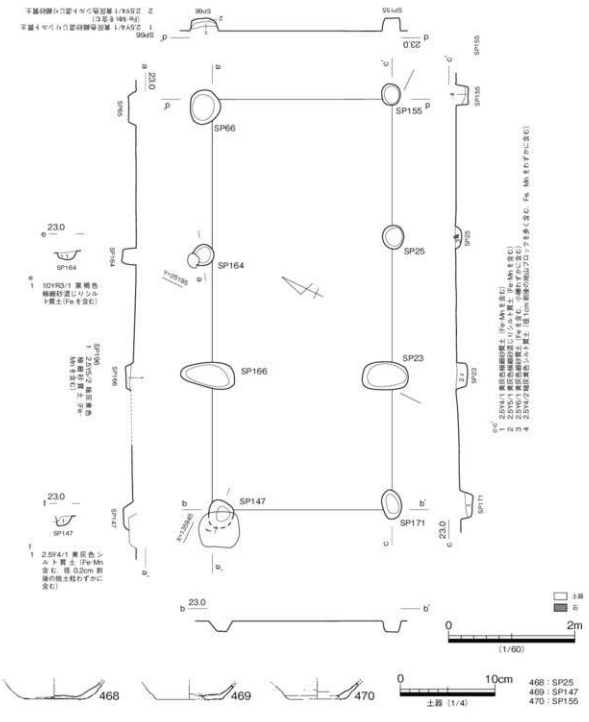

SP66
SP155
SP25
SP164
SP23
SP166
SP147
SP171
23.0
0
2m
(1/60)
468
469
470
0
10cm
土器 (1/4)
468 : SP25
469 : SP147
470 : SP155

図87　SB11

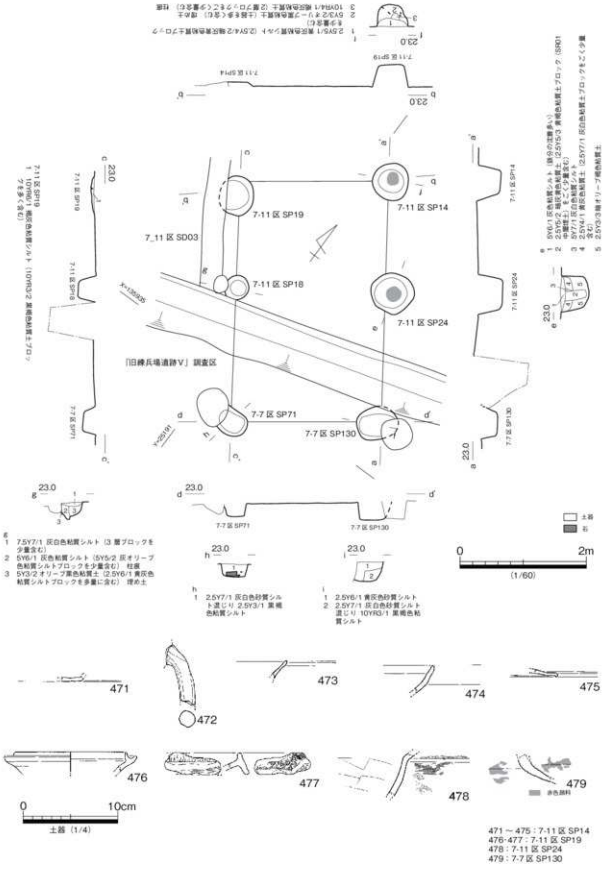

7_11 区 SD03
7-11 区 SP19
7-11 区 SP14
7-11 区 SP18
7-11 区 SP24
「旧練兵場遺跡V」調査区
7-7 区 SP71
7-7 区 SP130
23.0
土器
石
0
2m
(1/60)
471
472
473
474
475
476
477
478
479
0
10cm
土器 (1/4)
471～475：7-11 区 SP14
476･477：7-11 区 SP19
478：7-11 区 SP24
479：7-7 区 SP130

図88 SB12

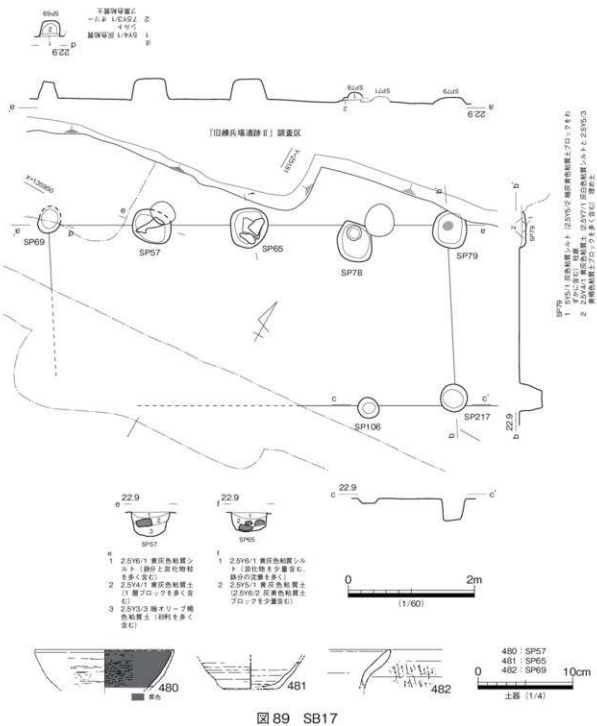

「旧練兵場遺跡Ⅱ」調査区
SP69
SP57
SP65
SP78
SP79
SP106
SP217
22.9
SP79
1 5YR/1 赤色粘質シルト（2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロックをわずか含む）
2 2.5YR/1 黒色粘質土（2.5Y7/1 灰色粘質シルトと2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロックを多く含む）硬化土
SP57
1 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト（鉄分と炭化物粒を多く含む）
2 2.5Y4/1 黒灰色粘質土（1 層ブロックを多く含む）
3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土（砂利を多く含む）
SP65
1 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト（炭化物を少量含む，鉄分の流入を多く）
2 2.5Y5/1 黄灰色粘質土（2.5Y6/2 灰黄色粘質土ブロックを少量含む）
0 2m
(1/60)
480
481
482
黒色
480：SP57
481：SP65
482：SP69
0 10cm
土器（1/4）

図89 SB17

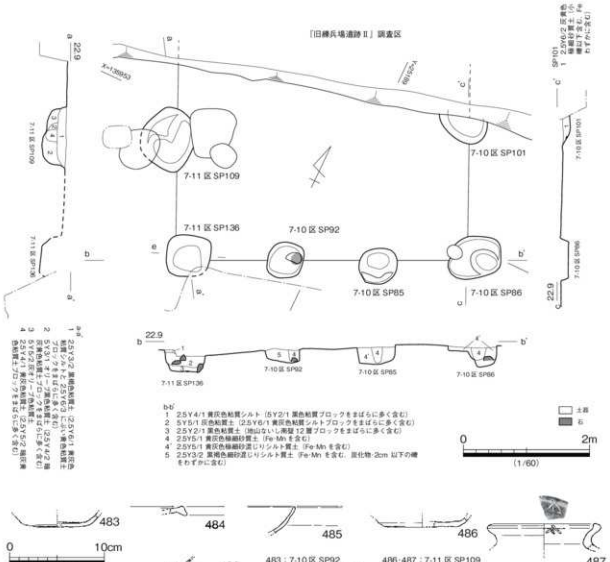


図 90　SB20

7-10 区の北部から 7-11 区の北部第 1 面（SR01 上層上面）で検出された掘立柱建物である。北端は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区であるが、この付近は大きく攪乱されており、北側の桁行は不明である。桁行 3 間（4.8 m）、梁間 2 間（3.0 m 以上）で、桁行の方向は N65° E である。柱穴の平面形はほぼ円形で、径 0.6 ～ 1.0 m、深さ 0.1 ～ 0. 4 m である。各柱穴からは土器・須恵器片が少量出土した。7-10 区 SP92 から出土した 483 と 7-11 区 SP139 から出土した 488 は土師質土器杯、7-10 区 SP101 から出土した 484 は弥生土器壺の口縁部、485 は須恵器椀、7-11 区 SP109 から出土した 486 は須恵器杯、487 は須恵器壺である。485 は外面にはヘラミガキがなく、灰白色で、焼成不良である。十瓶山付近で生産された須恵器で、13 世紀のものである。483 は 9 世紀から 10 世紀、486 は 9 世紀、488 は 12 世紀から 13 世紀に属する。柱穴の大きさが古代の掘立柱建物と類似しており、9 世紀から 10 世紀の遺物を含むが、13 世紀の須恵器や土師質土器片がみられることから、SB20 は中世のものと考えられる。

土坑

7-10 区 SK01（図 91）

7-10 区ほぼ中央第 1 面（SR01 上層上面）で検出された土坑である。平面形はいびつな円形で、長軸 1.8 m、短軸 1.6 mである。底面は平坦ではなく、凸凹しており、断面形はややいびつな浅い皿状で、最深部の深さは 0.2 mである。埋土は黄灰色細砂質土の単一層である。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。499・500 は土師質土器椀、501・502 は土師質土器羽釜、503 は土師質土器土鍋である。これらの遺物から SK01 は 14 世紀のものと考えられる。

7-12 区 SK07（図 92）

7-12 区北東部第 1 面（SR01 上層上面）で検出された土坑または柱穴である。遺構の北西部は近世の土坑 SK06、遺構の北部は中世の土坑 SX02 と重複し、削平される。いずれも SK07 よりも新しい。平面形はややいびつな楕円形で、長軸は 0.8 m以上、短軸は 0.7 m以上である。埋土は灰白色シルトの単一層である。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。いずれも小破片で、詳細な時期は不明である。埋土の色調・土質から SK07 は中世のものと考えられる。

7-12 区 SK08（図 92）

7-12 区北部第 1 面（SR01 上層上面）で検出された土坑である。遺構の北部は 10 世紀の掘立柱建物 SB23 の柱穴 SP347、奈良時代の溝 SD1410 と重複する。いずれも SK08 よりも古い。また、中世の柱穴 SP48 と重複し、削平される。SP48 のほうが新しい。また、遺構の中央には径 0.3 mの攪乱坑があり、削平される。SK08 の平面形はややいびつな方形で、長軸 1.2 m、短軸 0.8 m、深さ 0.1 mである。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。いずれも小破片で、詳細な時期は不明である。埋土の色調・土質から SK08 は中世のものと考えられる。

7-12 区 SX01（図 93）

7-12 区ほぼ中央部第 1 面（SR01 上層上面）で検出された土坑である。平面形はいびつな長方形で、長軸 0.65 m、短軸 0.5 mである。断面形は浅い皿状で、深さ 0.1 mである。遺物は土器片が少量出土した。504 は弥生土器壺である。弥生土器が出土しているが、第 1 面で検出されたことや埋土の色調・土質から SX01 は中世のものと考えられる。

7-12 区 SX02（図 94）

7-12 区北東部第 1 面（SR01 上層上面）で検出された土坑である。遺構の北部は攪乱によって削平される。また、中世の土坑 SK07 と重複する。SK06・SK07 よりも SX02 のほうが新しい。SX02 の平面形はややいびつな長楕円形で、長軸 2.1 m、短軸 1.6 mである。断面形は三角形で、最深部の深さは 0.6 mである。埋土には多量の円礫が含まれており、土器・須恵器・平瓦小片などが少量出土した。505 は砂岩製の砥石である。第 1 面で検出されたことや、埋土の土質・色調から SX02 は中世のものと考えられる。

溝

SD0702・SD1103（図 95）

7-7 区・7-11 区の西部第 1 面（SR01 上層上面）で検出された溝である。SD0702 は 7-11 区での調査時の遺構名は SD02 であるが、『旧練兵場遺跡Ⅴ』で 7-7 区部分を SD0702 と報告したため、ここでも同名を使用する。東側の溝 SD1003 の調査時の遺構名は SD03 である。SD03 も 7-7 区部分に連続するが、7-7 区部分では浅い落ち込みとなる。これらの 2 条の溝は平行して南東から北西（N 30° W）に向かう。SD0702・SD1103 ともに幅 0.3 ～ 0.7 m、深さ 0.1 mで、灰白色から灰色の粘質シルトが堆積する。両

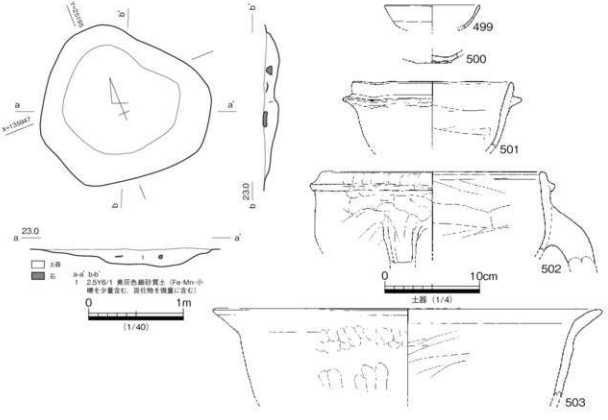


図91　7-10区 SK01

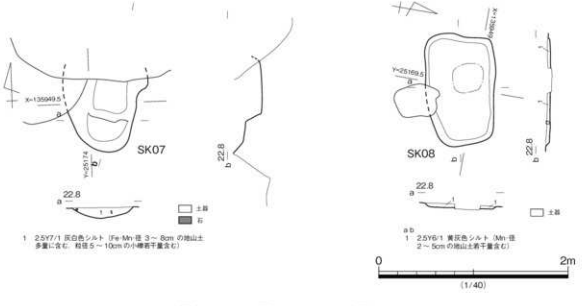


図92　7-12区 SK07・7-12区 SK08

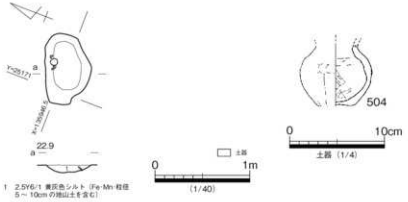


図93　7-12区 SX01

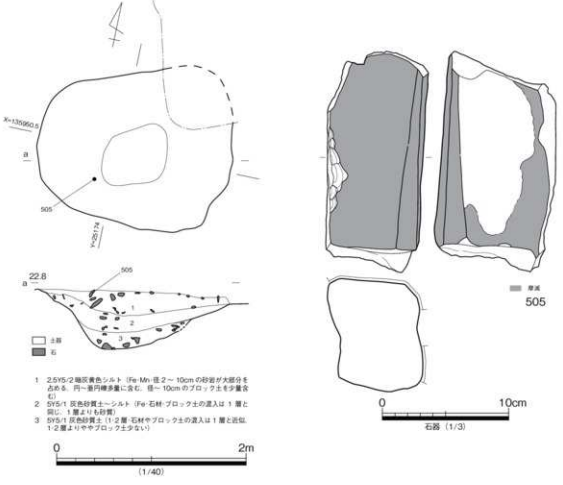


図94　7-12区 SX02

溝間の幅は1.0m前後で、両溝間には黄灰色粘質シルトブロックを少量含む黒褐色粘質シルトが薄く堆積する。遺物は少量で、土器・須恵器片が少量出土した。506は土師質土器杯、507は土師質土器甕、508･509は土師質土器羽釜、510は弥生土器ミニチュア甕である。509は13世紀以降に属することから、SD0702・SD1103は13世紀以降のものと考えられる。

SD1001（図96）

7-10区東部第1面（SR01上層上面）で検出された溝である。南東から北西方向（N30° W）に向かう。北部は柱穴SP41と重複し、削平される。また、中央部では13世紀の掘立柱建物SB11の柱穴SP66、中世の溝SD1002と重複するが、これらの遺構よりもSD1001のほうが新しい。中央部で溝は途切れるが、検出長6.3m、幅1.8m、深さ0.5mである。遺物は土器・須恵器細片が少量出土した。第1面で検出されたことや、埋土の色調・土質からSD1001は中世のものと考えられる。

SD1002（図96）

7-10区東部第1面（SR01上層上面）で検出された溝である。東側にある溝SD1001とほぼ平行し、南東から北西方向（N30° W）に向かう。北部は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区に連続するが、この部分は撹乱によって大きく削平されており、溝SD1002の北端は検出されていない。南部は幅広になり、東部に屈曲する。検出長5.0m、幅0.1～0.6m、深さ0.05mである。断面形は浅い皿状で、最深部の深さは0.1mである。遺物は土器・須恵器・緑釉陶器細片などが少量出土した。第1面で検出されたことや、埋土の色調・土質からSD1002は中世のものと考えられる。

5．近世

土坑

7-12区SK04（図97）

7-12区の東部第1面（SR01上層上面）で検出された土坑である。平面形はややいびつな台形で、長軸0.9m、短軸0.7mである。断面形は逆台形、底面は平坦で深さ0.3mである。遺物は土器・須恵器片などが整理箱半分程度出土した。遺物の中に近世陶磁器片を含むことから、SK04は近世のものと考えられる。

7-12区SK06（図97）

7-12区北東部で検出された土坑である。平面形は円形または楕円形で、径0.6m前後である。断面形は浅い皿状で、最深部の深さは0.25mである。遺物は土器・陶磁器細片が少量出土した。出土遺物から近世のものと考えられる。

溝

SD1205（図97）

7-12区北部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD05である。南西から北東（E20° N）に向かう。溝の両端は撹乱によって削平される。検出長4.4m、幅0.4～0.9m、断面形は浅い皿状で、深さ0.05～0.1mである。遺物は土器・陶磁器片が少量出土した。出土遺物から近世のものと考えられる。

6．柱穴・小穴出土遺物（図98～100）

柱穴･小穴からは少量ずつではあるが、遺物が出土した。ここではこれらの遺物を遺構ごとに掲載した。図98は7-10区の柱穴・小穴から出土した遺物である。511・512・516・518・526・533・539は須恵器杯、517・519・532・537・546・550は須恵器蓋、527は須恵器皿、545・547は須恵器椀、535は須恵器

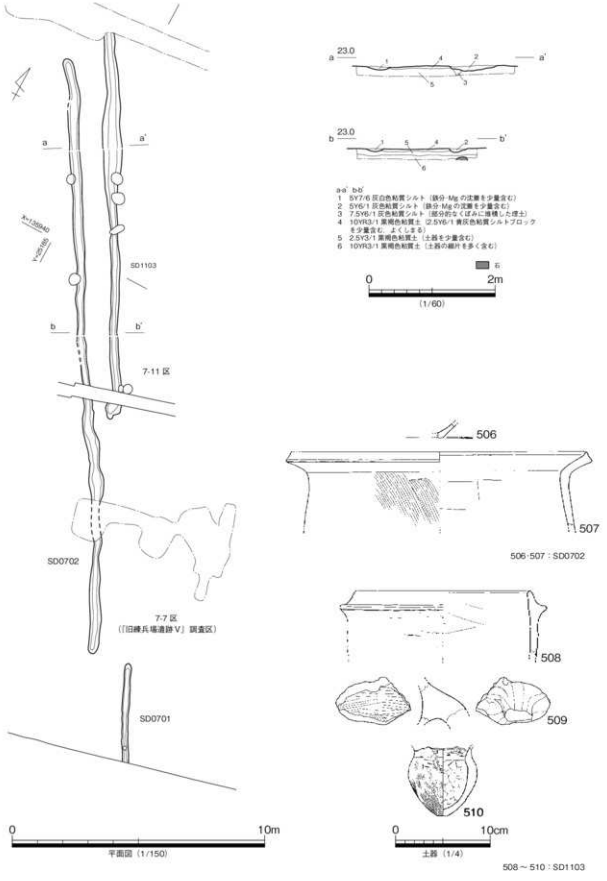


図 95　SD0702・SD1103

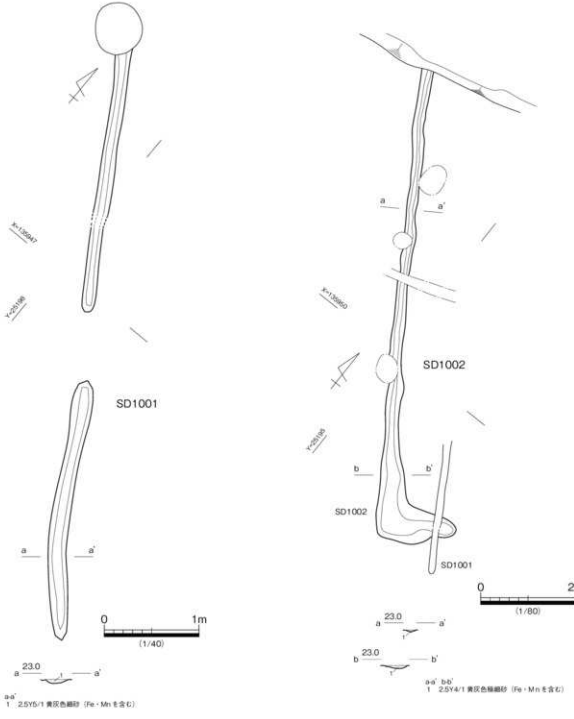
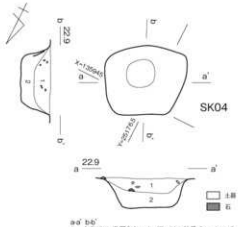
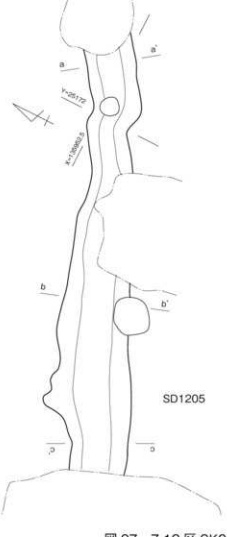


図 96　SD1001・SD1002

鉢、538 は須恵器甕である。522 は緑釉陶器皿で 10 世紀前半、529 は黒色土器椀で 10 世紀、528・534 は土師質土器椀で 10 世紀前半に属する。520・531・541 は土師器杯で、赤彩が施される。7-11 区 SK01 から出土した土器と同形態のものがあることから、8 世紀末から 9 世紀初頭のものと考えられる。540 は弥生土器壺、548 は弥生土器ミニチュア台付鉢、549 は弥生土器甕、551 は弥生土器高杯である。543 は平瓦で、凸面には格子目痕がある。514・523 は鉄釘、515 も鉄釘と考えられる。523 の断面形は円形、514・515 の断面形は長方形である。524 は銅鏃である。中央部には稜があり、断面形は菱形である。

図 99 は 7-11 区の柱穴・小穴から出土した遺物である。552 は弥生土器支脚、553・570・583・584・





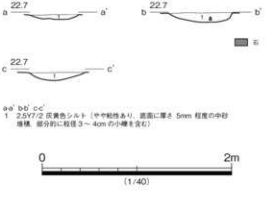


図 97　7-12 区 SK04・7-12 区 SK06・SD1205

585・612・617は須恵器蓋、554は須恵器甕、556・557・559・560・562・565・567・569・572～574・576～578・580・586・589～591・593・613は須恵器杯、581は須恵器皿、563・579は緑釉陶器碗、561・575は土師質土器杯、571は土師器皿、558・596～598・616は弥生土器、599は須恵器鉢、594・604・606は須恵器甕、600・602・605・607・608は土師器杯、614・615は滑石製臼玉、619は安山岩製の砥石である。558は脚部に櫛描沈線文と赤彩が施される。597は器台で、赤色顔料（ベンガラ）が施される。558・597はいずれも弥生時代後期に属し、岡山県備中地方産で、搬入品である。579は口縁部を欠損する。貼り付け高台で、体部外面には筋状のヘラ掘りがみられる。近江産である。

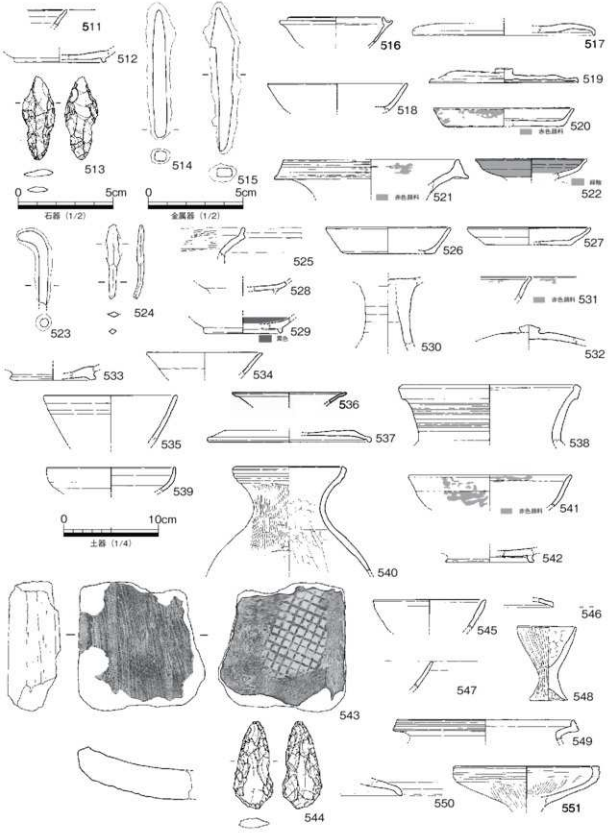
601は7-11区北西部のSP214から出土した軒丸瓦である。7-11区北西部にあるSP214の上面で検出された。SP214から出土した遺物は601のほかには土器小片が少量出土しただけである。601の瓦当の周縁は欠損する。複弁八葉蓮華文で、中房には9個の連子の痕跡があるが、4個は欠損している。周縁には鋸歯文があり、土師質である。

7．遺構に伴わない遺物（図101）

620～629は7-10区、630～635は7-11区、642～651は7-12区から出土した遺物である。620～622は弥生土器壺である。623・624は石鏃、629は管玉である。621は小片で種類不明であるが、外面にはヘラ描きによる弧状の文様がある。623・624は石鏃、625・627は打製石包丁で、石材はサヌカイトである。628は磨製石包丁である。石材は頁岩で、刃部の一部は打ち割られている。630は弥生土器甕、631は弥生土器蓋である。631の外面にはヘラ状工具による列点文がある。632は石鏃、633～637は石包丁である。635は砂岩製で、厚さ2.5cmと分厚い。周縁には敲打によって成形される。刃部は両面からの剥離により作り出される。638・639は楔状石核である。640はスクレイパーの可能性が高い。641はガラス製の小玉である。642は弥生土器壺、643は土師器杯、644は須恵器甕、645～647は緑釉陶器碗である。645・647は削り出し高台である。畿内産で、9世紀に属する。646は有段輪高台である。近江産で10世紀後半に属する。648は軒平瓦で、7-12区で出土した。軒丸瓦（601）が出土した7-11区に西接する調査区である。土師質で、唐草文が施され、上外区には珠文4個、右外区には2個の珠文が残る。善通寺ZN203A（1）に類似する。651は滑石製臼玉である。

652は7-11区南壁9層（図9）から出土した緑釉陶器口縁部片である。南壁9層はSR01最上層とした土層である。653～664は7-11区南壁10層（図9）から出土した遺物である。南壁10層はSR01上層上部に当たる。第7章で詳述しているようにこの層からはイネ属の植物珪酸体が検出されていることから、耕作土の可能性が高い。この層からは弥生土器（653･654）や赤色顔料が塗布された土師器（655～662）が出土した。655～662はいずれも焼成破裂痕がみられ。7-11区SK01から出土した土師器に類似する。おそらく、本来はSK01に伴うものであろう。なお、7-11区SK01は南壁10層の下部に堆積する南壁11層上面で検出された。663は緑釉陶器碗である。

665～673・675は南壁11層で出土した。665～669は弥生土器である。668の外面には櫛状工具による数条の沈線が施される。670は須恵器の把手、671は須恵器壺である。672はサヌカイト製の楔状石核、673は結晶片岩製の石斧である。基部は研磨されているが、刃部には敲打痕がみられる。674も結晶片岩製で、敲石である。両端部に敲打痕がみられる。675は滑石製の臼玉である。



7-10区

511 : SP03	517 : SP59	524 : SP104	529 : SP97	535 : SP144	541 : SP183	548 : SP208
512 : SP04	518～520 : SP70	525 : SP84	530 : SP102	536-537 : SP150	542-543 : SP186	549 : SP219
513-514 : SP21	521 : SP71	526 : SP85	531-532 : SP103	538 : SP151	544 : SP193	550 : SP223
515 : SP23	522 : SP73	527 : SP89	533 : SP117	539 : SP158	545 : SP199	551 : SP230
516 : SP29	523 : SP81	528 : SP95	534 : SP125	540 : SP180	546-547 : SP200	

図 98　柱穴・小穴出土遺物（3）

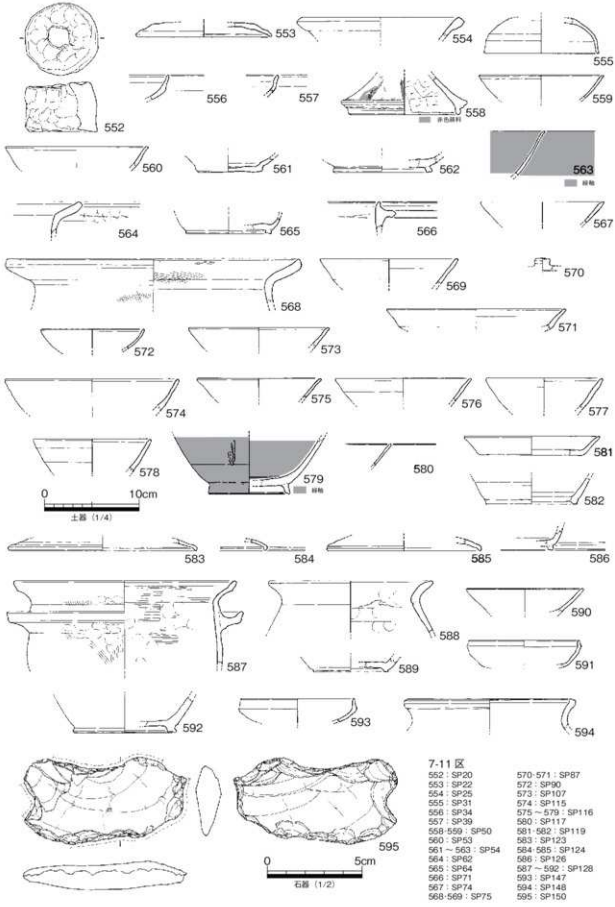
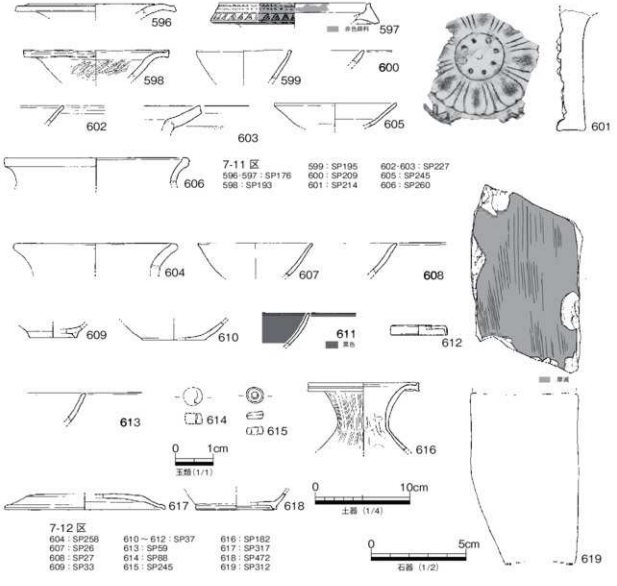


図 99　柱穴・小穴出土遺物（2）



SP214　601 出土状況

図 100　柱穴・小穴出土遺物 (3)

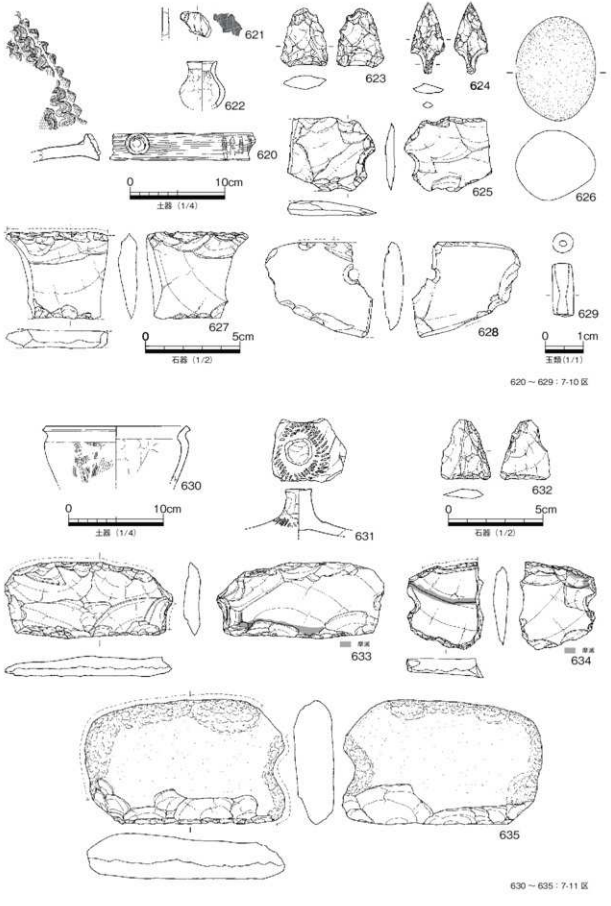


図101　遺構に伴わない遺物（1）

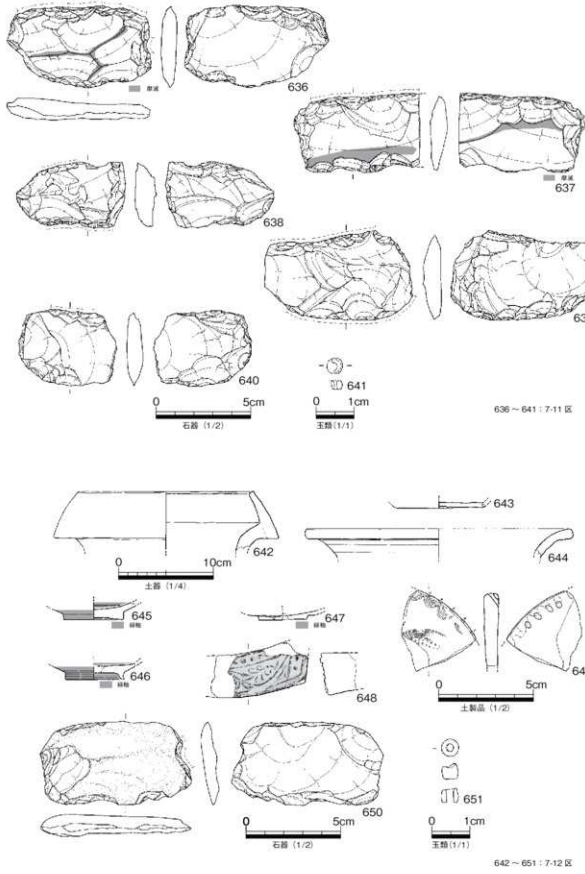


図102　遺構に伴わない遺物（2）

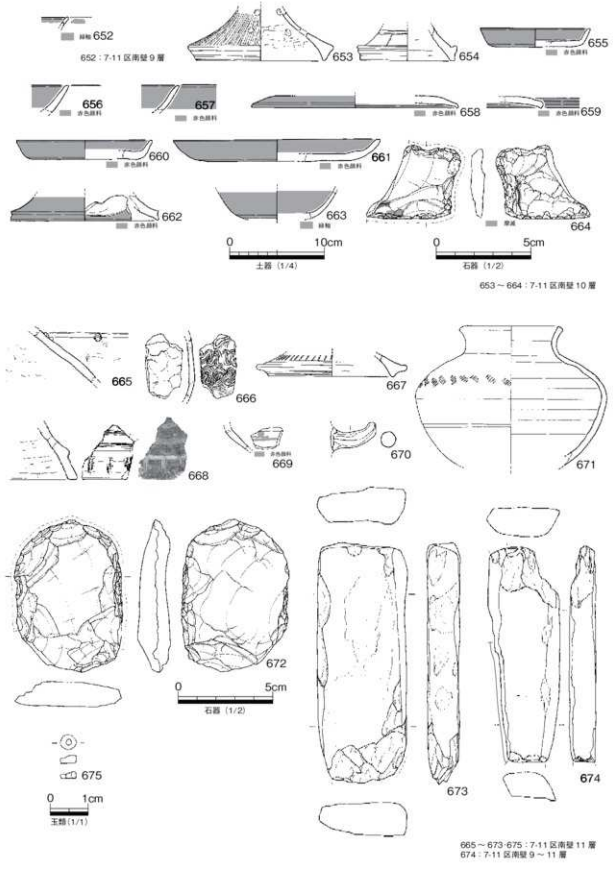
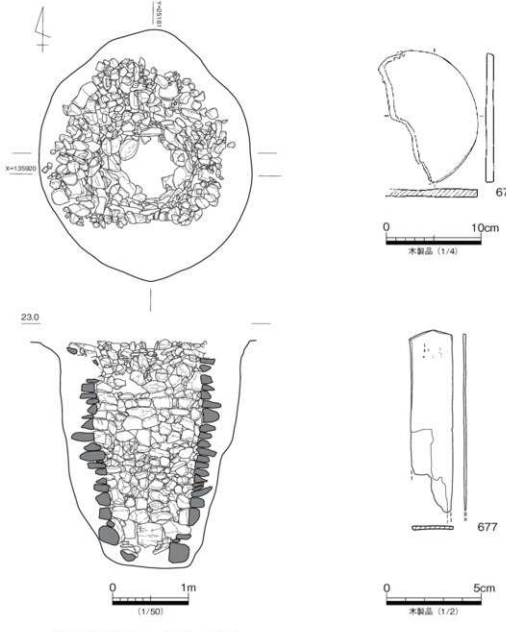


図 103　遺構に伴わない遺物（3）



『旧練兵場遺跡Ⅴ』177 頁 図 172 掲載

図 104　7-8 区 SE01

8．7-8 区 SE01 出土遺物（図 104）

676・677 は『旧練兵場遺跡Ⅴ』で報告した井戸 7-8 区 SE01 から出土した木製品である。676 は底板である。端部を欠損するが、本来の形状は円形である。677 は木札である。先端の形状は三角形である。677 の表面に黒色付着物がみられるが、文字を墨書きしたものとは認めがたい。

註 1　渡部明夫「讃岐国分寺の考古学的研究」2006

2　『熊山田遺跡』邑久町教育委員会　2004

第４章　第 29 次調査

第１節　層序

基本層序については、既刊の『旧練兵場遺跡Ⅱ』において詳説されており、本節でもこれを踏襲する。

調査は、Ⅱ層まで重機で掘り下げ、Ⅲないし Ⅳ層上面において遺構検出・掘り下げをおこなった。Ⅱ層は、本調査区では最大 16 層に細分され、遺構埋土を除いて、いずれも水平堆積していることから、明治 44 年（1911 年）の旧帝国陸軍第 11 師団司令部設置以前の旧耕作土ないし床土層と判断され、色・土質及び出土遺物より、近世以降の耕土層群と考えられる。

一方、Ⅱ層最下層（図 107-33 層）は、上位の近世以降の堆積層とは大きく異なることから、中世に遡る可能性がある。出土遺物から時期を特定することはできなかったが、SD60 等本調査区で確認された中世溝群埋没後に堆積していることから、上限は 13 世紀中葉以降と判断される。調査区北部では、本層は南北長 24.5 m 以上の広範囲において水平堆積が確認され、本層下面では弥生時代以降の遺構や Ⅳ層以下の堆積層が露出する。本層堆積、つまり遅くとも中世段階での旧耕地面の造成により、それ以前の旧地形の起伏は削奪・平準化されていることが判明した。

Ⅱ層最下層南端は、旧多度郡域で確認されている条里型地割りに合致する方向を指向する溝 SD70 によって切られ、より南では確認されない。また、Ⅱ層最下層下面の標高は 22.20 m 前後でほぼ一定し、SD70 南側ではⅡ層下面の標高は 22.40 ～ 22.50 m と、0.2 ～ 0.3 m 高くなり、この位置に近世以降、練兵場造成時までの溝が繰り返し開削されていたことが、土層断面図より読み取れる。つまり、本調査区で確認されたⅡ層下面の段差は、棚田状に造成された耕地界を反映していると考えられる。

遺跡周辺は、練兵場の造成や市街地化により、地割りは大きく改変されており、条里型地割りは確認できない。残存地より地割り界を延伸して遺跡の上に表示すると、上述した耕地界のラインは、既説の条里遺構復原案（金田章裕 1988「讃岐の条里遺構」『香川県史』第１巻通史編）の四条８里 11 坪と 14 坪の坪界に一致する。古代以降、溝が本位置を踏襲して開削され、後述する道路遺構が敷設されるのは、坪界としての場所を反映したものであったからであろう。その時期は、幹線水路 SD60 や道路遺構 SD59 の配置より、13 世紀中葉以前に遡るものであったことが実証された。既述したⅡ層最下層の旧耕地面の造成は、この地割りを踏襲したものであり、条里型地割りの方向に合致した幹線水路 SD55 の開削や、道路遺構 SD59 の設置は、おそらくこうした大規模な土地の平準化作業を前提とするものと考えられる。（蔵本）

第２節　遺構・遺物

１．弥生時代中期

掘立柱建物

SB06（図 109）

４区の第２面（Ⅳ層上面）で検出された掘立柱建物である。桁行３間（5.4 ～ 5.7 m）、梁間１間（2.6 m）、深さ 0.5 ～ 0.6 m で、桁行の方向は N75° E である。柱穴の平面形はややいびつな円形またはややいびつな隅丸方形で、長軸長 0.8 ～ 1.4 m、短軸長 0.6 ～ 0.9 m、深さ 0.6 m である。各柱穴からは少量

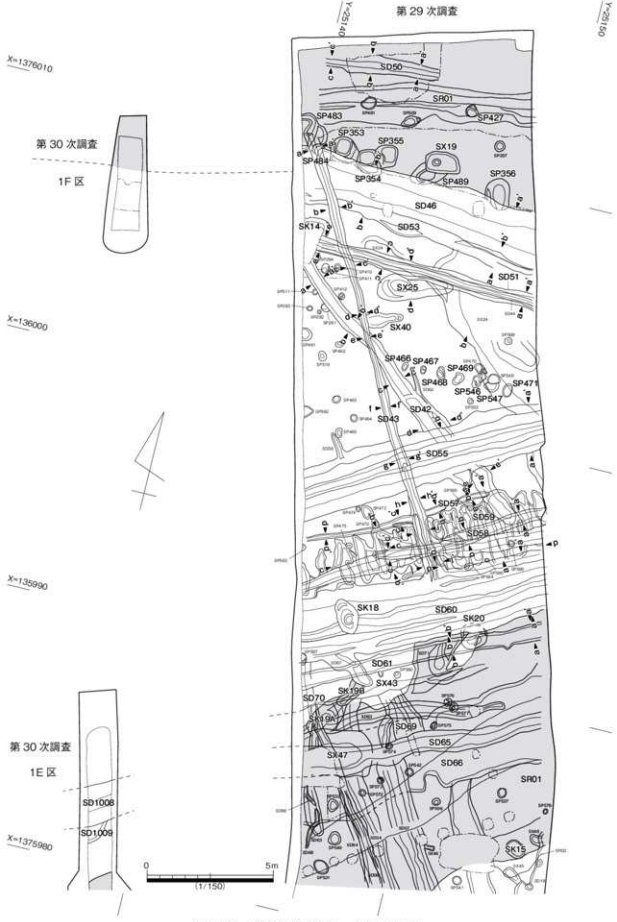


図 105　第 29 次調査 1・2 区平面図

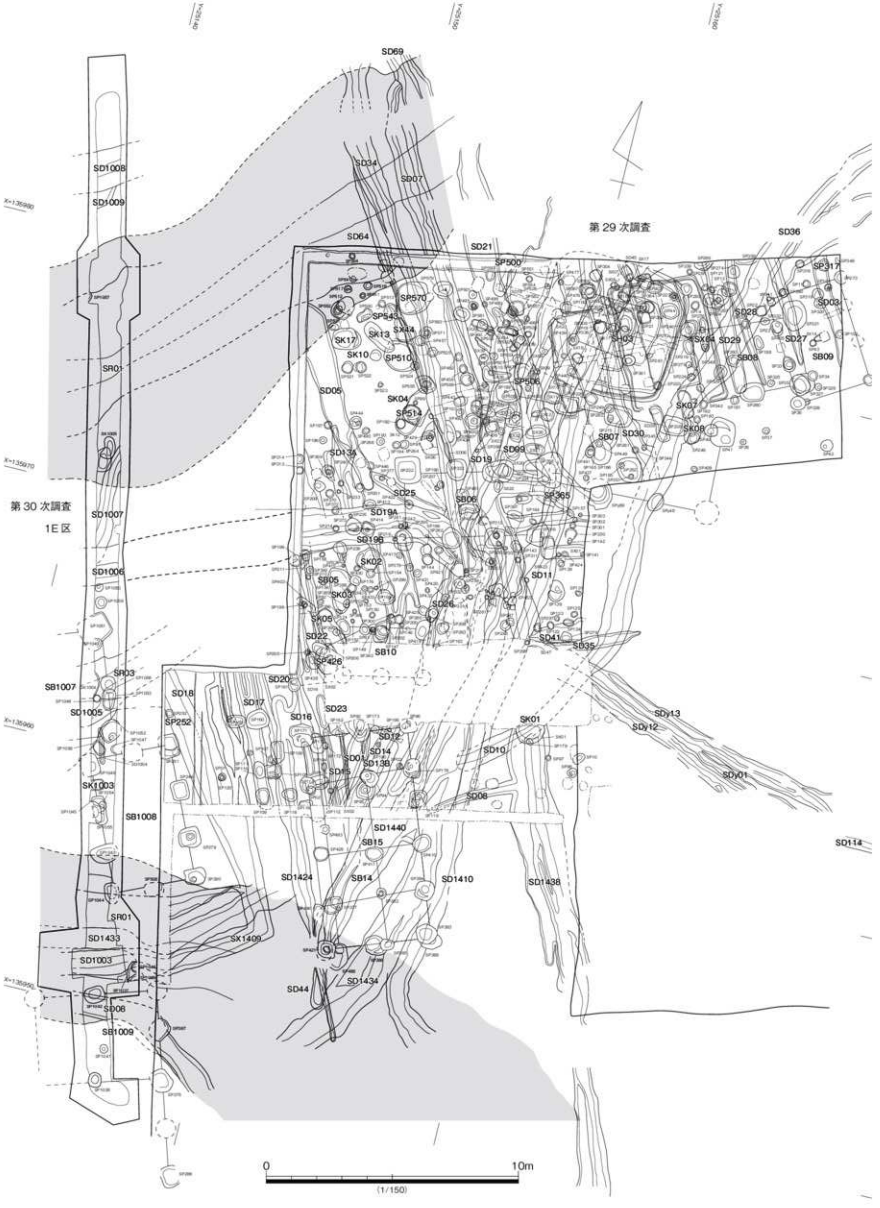
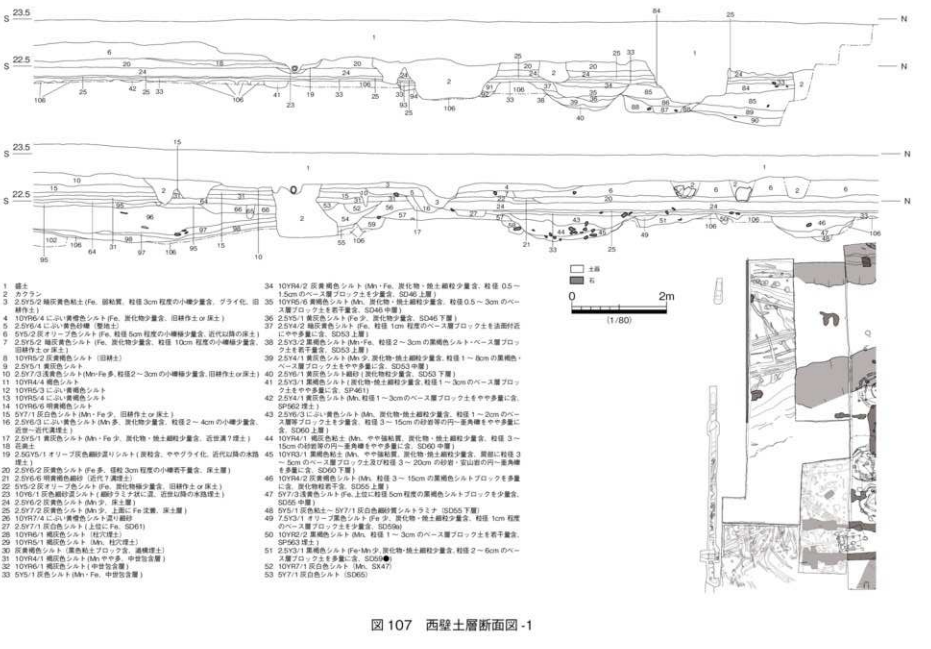
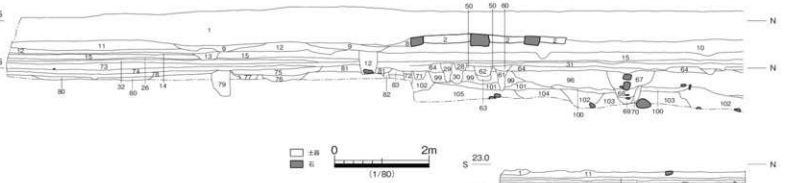


図 106　第 29 次調査南部平面図



1 盛土
2 カクラン
3 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土(Fe、細粒質、粒径3cm程度の小礫少量含、グライ化、旧耕作土)
4 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト(Fe、炭化物少量含、旧耕作土or床土)
5 2.5Y6/4 にぶい黄色砂礫(整地土)
6 5Y5/2 灰オリーブ色シルト(Fe、粒径5cm程度の小礫極少量含、近代以降の床土)
7 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト(Fe、炭化物少量含、粒径10cm程度の小礫極少量含、旧耕作土or床土)
8 10YR5/2 灰黄褐色シルト(旧耕土)
9 2.5Y5/1 黄灰色シルト
10 2.5Y7/3 淡黄色シルト(Mn・Fe多、粒径2～3cmの小礫極少量含、旧耕作土or床土)
11 10YR4/4 褐色シルト
12 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
13 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
14 10YR6/6 明黄褐色シルト
15 5Y7/1 灰白色シルト(Mn・Fe少、旧耕作土or床土)
16 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト(Mn多、炭化物少量含、粒径2～4cmの小礫少量含、近世～近代溝埋土)
17 2.5Y5/1 黒灰色シルト(Mn・Fe少、炭化物・焼土細粒少量含、近世溝？埋土)
18 花崗土
19 2.5GY5/1 オリーブ灰色細砂混りシルト(炭粒含、ややグライ化、近代以降の水路埋土)
20 2.5Y6/2 灰黄色シルト(Fe多、径粒3cm程度の小礫若干量含、床土層)
21 2.5Y6/6 明黄褐色細砂(近代？溝埋土)
22 5Y5/2 灰オリーブ色シルト(Fe、炭化物極少量含、旧耕作土or床土)
23 10Y6/1 灰色細砂混シルト(炭化物極少量含、旧耕土or床土)
24 2.5Y6/2 灰黄色シルト(Mn少、床土層)
25 2.5Y7/2 灰黄色シルト(Mn少、上面に Fe沈着、床土層)
26 10YR7/4 にぶい黄橙色シルト混り細砂
27 2.5Y7/1 灰白色シルト(上位にFe、SD61)
28 10YR6/1 褐灰色シルト(粘土埋土)
29 10YR5/1 褐灰色シルト(Mn、粘土埋土)
30 灰黄褐色シルト(黒色粘土ブロック含、遺構埋土)
31 10YR4/1 褐灰色シルト(Mn やや多、中世包含層)
32 10YR6/1 褐灰色シルト(中世包含層)
33 5Y5/1 灰色シルト(Mn・Fe、中世包含層)
34 10YR4/2 灰黄褐色シルト(Mn・Fe、炭化物・焼土細粒少量含、粒径0.5～1.5cmのベース層ブロックを少量含、SD46上層)
35 10YR5/6 黄褐色シルト(Mn、炭化物・焼土細粒少量含、粒径0.5～3cmのベース層ブロックを若干量含、SD46中層)
36 2.5Y5/1 黄灰色シルト(Fe少、炭化物少量含、SD46下層)
37 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト(Fe、粒径1cm程度のベース層ブロックを法面付近にやや多量に含、SD53上層)
38 2.5Y3/2 黒褐色シルト(Mn・Fe、粒径2～3cmの黒褐色シルト・ベース層ブロックを多量に含、SD53上層)
39 2.5Y4/1 黄灰色シルト(Mn少、炭化物・焼土細粒少量含、粒径1～8cmの黒褐色・ベース層ブロックをやや多量に含、SD53中層)
40 2.5Y6/1 黄灰色シルト細砂(炭化物粒少量含、SD53下層)
41 2.5Y3/1 黒褐色シルト(炭化物・焼土細粒少量含、粒径1～3cmのベース層ブロックをやや多量に含、SP461)
42 2.5Y4/1 黄灰色シルト(Mn、粒径1～3cmのベース層ブロック土をやや多量に含、SP562埋土)
43 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト(Mn、炭化物・焼土細粒少量含、粒径1～2cmのベース層等ブロックを少量含、粒径3～15cmの砂岩等の円～亜角礫をやや多量に含、SD60上層)
44 10YR4/1 褐灰色粘土(Mn、やや繊維質、炭化物・焼土細粒少量含、粒径3～15cmの砂岩等の円～亜角礫をやや多量に含、SD60中層)
45 10YR3/1 黒褐色粘土(Mn、やや繊維質、炭化物・焼土細粒少量含、周囲に粒径3～5cmのベース層ブロックを及び粒径3～20cmの砂岩・安山岩の円～亜角礫を多量に含、SD60下層)
46 10YR4/2 灰黄褐色シルト(Mn、粒径3～15cmの黒褐色シルトブロックを多量に含、炭化物粒若干含、SD55上層)
47 5Y7/3 淡黄色シルト(Fe、上位に粒径5cm程度の黒褐色シルトブロックを少量含、SD55中層)
48 5Y5/1 灰色粘土～5Y7/1 灰白色細砂質シルトラミナ(SD55下層)
49 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト(Fe少、炭化物・焼土細粒少量含、粒径1cm程度のベース層ブロックをやや多量に含、SD59a)
50 10YR2/2 黒褐色シルト(Mn、粒径1～3cmのベース層ブロック土を若干量含、SP563埋土)
51 2.5Y3/1 黒褐色シルト(Fe・Mn少、炭化物・焼土細粒少量含、粒径2～6cmのベース層ブロックをやや多量に含、SD59●)
52 10YR7/1 灰白色シルト(Mn、SX47)
53 5Y7/1 灰白色シルト(SD65)

図 107　西壁土層断面図 -1



54 10YR7/1 灰白色シルト（SX47）
55 10YR7/1 灰白色シルト（ベース層ブロック土含）
56 10YR6/1 褐灰色シルト（Mn多、SD70）
57 10YR3/1 黒褐色シルト（Fe・Mn多、層下半に粒径1～2cmのベース層ブロック土少量含、SD70）
58 5Y3/2 オリーブ黒色シルト（Mn少、炭化物・焼土細粒様少量含、粒径1cm程度のベース層ブロック土少量含、SP587）
59 2.5Y3/2 黒褐色シルト（Mn多、炭化物・焼土細粒やや多量に含、粒径2～5cmのベース層ブロック土多量に含、SK19）
60 10YR6/1 褐灰色シルト（Mn、柱穴上層）
61 10YR6/2 灰黄褐色シルト（黒色粒土ブロック含、柱穴下層）
62 10YR6/1 褐灰色シルト（柱穴上層）
63 10YR7/1 灰白色砂質土（Mn、柱穴下層）
64 10YR3/1 黒褐色シルト（Mnやや多、炭化物・焼土細粒少量含、SR01上層）
65 5Y6/1 灰色シルト（柱穴埋土）
66 10YR7/1 灰白色シルト（Mn、SD66）
67 10YR4/2 灰黄褐色粘質土（柱穴埋土）
68 2.5YR3/2 暗赤褐色粘質土（Mn、柱穴埋土）
69 10YR3/2 黒褐色粘質土（Mn、柱穴埋土）
70 10YR5/1 褐灰色シルト（Mn、砂質強、柱穴埋土）
71 10YR6/1 褐灰色シルト（Mn、ベース層ブロック土含、造構埋土）
72 10YR6/1 褐灰色シルト（ベース層ブロック土少量、柱穴埋土）
73 10YR5/1 褐灰色礫混りシルト（近代攪乱含）
74 2.5Y4/1 黒灰色シルト（Fe流亡、SX02）
75 10YR5/2 灰黄褐色小礫混りシルト（SD19①上層）
76 10YR6/1 灰黄褐色小礫混りシルト（SD19②流路A）
77 10YR6/1 灰黄褐色小礫混りシルト（SD19③流路B）
78 2.5Y5/2 褐灰色シルト（SD16）
79 10YR3/2 黒褐色シルト（SP199）
80 2.5Y6/1 黒灰色シルト（粒径3cm程度のベース層ブロック土を多量に含、SD16下層）
81 10YR4/1 褐灰色シルト（Fe流亡）
82 （柱穴埋土）
83 7.5YR3/2 黒褐色シルト（粒径0.5～1cmのベース層ブロック土を若干量含）
84 5Y3/1 オリーブ黒色シルト（Fe、炭化物・焼土細粒少量含、SR01上層）
85 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（Mn多、炭化物粒やや多量に含、SR01中層）
86 2.5Y3/1 黒褐色粘土（Mn、やや鉄粘質、炭化物・焼土細粒多量に含、SP483埋土）
87 2.5Y3/1 黒褐色粘土（Mn少、やや鉄粘質、炭化物粒少量含、径粒1cm程度のベース層ブロック土少量含、SP483埋土）
88 2.5Y4/1 黒灰色シルト（Mn、炭化物粒少量含、粒径2～6cmのベース層ブロック土を多量に含、SP483埋土）
89 5Y4/1 灰色粘土（Mn、炭化物・焼土細粒若干量含、SR01下層）
90 5Y3/1 オリーブ黒色粘土（Mn少、やや強粘質、炭化物粒少量含、SR01最下層）
91 10YR3/2 黒褐色シルト（Fe多、炭化物・焼土細粒やや多量に含、粒径2～3cmのベース層ブロック土若干量含、SK14上層）
92 10YR3/1 黒褐色シルト（Mn、炭化物・焼土細粒多量に含む、粒径1～3cmのベース層ブロック土を多量に含、SK14下層）
93 10YR2/1 黒色粘土（Mn・Fe、やや鉄粘質、炭化物粒・焼土細粒少量含、粒径2～3cmのベース層ブロック土を少量含、SD42上層）
94 10YR2/1 黒色粘土（Mn・Fe、やや鉄粘質、炭化物粒少量含、粒径2～10cmのベース層ブロック土を多量に含、SD42下層）
95 10YR2/2 黒褐色シルト（Mn多、炭化物・焼土細粒少量含、SR01上層下位）
96 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（Mn・Fe、炭化物・焼土細粒少量含、SR01中層）
97 10YR3/1 黒褐色粘土（Mn、炭化物・焼土細粒少量含、SR01下層）
98 2.5Y3/2 黒褐色粘土（Mn少、やや強粘質、粒径1～2cm程度のベース層ブロック土を多量に含、SR01最下層）
99 10YR6/2 灰黄褐色シルト（砂質強、ベース層ブロック土含、SR02上層）
100 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト（ベース層ブロック土を多量に含、SR02上層）
101 10YR7/2 にぶい黄橙色細砂（Mn、SR02上層）
102 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土（下位にMn多、乾燥あり、SR02下層）
103 10YR5/1 褐灰色砂礫（礫多、SR02下層）
104 にぶい黄橙色細砂（小礫含、SR02下層）
105 10YR5/3 にぶい黄褐色砂（Mn、乾燥あり、SR02下層）
106 2.5Y7/4 浅黄色シルト（Mn・Fe、ベース層）

5区
1 造成土
3 5Y7/1 灰白色シルト（Fe流亡、床土層　近世～近代）
4 2.5Y6/1 黄灰色シルト（Mn、中世包含層）
5 2.5Y4/1 黄灰色シルト（Mn、炭化物粒少量含、SR01上層）
6 10YR3/1 黒褐色シルト（Mn、炭化物・焼土細粒少量含、粒径1cm以下のブロック土少量含、SD18）
7 10YR3/1 黒褐色シルト（Mn、炭化物・焼土細粒少量含、粒径1～7cmのブロック土やや多量に含）
8 2.5Y6/4 浅黄色シルト（Mn、ベース層）
11 2.5Y7/1 灰白色シルト（Fe、炭化物粒少量含、床土層 or 旧耕土層　近世～近代）

図108　西壁土層断面図-2

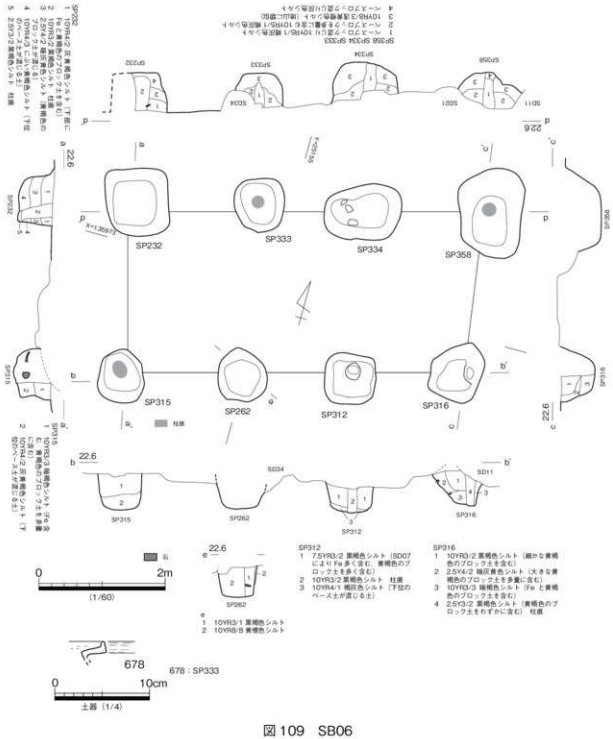


図109　SB06

の土器片などが出土した。678はSP3331から出土した弥生土器甕口縁部片で、口縁部外面に浅い凹線を施し、頸部は強く屈曲する。弥生時代中期後半に属する。出土遺物や埋土の色調・土質からSB06は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SB07（図110）

3区から4区の第2面（Ⅳ層上面）、『旧練兵場遺跡Ⅰ』で報告されたY区にかけて検出された掘立柱建物である。桁行4間（8.5 m）、梁間1間（3.0 m）、桁行の方向はほぼ東西方向である。柱穴の平面形はややいびつな方形または円形で、長軸1.0 ～ 1.2 m、短軸0.7 ～ 0.8 m、深さ0.4 ～ 0.7 mである。各

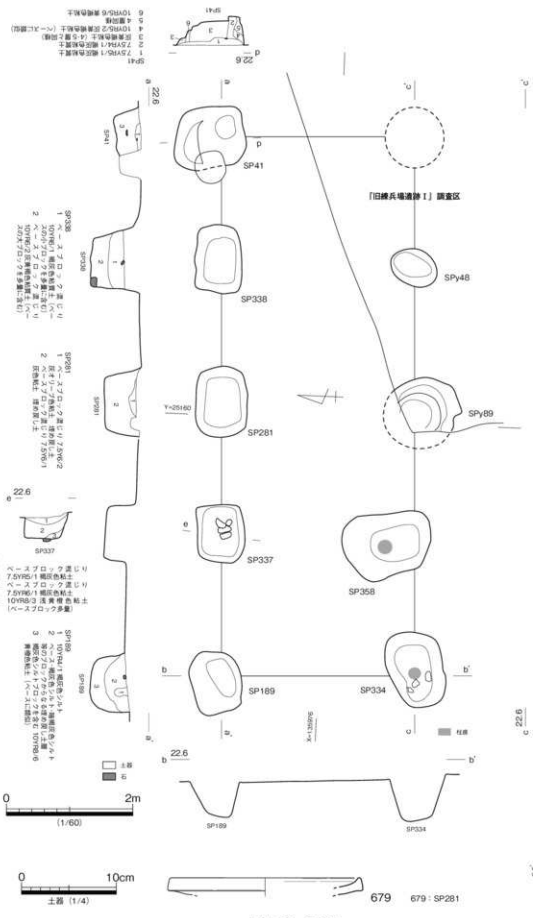

SP41
1 7.5YR4/1 褐灰色粘質土
2 7.5YR4/1 褐灰色粘質土
3 10YR5/2 灰黄褐色粘土（5～3に酸化）
4 4 褐色粘
6 10YR5/6 黄褐色粘土
22.6
SP100
SP101
SP337
SP189
SP338
SP281
SP41
SPy48
SPy89
SP358
SP334
SP189
SP334
SP281
「旧練兵場遺跡Ⅰ」調査区
SPy48
SPy89
SP358
SP334
SP189
SP334
SP281
679
679：SP281
0
2m
(1/60)
0
10cm
土器（1/4）

図 110　SB07

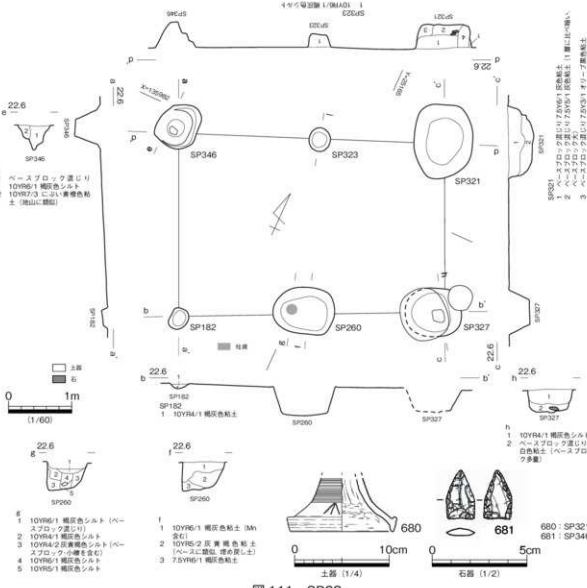


図111　SB08

柱穴からは土器片などが少量出土した。679 は SP281 から出土した弥生土器壺である。ラッパ状に広がる壺の口縁部片で、弥生時代中期後半のものである。出土遺物や埋土の色調・土質から SB07 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SB08（図111）

3区の第2面（Ⅳ層上面）で検出された掘立柱建物である。桁行2間（4.2 m）、梁間1間（2.7 m）、桁行の方向は N70° E である。柱穴の平面形はいずれも円形である。SP182・SP323 は径 0.3 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m と小さいが、その他の柱穴は径 0.7 ～ 1.2 m、深さ 0.4 ～ 0.5 m と大きい。各柱穴からは少量の土器片などが出土した。680 は SP321 から出土した弥生土器高杯、681 は SP346 から出土したサヌカイト製石鏃である。680 は外面に数条のヘラ描き沈線が施される。弥生時代中期後半に属する。出土遺物や埋土の色調・土質から SB08 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SB10（図112）

4区南部の第2面（Ⅳ層上面）で検出された掘立柱建物である。北側の桁行は検出されているが、南側の桁行は攪乱によって削平されており、未検出である。北側の桁行2間（3.1 m）で、方向

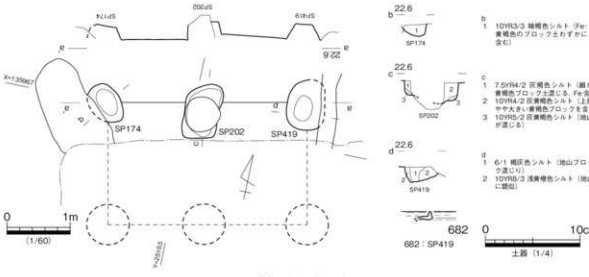


図 112　SB10

は N80°E である。柱穴の平面形は円形またはいびつな楕円形である。SP202 は長楕円形であるが、2 個の柱穴が重複している可能性が高い。径または長軸は 0.6 ～ 0.8 m、深さ 0.2 m である。各柱穴からは土器片が少量出土した。682 は SP419 から出土した弥生土器甕で、中期後半に属する。出土遺物や埋土の色調・土質から SB10 は弥生時代中期後半のものである。

柱穴・小穴・土坑

SP353（図 113）

1 区北端部 SR01 上層下面で検出した土坑である。南半部を SD46 に、東端部を SP355 にそれぞれ切られるため、全形は明らかではない。

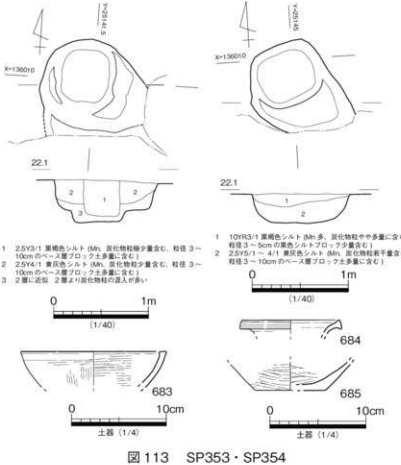


図 113　SP353・SP354

南北・東西とも 1.0 m 以上を測り、平面形はやや歪な隅丸方形状を呈するとみられる。残存深は 0.39 m あり、断面形は概ね逆台形状を呈する。

埋土は 2 層に細分され、下位層を中心に多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器台付鉢（図 113-683）等の土器小片が少量出土した。出土遺物より弥生中期前半新

段階を上限とする中期中葉頃に位置付けられる。(蔵本)

SP354（図113）

1区北端部SR01上層下面で検出した土坑である。南半部をSD46に切られるため、全形は明らかではない。東西0.88 m、南北0.99 m以上を測り、平面形はやや歪な隅丸方形状を呈するとみられる。残存深は0.15 mあり、断面形は概ね逆台形状を呈する。

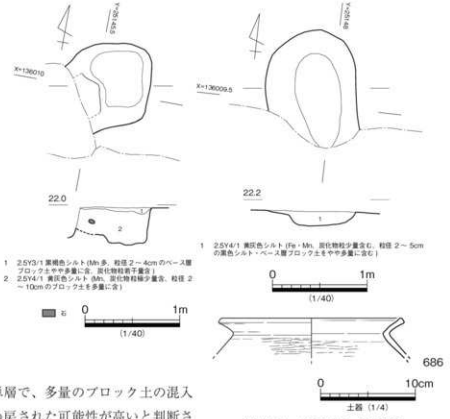


図114　SP355・SP356

埋土は黄灰色シルトの単層で、多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器壺（図113-684.685）等の土器小片やサヌカイトチップが少量出土した以外に、器種不詳の須恵器小片1点が出土した。須恵器片は遺構南半部の上層より出土したもので、調査段階でSD46の遺物が混入したものと考える。出土遺物より弥生中期前半新段階を上限とする中期中葉頃に位置付けられる。(蔵本)

SP355（図114）

1区北端部SR01上層下面で検出した土坑である。西半部をSP354に切られるため、全形は明らかではない。東西0.79 m以上、南北0.89 mを測り、平面形はやや歪な隅丸方形状を呈するとみられる。残存深は最深部で0.4 mあり、西側に浅いテラス面を伴い、北・東壁はほぼ直に近く掘り込まれ、南北断面は箱形に近い。

埋土は2層に細分され、両層とも多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器小片が少量出土したのみで、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。切り合い関係よりSP354に先行すること、検出位置等の情報より、弥生時代中期中葉を前後する時期に位置付けられるものと思われる。(蔵本)

SP356（図114）

1区北端部SR01上層下面で検出した土坑である。南半部をSD46に切られるため、全形は明らかではない。東西1.02 m、南北1.23 m以上を測り、平面形はやや歪な隅丸方形状を呈するとみられる。残存深は0.3 mあり、断面形は逆台形状を呈する。

埋土は2層に細分され、下位層を中心に多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された

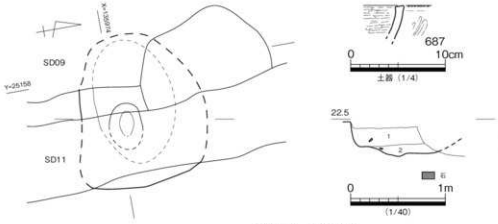


図 115　SP365

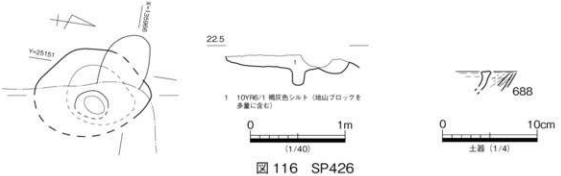


図 116　SP426

可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器甕（図 114-686）等の土器小片が少量出土した。出土遺物より弥生中期前半新段階を上限とする中期中葉頃に位置付けられる。(藏本)

SP365（図 115）

4 区南部の第 2 面（Ⅳ層上面）で検出された柱穴である。西部は古代の溝 SD09、西部は古代の溝 SD11 と重複し、北部は弥生時代中期後半の掘立柱建物 SB06 の柱穴 SP316 と重複し削平される。残存部分から SP365 の平面形はいびつな楕円形で、長軸 1.7 m、短軸 1.2 m と推定される。底面には径 0.4 m の凹みがあり、凹みの底面までの深さは 0.4 m である。遺物は弥生土器小片が数点出土しただけである。687 は弥生土器鉢で、弥生時代中期後半に属する。出土遺物や埋土の色調・土質から SP365 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SP426（図 116）

4 区南西端の第 2 面（Ⅳ層上面）で検出された柱穴である。東部は攪乱によって削平されており、底面付近だけが残存する。また、北部は中世の掘立柱建物 SB05 の柱穴 SP206 と重複し、削平される。残存部分から SP426 の平面形はややいびつな円形で、径 1.4 m と推定される。底面には径 0.3 m の凹みがあり、凹みの底面までの深さは 0.4 m である。遺物は弥生土器小片が数点出土しただけである。688 は弥生土器鉢で、弥生時代中期後半に属する。出土遺物や埋土の色調・土質から SP426 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SP427（図 117）

1 区北端部で検出した土坑である。SR01 底面で検出したが、後述する SP353 等の近接する土坑群がいずれも SR01 上層下面より掘り込まれていることから、本遺構も本来は同様の位置より掘り込まれて

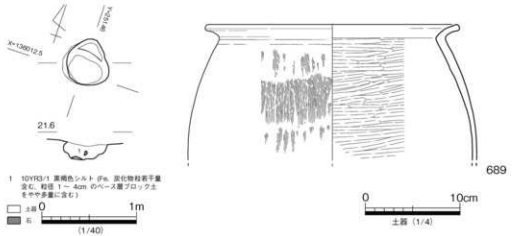


図 117　SP427

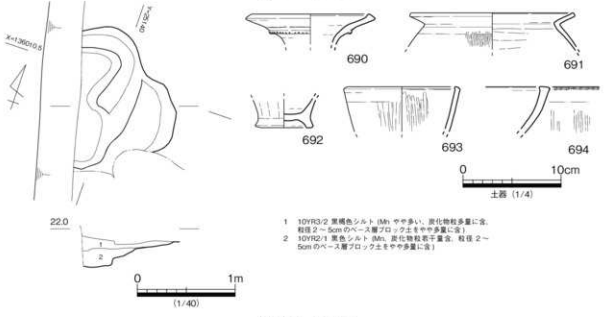


図 118　SP483

いた可能性が考えられる。検出位置で、東西 0.43 m、南北 0.48 mを測り、平面形はやや歪な隅丸方形状を呈する。残存深は 0.18 mあり、断面形は概ね歪な箱状を呈し、一部袋状を呈する部分もある。

埋土は黒褐色シルトの単層で、埋土中に多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器甕（図 117-689）等の土器小片が少量出土した。出土遺物より弥生中期前半新段階を上限とする中期中葉頃に位置付けられる (蔵本)

SP483 (図 118)

1 区北端部 SR01 上層下面で検出した土坑である。南半部を SP484・SD46 に切られ、西半部は調査区外へ延長するため、全形は明らかではない。南北 1.48 m以上、東西 0.98 m以上を測り、平面形は不定形を呈するとみられる。残存深は 0.45 mあり、断面形は概ね逆台形状を呈する。

埋土は 2 層に細分され、両層ともやや多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器壺（図 118-690）、甕（同図 -691.692）、台付鉢（同図 -693.694）等の土器小片が出土

した。周辺に分布する土坑群の中では、やや遺物量は豊富である。出土遺物より弥生中期前半新段階を中心とする時期に位置付けられる。(藏本)

SP484（図 119）

1 区北端部 SR01 上層下面で検出した土坑である。南半部を SD46 に、東半部を SP353 にそれぞれ切られるため、全形は明らかではない。南北 0.62 m以上、東西 0.75 m以上を測り、平面形は現状で隅丸方形状を呈するとみられる。残存深は 0.33 mあり、断面形は概ね逆台形状を呈する。

埋土は 2 層に細分され、下位層を中心にやや多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器小片が少量出土したのみで、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。切り合い関係より SP353 に先行し、SP483 に後出すること、検出位置等の情報より、弥生時代中期前半新段階を上限とする中期中葉頃に位置付けられる。(藏本)

SP489（図 119）

1 区北端部 SR01 上層下面で検出した土坑である。

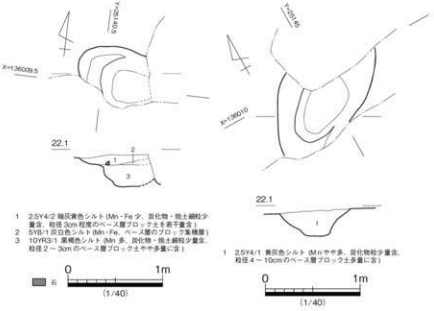


図 119　SP484・SP489

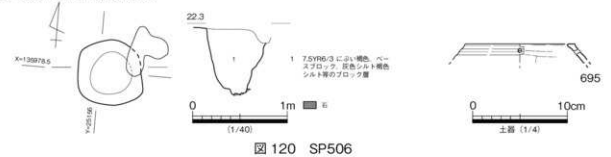


図 120　SP506

図 121　SP514

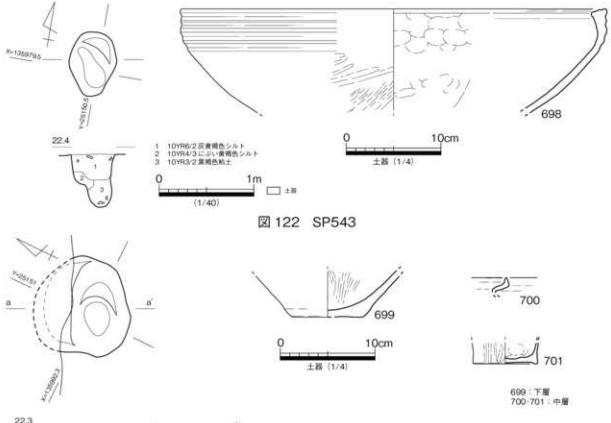


図 122　SP543

図 123　SK20

北東部を SX19 に、南半部を SD46 にそれぞれ切られるため、全形は明らかではない。長軸 1.09 m以上、短軸 0.9 m を測る。残存深は 0.28 mあり、底面が若干深く掘り込まれ、断面形は２段掘り状を呈する。

埋土は黄灰色シルトの単層で、多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器小片が少量出土したのみで、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。周辺の遺構配置や検出位置等の情報より、弥生時代中期中葉を前後する時期に位置付けられるものと思われる。(蔵本)

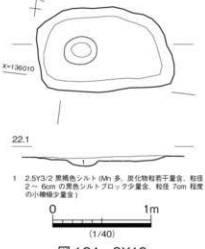


図 124　SX19

SP506（図 120）

４区東部の第２面（Ⅳ層上面）で検出された柱穴である。東部は古代の溝 SD09 と重複し、削平される。平面形はややいびつな円形で、径 0.7 m、深さ 0.5 mである。遺物は弥生土器小片が数点出土しただけである。695 は弥生土器無頸壺で、弥生時代中期後半に属する。

出土遺物や埋土の色調・土質からSP506は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SP514（図121）

4区ほぼ中央部の第2面（Ⅳ層上面）で検出された柱穴である。弥生時代後期の土坑SK04と重複し、削平される。平面形はほぼ円形で、径0.7～0.8 m、深さ0.2 mである。遺物は弥生土器片が数点出土しただけである。696・697は弥生土器甕で、弥生時代中期後半に属する。出土遺物からSP514は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SP543（図122）

4区北部の第2面（Ⅳ層上面）で検出された柱穴である。平面形はいびつな楕円形で、長軸0.7 m、短軸0.5 m、深さ0.6 mである。遺物は土器片数点とサヌカイト小片が出土した。698は弥生土器鉢で、弥生時代中期後半に属する。出土遺物からSP543は弥生時代中期後半のものと考えられる。

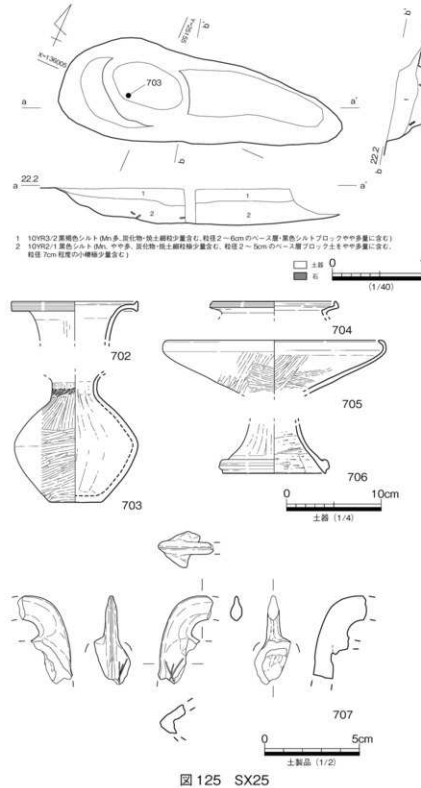


図125　SX25

柱穴

SK20（図123）

2区北端の第2面で検出された柱穴である。北部は中世の溝SD60と重複し、削平されるため全体は不明である。平面形はややいびつな円形、径1.0 m、最も深いところで0.9 mである。遺物は少量の土器片が出土した。大半が2・3層からの出土である。699は弥生土器壺の底部、700・701は弥生土器甕である。これらは弥生時代中期後半に属することから、SK20は弥生時代中期後半のものと考えられる。

土坑

SX19（図 124 ）

１区北端部 SR01 上層下面で検出した土坑である。切り合い関係より、SP489 より後出する。東西 1.31 m、南北 0.84 m を測り、平面形はやや歪な隅丸長方形状を呈する。残存深は 0.1 m と浅く、断面形は皿状を呈する。中央やや西よりの底面で、長径 0.3 m 程度の平面楕円形の落ちが認められたが、この部分に埋土の相違は認められなかった。

埋土は黒褐色シルトの単層で、自然堆積の可能性が高い。

遺物は、弥生土器小片が少量出土したのみで、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。周辺の遺構配置や検出位置等の情報より、弥生時代中期中葉を前後する時期に位置付けられるものと思われる。(蔵本)

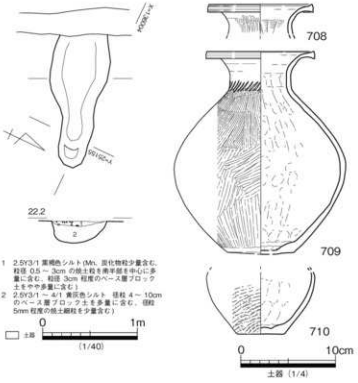


図 126　SX40

SX25（図 125）

１区北半部で検出した土坑である。SD51 により一部攪乱を蒙るが、概ね全形はとらえられた。東西 2.98 m、短軸 1.10 m 以上、平面形はやや歪な長楕円形を呈する。残存深 0.38 m、断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は、２層に細分された。いずれもベース層ブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器壺（図 125-702.703）、甕（同図 -704）、高杯（同図 -705.706）、銅鐸形土製品（同図 -707）等がコンテナ１箱程度出土した。出土した土器類は中期後半新段階（古）にまとまり、本遺構の埋没時期を示す。銅鐸形土製品は、残存高 4.9cm、正面幅 2.2cm の鈕より身上端にかけての半截した小片である。鈕は平面隅丸台形状を呈するとみられ、断面は外縁部がやや薄く、内側がやや歪な菱形に厚みをもって成形されており、意匠的には外縁付鈕式もしくは扁平鈕式銅鐸を模した可能性が考えられる。供判する土器の年代観からすれば、扁平鈕式銅鐸を模した可能性が高く、本遺跡からも扁平鈕式名東型銅鐸の破片が出土している点は興味深い。鈕の外縁から連続する鰭の部分は、身部と一体化してやや不明瞭である。身部は大半を欠損するため全形は不明だが、残存部から判断する限り、比較的実物に忠実に模されている可能性は高い。図右面にヘラ状工具による若干の線刻が認められるが、何を表現したものかは不明である。なお、身・舞部の型持孔の有無は、欠損により不明である。土製品の破断面は磨滅しており、破砕後埋没したことが想像される。土坑内からは、同一個体の可能性のある破片は確認されず、意図的に破砕・埋納した可能性は低いと判断される。また、胎土は長径約１～２mmの石英・長石粒が目立つ素地粘土が使用されており、色調の点でも供伴する在地産と考えられる土器類の素地粘土と近似している。(蔵本)

SX40（図 126）

1区北半部で検出した土坑である。西端をSD43により攪乱を蒙るが、概ね全形は捉えられた。長軸1.43 m以上、短軸0.61 m、平面形は歪な長楕円形を呈する。残存深0.23 m、短軸方向の断面形は概ね碗底状を呈する。埋土は2層に細分され、両層中には多量のベース層のブロック土が混入することから、人為的に埋め戻された可能性が高い。また、上位層南半部には多量の焼土粒が混入する。

遺物は、弥生土器壺（図 126-708 ～ 710）等がコンテナ1箱程度出土した。外面にタタキの施された710は、後期に下る可能性もあるが、口縁部内面の加飾がなく体部中央が強く張る広口壺709の形態より、中期後半新段階（古）に位置付けられると考える。(蔵本)

SK19A（図 156）

2区西部の第2面（Ⅳ層上面）で検出された土坑である。弥生時代中期後半の遺構であるが、SK19Bと同時に調査されていることから、SK19Bと同図で報告する。SK19A・SK19Bは1遺構として調査を行ったが、遺構の形状や出土遺物の時期を検討した結果、2遺構と考えた。SK19Aの北部は弥生時代後期の土坑SK19Bと重複し、削平され、南部は調査区外に連続するため全体は不明である。平面形は長楕円形で、現存長2.0 m、最大幅1.0 m、中央部が深く、最大深0.5 mである。埋土下部には炭化物・焼土粒を含む灰色粘土が堆積していた。上部には地山土のブロックを含む黄灰色シルトが堆積していており、人為的に埋め戻されたことがうかがわれる。埋土下部からは整理箱2箱程度の土器小片が出土した。960・961・963は弥生土器甕、962は弥生土器脚部片である。土器はいずれも弥生時代中期後半に属することから、SK19Aは同時期のものと考えられる。

SD70（図 127）

2区西端の第2面（Ⅳ層上面）で検出された溝である。南から北に向かう。溝の南部は中世の土坑SX47、北部は中世の溝SD60と重複し、削平される。また、西部は調査区外に連続するため、不明であるが、幅0.5 m以上、深さ0.4 mである。遺物は弥生土器片、サヌカイト小片が出土した。711は弥生土器甕、712は弥生土器壺、713は弥生土器の底部で、これらは弥生時代中期後半に属する。出土遺物や埋土の色調や土質からSD70は弥生時代中期後半のものと考えられる。

低地帯

1区SR01（図 128 ～ 137）

1区北端部で検出した埋没旧河道で、19次調査区で大きく屈曲し、後述する2区SR01と一連の旧河道であることが判明している。本調査区では、流路南岸部を確認したのみで、北半部は調査区外へ延長する。流路幅6.37 m以上、残存深約0.9 mを測る。検出面よりベース層は緩やかに落ち込み、断面形は概ね逆台形状ないし椀底状を呈する。埋土は上・中・下層上位・下層下位の4層に分層され、いずれもシルトないし粘土層が堆積しており、明瞭な流水堆積を認めない。19次調査区で下層は3層に細分されているが、本調査区では2層に細分するに留まった。したがって、下層各層の分層単位は、本調査区と19次調査区とは対応しない。中層上端南縁は、ほぼ直線状に東西に検出され、以下南岸斜面部は数段の緩やかな雛段状のテラス面が確認された。人為的な自然地形の改変の可能性も考えられたが、調査範囲が限られることもあり、断定するまでには至らなかった。中層上面で、既述したSD50を検出している。また、上層を掘り下げたベース層上面で、SP483・489等を検出し、これらは中層の堆積より後出する可能性がある。

遺物は、各層毎に取上げを行い、全体でコンテナ約20箱の弥生土器・石器が出土している。大半は

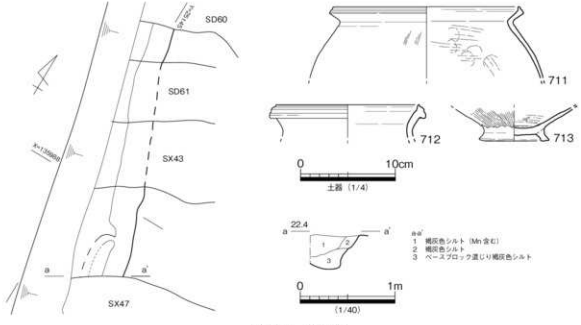


図 127　SD70

下層より出土した弥生土器で、上・中層からの遺物の出土は乏しい。

上層出土の遺物には、弥生土器広口壺（図 129-714）、鉢（同図 -715）、土製紡錘車（同図 -716）、緑色片岩製の柱状片刃石斧（同図 -717）がある。詳細な時期を特定するには資料不足の感が否めないが、概ね終末期前葉を前後する時期に位置付けられると考えられ、19 次調査区での様相と矛盾しない。

中層出土の遺物は、弥生土器壺（同図 -720）、甕（同図 -718.719）を図示したのみである。出土遺物はいずれも中期後半古段階を中心とする時期に位置付けられると考えられる。なお、19 次調査では、本層準出土遺物は弥生中期後半古段階から弥生後期前半新段階までの資料を含むとされる。

下層上位からは、弥生土器壺（図 129・130-721 ～ 742）、甕（図 130・131-743 ～ 760）、高杯（図 131-771.772）、台付鉢（図 131-761 ～ 770.773 ～ 778）、鉢（図 132-779.780）、蓋（同図 -783）、人形土製品（同図 -784）、サヌカイト製打製石鏃（同図 -785 ～ 787）、結晶片岩製（図 132-788.789）の両刃石斧が出土している。壺は、口縁部内面を中心に櫛描文で加飾する広口壺（721 ～ 724.726）、比較的長い頸部を有し基部に突帯を貼付する広口壺（727）、ラッパ状に開く口縁部を有する広口壺（725）、直口壺（732.733）、短頸壺（728）、細頸壺（729 ～ 731）、無頸壺（734 ～ 737）、長頸壺（738）がある。この中でやや長頸化した広口壺（725）は、端部の下方への引き出しが強く、また頸基部に刺突文を有し、弥生中期前半新段階に下る。甕はくの字外反する口縁部を有するもの、頸部に押捺突帯を有するもの（755）がある。778 は、774.775 のジョッキ形鉢の把手となる可能性が高い。頂部に摘みを有し、径約 7 cmに復元される円盤状を呈する 783 の蓋は、2 孔 1 対の小円孔を穿ち、無頸壺あるいは細頸壺の蓋と考える。人形土製品は、全長 5.2cm、頭部と四肢を欠損する胴部の破片である。胴部中央で 2 片に割れて出土した。胸部に乳房と思われる膨らみがあり、女性を表現したと考えられる。臀部は破損し、性器の表現や衣類を示す線刻等はなく、裸身かどうかは不明である。両腕先端は丸みを帯び、破損後の磨滅の可能性はあるが、本来的に写実的な腕が表現されていたかは疑わしい。脚部についても同様なことがいえる。一方頭部は明瞭な破断面が残り、形状は不明だが、頭部が表現されていた可能性は高い。また、胎土は長径約 2 ～ 3 ㎜の石英・長石粒が目立つ素地粘土が使用されており、色調の点でも供伴する在地産と考えら

れる土器類の素地粘土と近似しており、出土位置からも当該期の土製品と考える。これらの資料は、中期後半古段階が多数を占めるものの、一部に中期後半新段階までの資料が含まれる。

下層下位からは、弥生土器壺（図 133-790 ～図 134-813）、甕（図 134-814 ～図 135-842）、高杯（図 136-845）、台付鉢（図 136-847 ～図 137-863）、分銅形土製品（同図 -864・865）、サヌカイト製石鏃（同図 -866）、結晶片岩製片刃石斧（同図 -867）、サヌカイト製敲石（同図 -868）、砂岩製砥石（同図 -869）が出土している。壺をはじめとする各器種の組成は、下層上位のものとさほど大差はない。長頸壺 792 は、口縁部から体部上半にかけて 4 ～ 5 条の沈線をほぼ等間隔に描き、頸基部にヘラ状工具により線状の刺突を加えたもので、頻出する器形ではない。甕は、体部内面をミガキによりケズリ等の調整を消し去るものを多く認める。ジョッキ形鉢 856.860 は、接合はしないが、胎土・調整等より同一個体の可能性が高い。分銅形土製品 864 は櫛描原体による列点文が、865 にはヘラ状工具で曲線を描いたのち、その両側に 2 列に棒状原体による刺突文で加飾し、側面から裏面にかけて多数の小円孔を穿つ。叩石 868 は、周縁を中心に顕著な敲打痕を、表裏面中央部には磨滅痕をそれぞれ認める。砥石 869 は大きく欠損するが、不定形な板状砂岩亜円礫を利用したと考えられ、表裏面及び側面に使用痕を認める。出土遺物より、本層は弥生中期前半新段階から中期後半古段階の時期幅の中で捉えられる。（藏本）

２区 SR01（図 138 ～ 140）

２区北端部で検出した旧河道で、既述したように 1 区 SR01 と一連のものである。幅 7.8 m 前後、残存深 0.85 m、断面形は概ね碗底ないし逆台形状を呈する。埋土は 1 区同様 4 層に細分された。本区では、下層下位層中の比較的広い範囲で、多量のベース層の小ブロックの混入が確認されたが、人為性を含めた混入の要因について明らかにすることができなかった。

下層を中心にコンテナ約 10 箱の遺物が出土した。上層からは、重複する遺構により大きく削奪されたこともあり、図化可能な遺物は出土していない。

中層出土の遺物も乏しい。掲載した細頸壺（図 138-870）は中期前半新段階の特徴を示し、本来は下層に帰属した遺物と考える。分銅形土製品（同図 -871）は、接合はしなかったが、表面の文様より同一個体と考え図示した。櫛描き直線文や弧状文の周囲を刺突文で飾り、側面から裏面に多数の小円孔を穿つ。

図 128　SR01(1)

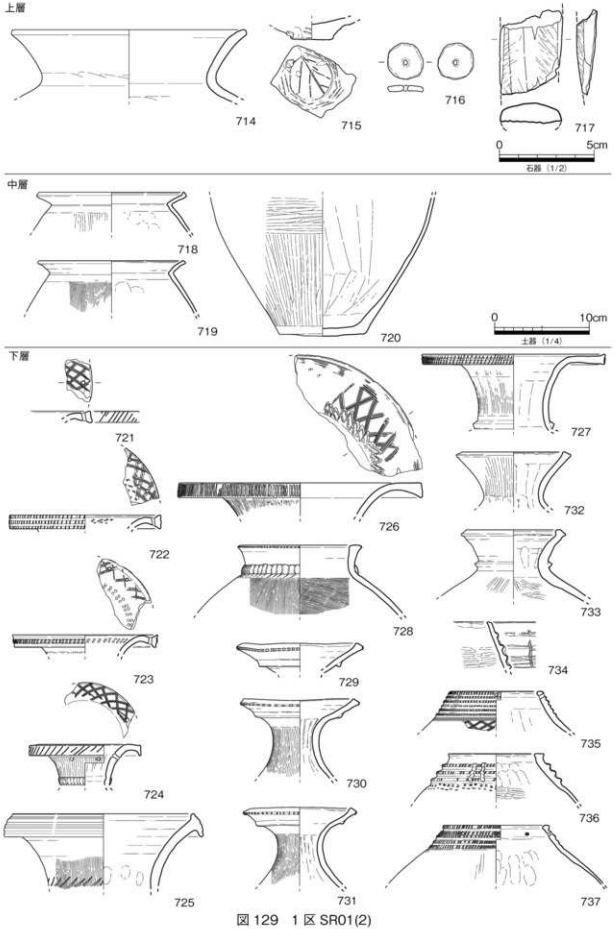


図 129　1 区 SR01(2)

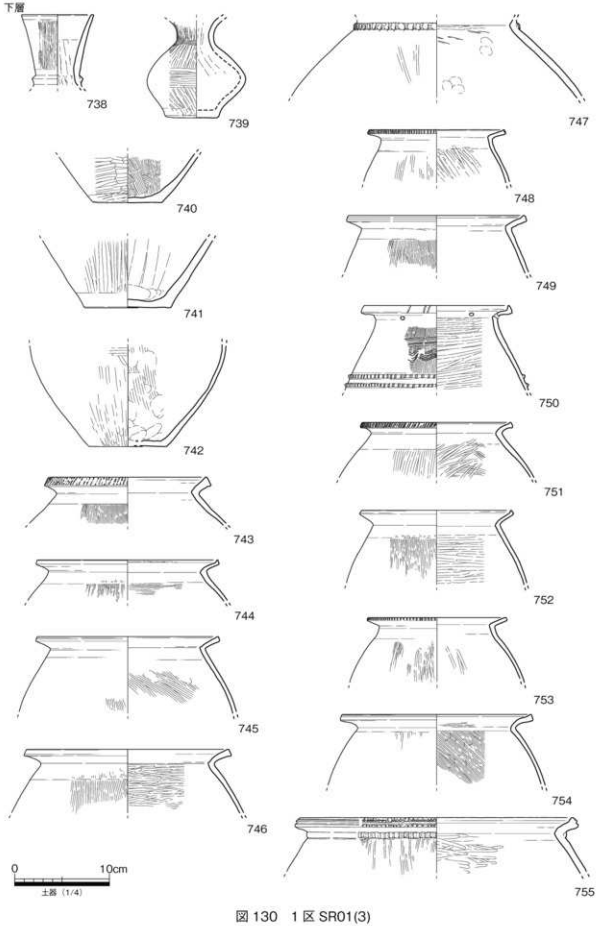


図 130　1 区 SR01(3)

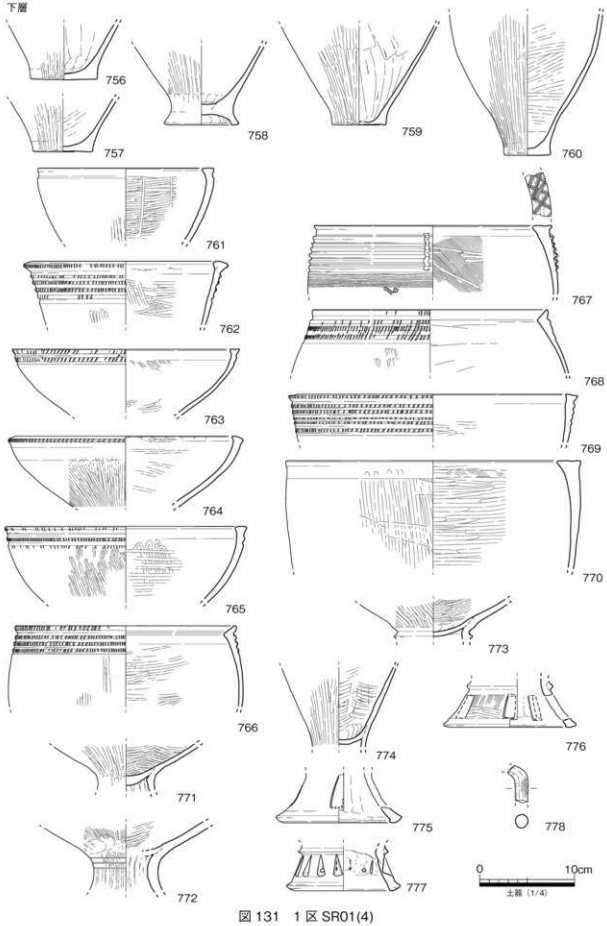


図 131　1 区 SR01(4)

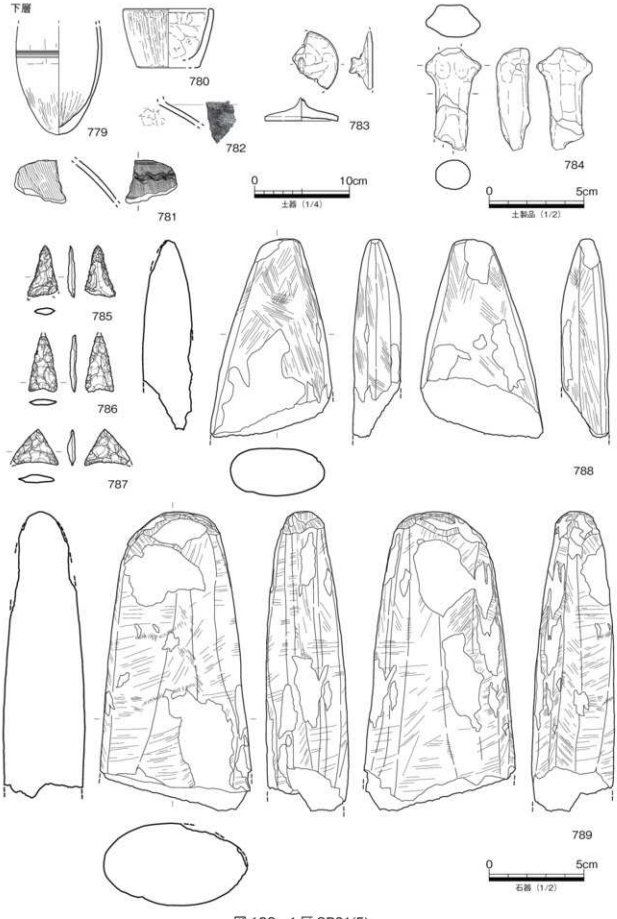


図 132　1 区 SR01(5)